

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九七七号



日川協加盟

No. 977

平成二十年度六賞発表

十月号

第14回 川柳塔まつり

《同人総会》

と き 20年10月5日(日) 午前10時～11時
ところ ホテル・アウィーナ大阪 3階 生駒の間
(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車・TEL 06-6772-1441)
議 事 平成19年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成20年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会
ところ ホテル・アウィーナ大阪 4階 金剛の間
表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・樺櫨賞・一路賞・
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。
おはなし 「薫風さんさん」 楽原道夫氏
兼 題 「奏でる」 (大阪) 鴨谷瑠美子 選
「天 狗」 (兵庫) 北野哲男 選
「従 う」 (神奈川) 小野句多留 選
「プ ラ ス」 (島根) 三島淞丘 選
「ぎりぎり」 (青森) 相馬銀波 選

事前投句締切りました

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正午(午後4時半終了予定)

会 費 2,000円 当日いただきます。
(記念品:改訂増補『橘高薫風川柳句集』全句索引・他呈)

《懇親宴》

と き 同 日 午後5時～7時
ところ ホテル・アウィーナ大阪 3階 葛城の間
会 費 7,000円
宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8,000円(朝食付き)

◇懇親宴・宿泊のご送金(句会費除く)は同封の払込用紙でお願い致します。
◇記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人でも多くの方々
のご参加をお待ち申し上げます。

主催 川柳塔社

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号201
〒543-0052 ☎06-6779-3490

誠心誠意の遊び心

河内 天笑

京都の或る老舗生菓子メーカーの社長さんの心意気を見せていただき大いに教えられ感動させられた事をお伝えしたい。NHK深夜テレビ「プロフェッショナル」九月十六日放送分の見聞記。

父を受け継いでかれこれ五十年になる山口富蔵氏は七十一歳、「お客様と菓子の出会いは一期一会、心に残る出会いを提供したい」という信念を持っている。この日の注文主は源氏物語をテーマにした仲秋の茶会の菓子。誠心誠意をこめた遊び心が動き出す。早速源氏物語を繙いて「夕顔」に思いが至る。

恋多き光源氏がその頃足繁く通っていた六条に住む女性に逢いに行く途中、五条に住む乳母の病氣見舞に寄った折、すぐ傍に檜垣のま新しい垣根の家が目につき簾の向こうに女たちの影を見つめる。「どういう女達なんだろう」源氏の君は好奇心をかき立てられる。

垣根には鮮やかで青々とした薬草がまつわり延びて白い花が楽しげに咲いている（「夕顔」のはじめの部分）。山口氏は「これだ」と決めて製作にとりかかる。仲秋の事とて餡を淡いみどりの葛の表で包み、野分を思い浮かべせるように靡かせ傾きを持たせる。あとの一つは米の粉で作ったふわとした薄い板状のもので丸い餡を挿む。その表側に垣根を思わせる焼印を押したシンプルな仕上げ。試作品と対面した発注主は富蔵氏の心と技に感動、即決となった。

お茶会で客たちとの一期一会を果たした菓子は深く心に刻まれるものとなった。シンプルでいて心ずくしの味わいあるものを生涯つくり続けられるであろうお菓子の匠に拍手を送りたい。

社保庁も農水省も死に給え

天笑

どいつもこいつも欲呆けで恥知らず

〃

キタノタケシよニッポンを変えてくれ

〃

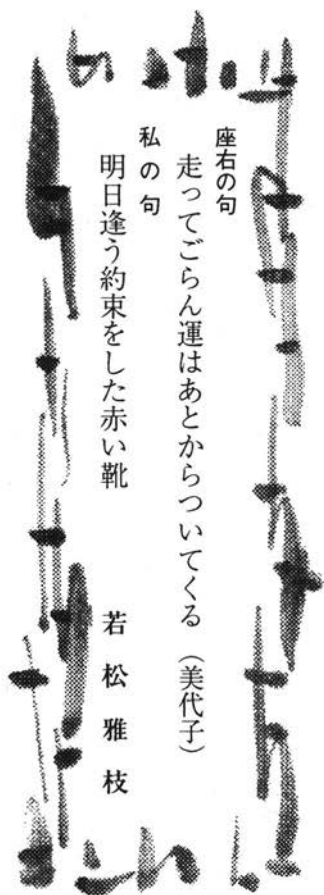
三杯酢 月下美人は味もよし

〃

好き合うた人と生涯ひとつ屋根

（武庫坊さんを悼む）

〃



座右の句

走ってごらん運はあとからついてくる (美代子)

私の句

明日逢う約束をした赤い靴

若松雅枝

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「立杭登り窯」

■巻頭言 誠心誠意の遊び心	河内天笑	(1)
薫風先生に学んだ十年	前 たもつ	(2)
川柳塔(同人吟)	河内天笑選	(4)
川柳塔の川柳讃歌 (46)	木津川 計	(45)
自選集		(46)
温故知新		(49)
水煙抄	小島蘭幸選	(50)
麻生路郎句抄		(69)
愛染帖	新家完司選	(70)
平成二十年度 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞		(74)
俳風柳多留 一篇研究 39		(84)

薫風先生に学んだ十年

前 たもつ

NHK文化センターで、平成六年四月から約十年間、薫風先生に指導していただいたことはとても幸せでした。

その間、言葉では言い尽せない多くのことを教わりました。一番の印象は、月二回、六句から八句もの句を添削して、一人ずつ句評をしていただいたことです。今思えば厳しい添削句評をしていただくことで、川柳を知り、自分の句を高めることができました。また人の句評を聞くことがとても勉強になりました。

毎週説明される二十句はとても魅力的でした。それにもまして、先生の口からポンポンと出てくる川柳は、新人の私にとって新鮮で体の中に溶け込んでいくのを覚えたものです。

「酒」の題の時は、「酒とろりとろり大空のころかも」(路郎)「二合は多いと二合飲んで寝る」(周魚)「友だちは男に限る昼の酒」(水府)の句を先生の名口調で話された。

先生は川柳は穿ちであると常々口にされてきました。栗谷春子さんの「再会は初対面より恥ずかしい」という句を何度も取り上げら

檸檬抄「うろうろ」	高瀬霜石・木本朱夏共選	(86)
「不意」	伊藤寿美選	(88)
一路集「公園」	岸野あやめ選	(88)
「グラス」	伊勢田毅選	(89)
初歩教室「なげ」	三宅保州	(90)
秀句鑑賞「同人吟」	西内朋月	(92)
「水煙抄」	喜田准一	(94)
九月本社句会		(96)
追悼 春城武庫坊氏を悼む	長浜美籠・奥田みつ子	(100)
■エッセー 切字私見	早川清生	(102)
各地柳壇（佳句地十選／三好專平）		(104)
柳界展望		(119)
十月各地句会案内		(120)
■編集後記（ひとこと／山口光久）	希久子・朱夏	(122)

座右の句

秋の天ゆっくりいのち裏返す

私の句

善人にされて毎日忙しい

（希久子）

木下敏子

れたので、穿ちの句として今も鮮やかに頭に残っています。

穿ちについて、「真理や権力をうがち、生活や人情をうがち、恋や感性、死までうがつ」と書いておられますが、私は「人の世や嗚呼にはじまる広辞苑」の句を穿ちを考える手本としています。

辞書を開きなさい、「辞書の散歩」は大事なことあるごとに言葉の蓄積を力説されました。「母刀自の在せし頃の御御付け」は辞書の散歩の産物であると話されたことを、印象深く覚えていきます。

また、新しい句をめざせと指導していただきました。先生自身の句「つらら解けTip Top Tap 珈琲館」を発表された時は、斬新さに驚ろかされたものです。

先生は個性ある句を生むことをめざされ、その人に合った句の指導をされてきました。平凡な私の句は余り注目されることはなかったように思っています。

字の間違い、選の仕方、句の読み方まで、個人的にも厳しく教えていただいたことは、今になってとても有難く思っています。

今手元にある添削入りの葉書二百三十枚、二百六十枚ほどの手書の資料は私の宝物であります。時々出して読み返しています。

添削の葉書に恩師いまに生き たもつ



河内天笑選

東京都 岸野 あやめ

くだおれ太郎は潔い男
出来るならしたい納税ストライキ
お説教ばかりなさる靈感師
病院中巡り健診やとと済み
潔癖な人ほどかかる認知症
果物にある青春期爛熟期

和歌山市 木本朱夏

エコバッグ格差の中身知っている
パンばかり食べて日本が背負えるか
線引きをされていじめに遭いました
笑い皺きれいに歳をとりはった
猫の舌ざらりと明日は雨だろう
シャッター通りの物憂い午後のハワイアン

尼崎市 軸丸勝巳

みな大人もう孫も来ぬ夏休み
暑中見舞老老ばかり往き来する
物価高埋蔵金も底が見え

八月の黙祷重し生き残り
お早うとひと声かけて花に水
薄型をそろそろ買えとかすれ出す

鳥取市 植田 一 京

今取れの貝で嬉しい海の宿
掛け声のリズムに活気貰い受け
ゆつくりと歩けば見えるものがあり
父さんの叱言夕立みたいだな
幾つもの橋を度胸で渡りきり
思い出の場所に時どき行ってみる

高石市 浅野 房子

故里に味方と呼べる人はない
期待などしないが冷たすぎないか
肝心なもの買い忘れ菓子を買う
春を待った心で秋を待っている
他人から受けぬいじめを身内から
ひらめきが消えると老いは加速する

犬山市 関本かつ子

気の合った人の訛りは気にならず
もう少し寝かせてほしいせみの声
逆上がり少し助けて誉め上げる
夏休み大きくなった靴並び
なす漬を先に食欲誘い出し
稲妻もどうぞ恵みの雨を待つ

羽曳野市 徳山みつこ

エコライフ早寝早起しています
まどろみの枕がヒントくれました
大食い大会やめませんかテレビ
鬼やんま巷の修羅に涙する
選挙ちらつて政治が揉み手する
大切な遺産二つの爆心地

弘前市 高橋岳水

懸命に生きて尊厳死を願う
飽食の街に根付かぬエコライフ
欲に目がくらむと見えぬ崖ッ淵
黎明の空にひと日の無事祈る
老いしかなうすばんやりとなる記憶
妻の手の平を出られぬ定年後

大阪市 谷口義

肉眼で見えてる今が面白い
切り札を今は使わないでおこう
昔も今も血が騒ぐ人がいる

何といいましよか足がもつれます

本日が中途半端なまま終る

その中の一人と終電車に乗る

枚方市 伊達郁夫

止まつてる時計の下で昼寝する

仏壇に菊一輪の秋を挿す

折り返し点で貰った軽い靴

指切りの汽車を今でも追っている

諦める酒が逢いたい酒になる

独り身の強さ弱さを曝け出す

堺市 柿花和夫

カミナリにも避雷針にもなった父

妻の愚痴素面で聞いて暑気あたり

オーバーに褒めてひと枝もらい受け

まっすぐに生き年金で蛇行する

使わぬと効き目なくなる惚れ薬

省エネと手抜きはちがうチン料理

藤井寺市 太田扶美代

朝顔の花より先に目が覚めた

どこからを余生と呼ぼう蟬時雨

悲しみいっぱいポケットがパンパン

冷静にゴキブリの死を見届ける

月おぼろ甘えてみたい夜がある

駈け足でまた八月がやって来た

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

空っぽになるまで食べるピーナッツ

ここ一番背中を押して下さいな

指切りと言う約束もあるのです

まだ何か足りぬと匙を舐めている

大阪の人だとわかるまけてんか

誰よりも早い拍手をしてやろう

大阪府 坂 裕之

嫁の留守料理自慢の腕がなる

年老いた猫がなにかを言いたそう

飛び立った雀は恩を忘れてる

苦しくて辛い朝には背伸びする

爺は僕ばかりは婆ちゃん好きなんだ

できること先ずやってみることにした

尼崎市 山田 耕治

これからは猫の勝手を見倣わん

ひとりだけ誘うわけにはいかぬお茶

パンツまではかせて犬をいじめている

しょうもないテレビ芸人だけ笑い

講釈の多いタイプは嫌いです

世の中は広いうわてがたんという

大阪府 米澤 淑子

通販の健康器具があくびする

引けば抵抗雑草の意地っぱり

目が合えば笑ってしまうお人好し

風よけの少し太目の妻で居る

蓮の葉の蛙も祈る八月忌

食べること忘れた時は仏さま

寝屋川市 森 茜

あき瓶の底から夏日反射する

紋服の人もひとときかき氷

へそ曲がりの胡瓜ぬか床埋めている

ボールペン心を込めて署名する

相席のおばちゃん鮎をくれはった

何となく気まずさ残しすれちがう

鳥取市 近藤 佳子

雨あがりあじさいの青極まれり

曼珠沙華しゃきつと腰をのばしてる

群れて咲くさびしがりの曼珠沙華

曼珠沙華赤い気迫に満ちている

煩惱の抜け遣らぬ数珠繰っている

おばあちゃん元氣ですかと来る雀

大阪府 近藤 正

氷河解凍砂漠拡大青い星

新組閣増税論者幅効かす

経験が人の年輪だと判る

予報士が謝るくらいなら許す

障子貼る仕事つくって孫帰る

地震波をキャッチしたのは中ジョッキ

さいたま市 八田 敏

五輪開会十三億の意地を見せ
国威信かけた五輪に民犠牲

この暑さ負けぬ菊には作り甲斐
一周忌妻待つてるかこの俺を
作るより菊見る歳か八十路坂

さいたま市 星野 育子

深く散ってみたいと水中花

毒舌の裏に愛情隠れてる

アドリブが上手い男は嘘上手

酔わない人と飲む酔えないままに飲む

日替りのランチが好きな独り者

東京都 清原 悦子

秋の音残して枯葉宙に舞う

朝市は夜露に濡れた菜が並び

わらべ歌母の背中が懐かしい

梅干しに今日の体調聞いてみる

お留守かも知れない里の墓参り

横浜市 菊地 政勝

波風を立てた人だが過去のこと

煩惱を抱えた川が蛇行する

嘘に嘘重ねて墓穴掘っている

前向きに生きて笑顔を絶やさない

我が家には無駄と判った自家用車

横浜市 小野 句多留

葬儀屋に夏枯れのない会者定離

子の花火きれいすごいがあきてくる

図書館に空席のない夏盛り

挨拶は先手必勝だと言う

少しでも動けば汗が出るメタボ

富山市 島 ひかる

乱筆を押して札状だけは書き

幽玄の世界に遊ぶ琵琶の音

紫外線怖くて忍者服になり

女下駄甘え上手になってみる

お月さまあなた愛していいですか

静岡県 蘭田 獏 杏

天引きで植山行きを急かされる

おやあんたも私と同じ犬嫌い

談合で僕等はみんな生きている

瓜二つ悪いとこだけ良く似てる

政争でもみくちやになる聖なる火

可児市 板山 まみ子

この人ともう歌えないレクイエム

若い身を癌がつれ去る不条理さ

中国の矛盾チラホラ見る五輪

若返り無理と知りつつ励むヨガ

犬になりコブラにもなりヨガの午後

犬山市 吉田 幸子

京都市 坪井 孝一

シニアグラスもう離せない嫌いでも
涼風へ至福の朝の一寝入り

スッピンのおいを綴る句にすべて
しなやかな乙女の詩の筆づかい

山頂の涼気忽ちもやで消え

愛知県 早川 遯行

苦しさも時を過ぎれば懐かしい

ブレーキを踏むのが少し遅かった

中年の悩みフアスナー掛け忘れ

いい距離を保ちながらの飛車と角

酔うとすぐ昭和が口をついて出る

京都市 三宅 満子

猛暑日はビバルデイの冬など聞き

ばっさりと予算削減若い知事

充電のほすがお疲れ休み明け

球児らの円陣の声天を突く

シニアだと堂々と言う映画館

京都市 榑本 宏子

夏のしこり抱えたままの曼珠沙華

すすき切るハサミ車に入れたまま

雑学はクイズで詰める知恵袋

ねずみどし中ほど過ぎてさび落し

火の車夢と若さで楽しまん

達者でいる幸せみんな気付かない

あの指に止まったばかり火傷した

変化球投げ合っている会議室

鈍行の風と気安く友となる

ライバルと妻が微笑む何かある

京都市 高島 啓子

忌を重ね仏はほとけらしくなる

荒波をくぐり光ってくるうろこ

民営化ポストは中立を通す

棒読みの判決文を聞いている

四条寺町インド料理で充電す

亀岡市 井上 森生

遥かなるいのちに逢える屋久の森(屋久島 4句)

苦の山を耐えて歓喜の太古杉

縄文杉に逢うて寿命が太くなる

飛魚も芋焼酎も好きになり

コンチキチン音色の魔法身を癒す

長岡京市 山田 葉子

炎天下の化粧塗つても叩いても

コンチキチンゆかたも恋をしています

ATM言うてほしいなあがとう

若い日のメロディ沸き立つクラス会

叱られた先生ばかり覚えてる

大阪市 板東倫子

大阪市 大川桃花

道の駅のグルメは冷やしトロロそば
語り部のように愚痴だけ言いに来る
ざつくばらんと言うが出来かせ口まかせ

凄腕の女は孤独恐れない

原爆忌涙は涸れぬ六十年

大阪市 榎本日の出

苦勞して生かされている高齢者

毒入りのギョーザわたしも食べました

気休めに飲まされているコラーゲン

見た目には夫唱婦隨が匂つてゐる

お棺より大きなベッドに眠つてゐる

大阪市 平嶋美智子

エネルギーまだ有る何か探さねば

ごつごつの手だから握手気がひける

働いた手だねと撫でてくれる人

夏のエコ稼いだ団扇ありがとう

熱中症飲んでおさえた二リットル

大阪市 津守なぎさ

いとおかし入道雲の七変化

泳げないビキニプールをのし歩く

メイドインジャパン下着は見せられず

脳トレにクイズ番組見逃さぬ

ちぐはぐな服を着こなす若さだな

孫を釣る年金徐徐に減らされる

登りつめ薄い空気にさらされる

へそくりは背表紙見せぬ本の中

電柱の影にも縋る炎天下

ツァーの蛍時間通りに飛んでみせ

大阪市 奥村五月

後期高齢うまく使えば知恵袋

酒食事僕の楽しみ取るお医者

氏神も今は悲しやダムの底

ウンうんと夫何時もの生返事

お立台殊勲に光る背番号

大阪市 岩崎公誠

同情で拾った猫が威張り住む

莫山の墨鮮やかに酔わされる

デジタルで合成されたホシの顔

近いうち地球も後期高齢者

丑の日にうなぎは食べぬ僕の意地

大阪市 小谷集一

ほどほどの欲があるから生きられる

美しい人に見とれて隙だらけ

告発と言う爆弾を持つパート

デパートへ毎日避暑に行くおしゃれ
自分では若いつもり派手なシャツ

大阪市 鶴田遠野

酷暑の夏に荒行の休肝日

時効だが覚えています貸した金

嗅覚も鈍化してきた倦怠期

浪速の顔に置いておきたいくらいだおれ

豪速球の愛を投げ込む一目惚れ

大阪市 古今堂 蕉子

人間に生まれさまようけもの道

それなりに全身にきた加齢症

もつれた糸ほどくにパワー何倍も

夏休み五色の笑い声が来る

時間差で笑うて脳も期限切れ

大阪市 松尾柳右子

プール中身動き出来ぬ人で込み

暑い中近くのポスト消えていた

久し振り雨が温度を下げてくれ

省エネに電灯消して涼しいよ

エコバッグ持っていたのに出し忘れ

大阪市 岩崎玲子

ケイタイは便利なくても生きられる

若者は進化しそうな指を持ち

ケイタイを持たずのんびり暮してる

財布にはいつもテレカが入ってる

年寄りのケイタイいずれ迷子札

大阪市 福岡末吉

無調法なりに妻の背摩るなり

ひと言で僕をその気にさせる妻

人生をひと踏ん張り吉に向け

若者に負けん気起こしけつまずく

スキャンダル浮上あつちでもこつちでも

大阪市 升成好

女房が静かな時は食べている

紅を引く妻の偽装は見逃そう

揚げたてをしゅわっと食べる海老フライ

よく笑う人のまわりに輪が出来る

先ず乾杯つもの話はそのあとで

大阪市 小泉ひさ乃

人ひとり許し自分が救われる

無防備な顔で居眠りする夫

夫に内緒モデルルームを見て帰る

まだ喜寿よ手習いもする恋もする

病院前私残して皆降りる

大阪市 熊代菜月

名月について大声で妻を呼ぶ

過疎すすむ村に赤子の声がする

フラダンスまだ青春のど真ん中

雷に太鼓も止まる夏祭り

名物の駅前ラーメン今日消える

大阪市 小糸 昭子

橋下さんなにわおこしに顔譲り

電気代惜しんで家で熱中症

肉球を押して貰った猫パンチ

何時の間にお気に入り椅子爪研いだ

有吉の複合汚染読み返す

大阪市 渡部 さと美

涼くれた遠雷といういい枕

蛙だけメスがでつかいの可笑し

街路樹よお前も不眠症だろう

負けん気を压えた靴のひもが切れ

国産レモン皮の端まで捨てられぬ

大阪市 神夏磯 典子

ころばせて心の裏を見ることに

羊かんを突き刺している妻楊枝

ばつさりと注文どおり散髪屋

ボタン一つ外せば少し楽なのに

斜めから見たら意外と美しい

大阪市 井丸 昌紀

言い訳が鮮やか過ぎるのも疑問

おばちゃんの喋りに負けた蟬の声

日和見な男が好きな立泳ぎ

主義主張全然違う無二の友

千円になつたらもらいたいタバコする

大阪市 中村 れんげ

虫眼鏡もって保険の説明書

嘘みぬく眼鏡を母がもっている

点滴は生きろ生きろと言う雫

点滴を連れて廊下を歩いてる

もうとまだ目線を変えて生きる人

大阪市 森田 明子

悪筆にめげず手紙を書いている

自転車で行く燃料は体脂肪

ひとつ部屋仲良く暮らすこともエコ

まつすぐな道で迷子にまたなつた

わたくしを辞めたい時がたまにある

大阪市 伏見 雅明

暗黒の世界楽しむ深海魚

家中が手を打ち囁す初歩き

何もせぬ夫が文句だけを言う

嫁がせてわずかな酒に酔っ払い

顔埋めわつと泣き出す母の膝

大阪市 川原 章久

円満に暮らしてまっせ一人者

ふんいきに飲まれて汗が吹き出てる

ドロンは駄目携帯電話追うてくる

千手観音千の願いは多すぎる

血で悲鳴あげる看護士まだ卵

大阪市 池上 清 治

食べるのがお目当て花の寺ツアー

手間かけた料理五分で食べ終り

幕引きが迫り必死の拉致家族

五割引き目玉の品は数がなく

トラ逆転妻に笑顔がやつと出る

大阪市 榎本 舞 夢

生む時の苦しみなんかすぐ忘れ

おしゃれして出かけることが多すぎる

丸裸にされて度胸が湧いて来た

度胸さえあれば離婚をしています

心配を語り合う内恋芽生え

大阪市 津村 志華子

風渡る棚田はすでに秋の彩

豊作を希うて稲の白い花

静寂へ読経流れる萩の寺

かげ口を聴いた小耳がむず痒い

漁火がゆらゆら旅情深くする

大阪狭山市 矢野 梓

風鈴に心安まる熱帯夜

炎天下思考回路が干涸びる

下戸もいるお墓が酒を浴びせられ

カタカナのメニユー気遅れするばかり

聞き上手に一部始終を喋らされ

池田市 栗田 久子

月面の陰は裸身をさらすごと

満月もきつとお神酒がほしいはず

十五夜は団子とススキきぬかつぎ

どの人も自分が好きで生きている

ほっとけといわれほっとけはしない

和泉市 横山 捷也

稲光妻が幼い顔になる

一眠りすれば忘れるほどの愚痴

でこぼこに並んだキュウリ無農薬

新聞に包んだ野菜新鮮だ

店を出てから言訳を考える

和泉市 西岡 洛 醉

散歩道野良犬出合い身構える

カレンダーの赤丸付けて妥協する

淡い恋聞こえて来そう里の夏

メタボ腹撫でつつジョッキ夏を空け

髭伸びるほどに積金貯りや良し

泉佐野市 山本 蛙 城

赤い羽根つけて鼻唄出そうなり

もったいないがたった二人の零余子飯

菊活けて明るい記事をさがす朝

嫌な話引き裂くように鵲高音

ちよっと手を結びたくなる紅葉狩

茨木市 藤井正雄

無鉄砲いい度胸だと誤解され

痛し痒し親と同居は考え中

スキヤンダルどこ吹く風のサンガラス

ゴールイン抱えるように出る毛布

勇気ある本音社長が高く買う

交野市 山川日出子

赤銅の選手涙の砂袋（甲子園）

トンネルを抜けたら海だ孫歎声

ばあちゃんの内緒知つてゐる額の裏

東京の長い行列新ケイタイ

芽が出たよ少女がくれた柿の種

交野市 森本弘風

禁酒中冷えたビールは酒でない

ダイエツト減り過ぎるのも気に掛る

過去帳へ迷わぬように盆提灯

仏壇に父母居ます盆供養

シンクロの技はプールに美脚植え

河内長野市 村上直樹

まかしとけ胸を叩いてからの修羅

言い負けて悔し紛れの高笑い

エコライフ素顔美人に惚れなおす

走馬灯しみじみと酔うひばり節

地下茎のいつか天下を取る気概

河内長野市 水谷正子

クーラー様お蔭で夏を生きてます

日本のすっぱいを見る五輪なり

鳥の巣に日本の頭脳それみたら

すさまじい外交もある水面下

汗かいて一生懸命寝ています

河内長野市 植村喜代

幸せはいつも里山月が冴え

バス停の横に来る人さへ怖い

もつては死ねぬが老いにも金が必要

自然の力に勝つ者はない

悩むだけ悩んで逃げ場ない地球

河内長野市 山岡富美子

みなどこへ行くの始発が混んでいる

八月のぐったりしてるカレンダー

風船がしぼんで終わる一人旅

年金に紐がついてる引き落とし

猛暑日のボディープローが効いてくる

河内長野市 井上喜醉

笑うまで時間の掛かる遠い耳

グッピーが増える我が家は水族館

掬われて金魚疲れる夏祭り

内地産だけで鰻が胸を張り

夏バテの阪神ドラマ起りそう

河内長野市 坂上淳司

雷神を挑発して臍ピアス

父親の拳固に母の避雷針

猛暑日をほくそ笑んでるピアホール

笑われてなんぼと笑う笑芸人

漫才師笑いとるのに四苦八苦

岸和田市 堤 植代

ひと雨がほしくて空を見つめてる

七夕に忘れられない事があり

エアコンをつけっぱなしでエコ出来ず

雨よ降れ水やりしたくない私

リハビリに励んで明日の夢を見る

岸和田市 岩佐ダン吉

とりあえず少数意見吐いておく

もう捲ることなき自分史のページ

また保留あなたの顔が見えません

汗流し性善説を説いている

食の不安休耕田に笑われる

岸和田市 井伊東吉

猛暑にも不平を言わぬ爽竹桃

喫茶店閉まる休日オフィス街

笏を持つ姿に似たるケータイ魔

クーラーの部屋は一つと決めている

住宅に見かけぬ駐車盆帰省

岸和田市 原 さよ子

欲の皮つっぱりどこか抜けている

詫びられて笑顔のできる年になる

半分にするアンパンのあんが落ち

畳替えした感觸の足の裏

ハンドルもたしかな嫁の太腕

岸和田市 森元ふみよ

母卒寿喜寿のせがれを叱咤する

定年で洗濯係命じられ

後期高齢未だに耐を強いられて

地球儀で知って驚く飢の国

ストレスでアイスコーヒ五杯のむ

岸和田市 小島笑司

梅雨明けが早いと雷暴れ出す

月の土地売買してる変なやつ

妻病んで友の励みに勇気づく

法華津さん馬と一緒に北京行く

欠水家で頼張る暑い夏

岸和田市 土橋房枝

今日もまたジャンプする気の土踏まず

千の風私を見てよ翔んでます

この胸に響く言葉に飢えている

お笑いで癌を直せと医者言う

寂しい日音音の躁になる

岸和田市 米富 淳風

猛暑には歳を忘れた服を着て

エアコンに捉まえられて動けない

夏痩せが一気に戻る食の秋

月曜日新たな気分まだなれる

時効の恋ゆるりゆるりと咀嚼する

岸和田市 雪本 珠子

潮風にわたしの心解き放す

リゾートで浮世忘れて羽のぼす

生活の匂い漂う街が好き

お若いと言われあらため歳感じ

人間の本心猫に見透かされ

岸和田市 林 力子

家計簿の安全弁を握る妻

父怒る入歯ガチガチ鳴っている

腹立てたときの返事は明日にする

リフオームで夢を叶えた終の家

憤懣をグラスに聞かす一人酒

堺市 源田 八千代

夢現信じられない突然死

自他共に百歳までを信じてた

遺影見て心置きなくお見送り

何処にでも自由に行けるありがたさ

無念の死世が世ならばと鶴彬

堺市 志田 千代

お師匠のコピー見ている書道展

命かけギネスブックを塗りかえる

譲られた席には浅く腰おろす

まだまだと絞り出してるマヨネーズ

オイという名前の妻になりました

堺市 宮本 かりん

回らない舌を時々もて余す

暗算をしてもう一度計算器

薄雲に紛れ気を吐く昼の月

うっかりと言った言葉をつかまれる

激震もあつた金婚祝われる

堺市 加島 由一

幸せは同期の集う甲子園

どの国の旗も平和に異議はない

飲むと決め昼間は汗をかいている

父さんが母に湯加減聞いている

延着の証明書持ち喫茶店

堺市 西村 りつえ

スパイスでだれてる脳に喝を入れ

うろついて浪費たのしく友が増え

すかたんな返事しだした遠い耳

ありがとう一言足せば目も笑う

点と線つないで探す置き忘れ

堺市奥 時雄

四條畷市 吉岡 修

おとなしい人探しては文句言う
二度と来ぬ決意で医者とかエンカする
食べるのが趣味のお方のダイエツト
国産の松茸ことしこそ食べる
人当りソフトだが過去語らない

堺市 矢倉 五月

目が覚めて夢で良かった認知症
訳有りで蟹道楽は娘の奢り
娘はパートわたしは孫と遊んでる
階段の手すりを意識しだしたな
聞き違い勘違いなどてんこ盛り

堺市 和田 つづや

貼り薬二日続けた背がかゆい
雷鳴に震える小犬抱いてやる
エコロジでも冷房は手放せず
ほほえんで暮す心のヨガをして
一秒の恵みおしんで生きてます

堺市 村上 玄也

美しい誤解のままで恋進む
懐が温いと滑らかな喋り
再生紙とわざわざ書いてある名刺
有名なお人と知らず話し込み
デパートで荷物持たされ払わされ

支持率を聞きに来られた覚えはない
ゆとりある教育とかもミスだった
生命線ゆっくりゆるり歩くべし
ユニークねと褒めてくれたら振られてた
贅沢な苦勞してはるもててはる

吹田市 穴吹 尚士

中流と浮かれた頃が懐かしい
本物の男の匂いする背中
真ん中に居てもトップの孤独感
捨てせりふ吐いて背中がうそ寒い
肩書きが消えて世の中見えてくる

吹田市 山本 希久子

芋洗い米研ぎ主婦として終る
すだれへちま日本の夏が消えてゆく
イメージチェンジできずだるまのままでいる
用意万端整えてから降り出した
デジタルの世をぎくしゃくとして生きる

吹田市 野下 之男

初恋を忘れさせない原爆忌
あの父がカラオケ歌いしんとなる
女房も埋蔵金は教えない
良い夢を見せてくれない熱帯夜
この世ではまだ鳴き足りん蟬時雨

吹田市 太田 昭

人間の渴きペットに癒される
大阪のおばちゃん鮎をただでくれ
腎臓で育った石を爆破する
自己紹介小さな嘘を混せておく
充電をして遅咲きの花を待つ

吹田市 瀬戸 まさよ

伸びすぎる長寿困惑する政府
水やりを助けてくれた雷雨さま
女ふたり悪口ばかり喫茶店
男性はこてんぱんです女史の群れ
口先で女を立てる男ども

吹田市 木下 敏子

なるようになると絵具も溶けてくれ
やすらぎの十指を合す盂蘭盆会
湯につかりながらの一句汗を掻き
のんのんと生きて水茄子今日も漬け
古希の坂越えてゆつくりする踵

吹田市 大谷 篤子

思いきり騒ぐ泣きたくなった時
あけすけで物怖じしない初対面
今日もまた中途半端なままに昏れ
騒がしい家族の中にいる安堵
かあさんに似てると鏡笑ってる

吹田市 須磨 活恵

美しい夕日にしばし癒されて
ふるさとは大海原に日が沈む
平凡な倅せでよしかき水
夏の恋終ってイヤリング外す
夕立にほっと私もひまわりも

高槻市 西谷 治三郎

力瘤もう出んようになり八十路
掃除より終わり気にするヘルパーさん
日本国旗と絆の意味薄れ
立ってなさい命令できる教師無く
年金の俺にも裏金すこしある

高槻市 井上 照子

暑すぎて蟬も昼寝か静かなり
焦げそうなマウンド国を背負う子等
娘の帰宅門限守れぬ訳があり
保険料後期高齢辛過ぎる
世渡りの下手な夫は誠だけ

高槻市 富田 美義

口下手ゆえ会話を避けてメールする
夫より必ず永く生きてやる
今宵また抱きしめている大吟醸
健やかに逝けよと無理なことを言う
あと十年いきても同じ僕だろう

高槻市 佐 甲 昭 二

高槻市 乙 倉 武 史

ライバルに楽屋見舞を先越され

ネクタイが要らなくなつてゆるむ類

古家に染みついている風の色

いざとなれば縋る近所という絆

乱雑に積んでほろくに読みもせず

高槻市 左右田 泰 雄

夏山の靈氣に触れて清々し

困つてもくじけず生きて来た自信

余生いまのらりくらりとして気まま

知慧ざかり何故どうしてと食い下がる

味方とは口先だけの無責任

高槻市 執 行 稲 子

ブル好き気合はせめて歩くだけ

バスデーせめて飲ませて糖数値

ハイタッチ夢でもしたい及び腰

親の倍生きた命を抱きしめる

遥かなる田畑安堵してUターン

高槻市 生 田 義 一

家計簿に婚五十年の歴史見る

携帯とゲームで世間知らず生き

趣味はなし日毎我が身をもてあます

夏本番起床ラッパは蟬の声

組閣終え総理自信の笑みこぼれ

臭いものに蓋中国の氾濫れ

血の滲む選手努力へ拍手する

極楽も地獄もこの世ある悟り

約束を果して肩が軽くなる

毎日を反省許りして生きる

高槻市 指 宿 千 枝 子

オリンピック敗者にもあるいい笑顔

口ずさむオオシャンゼリゼ蟬の声

けだるそうに猫が横切る炎天下

ポップコーンばあさんが売る夏祭り

扇風機から極楽のあまり風

高槻市 杉 本 義 昭

ふるさとの空には亡母の星がある

人間に戻る自由な旅が好き

嘘だらう眼鏡の奥が笑つてる

空蟬の姿眺めてそして秋

超うれしおたけび上げる金メダル

高槻市 峯 村 勲 弘

もてなしの心守つてくだおれ

ひたむきなプレーに出合う甲子園

日の丸を待ちわびているハイビジョン

高品位テレビが流す低品位

押してだめ引いてもだめの拉致の闇

高槻市 傍 島 克 治

言訳に想定外が多すぎる

はしゃぐほど空しさ残る送別会

おばはんのポッケにいつも飴がある

死語集め古き昔を取り戻す

はち切れる鬱の詰まったゴミ袋

豊中市 安 藤 寿美子

八十すぎ末期の覚悟まだ出来ず

温暖化地べたへ末期の水をやる

血圧に悪いが塩鮭塩昆布

病院で無罪放免アイス買う

よつほどの口車でも乗る気なし

豊中市 江 見 見 清

透きとおる命が躍る鮑屑

気にかかる人への土産決まらない

木の芽和えただ一口の味で良い

引き合いに出すなお隣など知らん

出来すぎも出来なさすぎもいじめられ

豊中市 水 野 黒 兔

日記には過去 手帳には未来記す

マンションの四十階に早い秋

夏の風ねこに教わる通り道

八月の蟬は今年も熱く鳴く

悩み事鈍感力で吹きとばす

豊中市 坂 上 高 栄

サミットにまるで戦の前夜祭

穴を出た広大無辺の大字宙

一生を土中暮しの無為無策

おしゃれより料理上手な嫁ほしい

サミットに拉致の議題はうとまれる

豊中市 山 門 タ ミ

蟬や虫啜えて見せるうちの猫

腹出して蟬の骸は空しすぎ

老醜にせめてさわやかピンクシャツ

今日の事あの世の亡夫へ糸電話

世話になる娘一番愛おしい

豊中市 藤 井 則 彦

あべこべのタイプの友と馬が合い

定年の夫が使い回しされ

酔い痴れて猫も目閉じるヴィオラの音

子に孫に語る八月十五日

おとといの日記が書けた大丈夫

富田林市 片 岡 智恵子

百点に大分足りない妻でいる

忘れられそうで時どき樹をゆする

あみ棒の休む間のない亡母だった

極楽を予約しておく寺まいり

迷い出せば余計迷路にはまり込む

富田林市 稲川 恵 勇

ソフトクリームひとつ嘗めあう仲になる

近所では良いひとと言う殺人鬼

ひと言が多く出世に遠く居る

まだ娑婆に未練たんと墓を撫で

左遷地の地酒でいのち研いでいる

富田林市 大橋 鐘 造

子に残す足跡しっかりとつけておく

何騒ぐ星の瞬き程の世で

夢一つ見果てぬままに黄昏る

人気者裏で孤独に耐えている

口下手が書いた歯切れの良い便り

富田林市 中井 ア キ

ひよっこりと出会ってひよんな事になり

くぐらねばならぬ炎の輪がひとつ

さりげなく腕組みにくる十三夜

あけすけな人で心が掴めない

浄瑠璃の三味が恋路を熱くする

寝屋川市 籠 島 恵 子

夢を食う猿は足し算が得意

窓もドアも全開暑さに負けている

付き添いはどちら病院出るふたり

近ごろは飛んでくれないシャボン玉

保存食と忘れる冬瓜にカボチャ

寝屋川市 太田 とし子

ボーナス払いフンと年金通り過ぎ

黙って負けて黙って勝ったひとり言

末期高齢気兼ねしながら治療院

粗食には慣れたばあちゃん菜っ葉好き

バーゲンのチラシに頼る年金者

寝屋川市 森 田 麗

プレッシャーが胸にツンツン米を研ぐ

子の帰省丸い西瓜を買いましよう

化粧してバランスが良いワンピース

三面鏡に今日の私を見抜かれる

お墓にも日傘さしかけ草を引く

寝屋川市 平 松 かすみ

切り刻むような音するMRI

突然に握力萎えてどうしよう

母の娘で尿の検査もしておこう

輪切りした脳の結果を待つ長さ

ふる里のお味噌で夫は暑気払い

寝屋川市 富 山 ルイ子

お返しと思う介護のお機嫌かえ

懸命に神のごとくに看取る友

優しさを秘めた介護があたたかい

家族守るためにせつせと貯めている

ひとときの安らぎ貰う朝の庭

羽曳野市 永田 章 司

フルムーン久し振りねと旅支度
クレームがヒット商品生みの親
戦後の日肉なしカレーうまかつた
勝ち組のつもりが集うクラス会
文句たれ副会長に押しこめる

羽曳野市 吉村 久仁雄

なるようになって自分史華がない
理科系もすぐに玉虫色に慣れ
陽が雲に隠れてうずくさぼり癖
五時からの主夫の背中を押すお酒
雷鳴のようなクシャミをして独り

羽曳野市 酒井 一 壺

すばらしい彼の生き方真似出来ぬ
お祝いの席で言葉の間違える
咄家はほほの動きもすばらしい
あこがれて建てた家には子が住まず
薬より君の心に労られ

羽曳野市 安芸田 泰 子

頼まれた人に背いた票を入れ
錠剤でしめくくつて宿の膳
惜敗の涙へ帽子目深なり
使い回し集めて盛った母の皿
今日からは後期高齢バーズデー

羽曳野市 吉川 寿 美

釉薬をかけてわたしを売りに出す
八月のあつい袴りよカンナ炎ゆ
夕立ちが残暑見舞をおいてゆく
ああ昭和愛のブルースしみじみと
幸せは毎朝爽やかな目覚め

羽曳野市 三好 専 平

パチモンをアウトレットと言うて売り
閑空に幽霊遊ぶ石油高
全減を玉砕とマスコミ書きつづけ
捨てるには惜しい本だが邪魔になり
ヘンシンをしてバカボンになりました

東大阪市 佐々木 満 作

五輪旗に世界平和のメッセージ
終戦日あの日も空は晴れ渡り
ひらがなで詫びればこころ軽くなり
あけすけな風が家庭を和ませる
飽食のつけ将来を飢餓にする

東大阪市 笠井 欣 子

探し物出て来てコーヒ倍の味
もう何もこわい物なし八十は春
血筋より他人に優しい介護の手
いじめたい応援したい子のデート
検診をすませギョーザの旨い店

東大阪市 北村 賢子

枚方市 丹後屋 肇

予定無い日はスッピンと言うお化け

苦しみは続き楽しみすぐに過ぎ

暑すぎて馴染みの野良も顔見せず

ときめきへわざと素知らぬふりをする

コツコツと真面目に生きるのがテーマ

東大阪市 久米 奈良子

呼びもどす術なくめぐる一周忌

孫の手の世話になります子の土産

さびしさと気楽さ同居させている

指五本素直に動く今日の幸

猫舌もヘルパーさんのさじ加減

東大阪市 米田 水昇

長老の胡弓身にしむ風の盆

夏休みやつと子供の顔になる

祭果て金魚の命持ち帰る

少子化でアットホームも薄くなり

落書で世界遺産も汚される

枚方市 寺川 弘一

料理学校お行きなさいと妻が言う

家庭菜園健全な僕の趣味

好きや嫌いの理由を言えと言われても

日記帳白紙のページ意味がある

ロボットにお世話かけます近いうち

超音波胎児の欠伸写し出す

国債の重みを背負う生誕日

アスファルト息たえだえの照り返し

イブニングドレスを襲うゲリラ雨

一言を足せば後ろが袖を引く

枚方市 海老池 洋

情報過多人をいらいらさすばかり

イエス・ノーはつきり言えぬ照れ笑い

ペンギンもストレスためる温暖化

幸福そうな振りをしたがるクラス会

誰だってルーズな面を持っている

枚方市 安達 忠央

ヒロシマのあの黒い雨忘れな

農機具のローンずつしり過疎の里

小雨降る格差社会があえいでる

胃カメラが露骨に見せた癌腫瘍

若葉冴え仏の笑みに見えてくる

枚方市 二宮 山久

孫台風やって来ますぞ夏休み

リハビリの甲斐あり右手初出勤

この猛暑乗り切る力このビール

お盆には帰ってみたい瀬戸の海

朝夕の暑さをさけてする散歩

藤井寺市 若松雅枝

診断の出来ぬ病は皆加齢

顔色で切り出す時期を探ってる

決断が鈍くて何時も自己嫌悪

親の目で見れば四十もまだ子供

公園で一人で食べるパンの味

藤井寺市 高田美代子

鳥の巣か北京か知らんけど熱い

待ってようそのうちリング紅くなる

夢の中のわたしはいつも二十歳

冒険をしてみませんか夏だもの

騙されてやったら造花うれしそう

藤井寺市 鈴木いさお

座禅組む脳裡にチラリ縄のれん

カルテにはどこにも癌と書いてない

煽てられついええ恰好をしてしまふ

欠点もないが魅力も見当らぬ

収穫のときを鴉に教えられ

箕面市 広島巴子

体育祭五輪の卵駈け回り

綱引きを犬の散歩で稽古する

ときめきのフォークダンスが初恋に

火の車日本大阪我家計

ここちよい風が詩人にくれる

箕面市 出口セツ子

夫より頼りにできる子が居てる

経済力なくて応援できぬ夢

子が居ないだけで淋しい盆休み

海外から心配せぬよう来るメール

優しくてパワーをくれる子が宝

守口市 井上桂作

逆転を信じ元気に生きるのみ

世渡りが下手で時代に乗り遅れ

人間が良いばかりなりだめ男

儚さは一直線に進むだけ

極楽浄土信じて生きて花の下

八尾市 高杉千歩

シナリオが狂うてばかり後期高齢

誤字脱字他人のことはよく分かり

五臓六腑薬を止めて凝視する

孝行に困まれ老いが加速する

大正の錆は大事に残しとく

八尾市 宮崎シマ子

危惧しながら息子のことは許す母

ブルドッグ頼りに女ひとり住む

真相を知ってる母の黙秘権

同級生の名がボンボンと出る友よ

お静かに認知の母がねたところ

八尾市 村上 ミツ子

夏休み孫へ財布のひもゆるめ
寸志でも僕にとつては大金だ
おなか減る体重増えるまあいいか
太つてただけで頼つてきてくれる
おはようの声交し合う朝の窓

八尾市 吉村 一風

家業継ぎ子是不況風もろに浴び
目も耳も老いて口先ばかりなり
自説伏せじつくりと聞く老いの耳
腹立てばゆつくり二回深呼吸
苦しかったこと懐かしく甦る

大阪府 桑田 ゆきの

メタボ腹忘れてビール一気飲み
大風呂敷ひろげて風に笑われる
うろうろとすれば近いと夫が言う
蜂にある使い回しの針の毒
炎天下あの日も蟬が鳴いていた

大阪府 野田 栄呼

無理せず明日を信じておく仕事
愛情に限界のある嫁姑
孫達に姑を伝えて手を合わす
カラフルに夕餉補う自家野菜
少子化に乗り子欠けてる秋祭

大阪府 澤田 和重

熱っぽく語ると未来ひらけそう
バーゲンで買うのは夫の物ばかり
空海が顔出しそうな高野山
主治医から優しくされるのも不安
母の手に移り笑顔の子に戻る

大阪府 初山 隆盛

焦げる夏七十八回乗り越える
川津波いきなり町の人を呑む
ブーメラン鉄砲玉に憧れる
カラフルなジョークに空気をませる
華麗なる寸劇に酔う万華鏡

神戸市 両川 無限

帰って来いと呼ぶふる里の山がある
食べ頃にいつも迷っているメロン
貧しさは言わず半分ずつ食べる
泣きボクロ笑うととても魅力的
言い訳が上手くて尻尾掴めない

神戸市 山口 光久

しぶしぶと領いたのが命取り
頑固な父も母の魔法に踊らされ
頑固さを頼り甲斐だと信じ込む
他人様に無頓着です意地っ張り
隠し事血圧計は知っている

神戸市 田中 章子

相生市 中塚 礎石

あすなろの木を前にして背が伸びる
初心者にトマトの赤は裏切らぬ

言わぬが花これも立派な自己主張

明日は我が身うまい話に乗るかもね
子へ孫へつなぐ家訓のない自由

神戸市 伊勢田 毅

核保有競う国家の格を問う

語り部の白髪が目立つ原爆忌

九条に喝を入れてる原爆忌

図書館で年金暮し涼をとる

五輪報道大本営を思い出す

神戸市 山口 美穂

死ぬまでは反戦の旗振るつもり

表彰台への道は語らずよい笑顔

ここだけの話どこかで聞いたこと

暦は秋まだまだ猛暑続きそう

明日のため水一杯を飲んで寝る

神戸市 山田 婦美子

労いの言葉に元氣もらう朝

惚けかけた頭が人を支配する

飲んだのか未だか薬に問うてみる

老人が老人介護する辛さ

正装をすれば体もしゃんとする

塩風に打たれ育った京生まれ

仏飯をこんもり盛ってきた嫁御

後家さんに圧倒されている隣保

茶の時間嫁のやさしいベルが呼ぶ

長屋の戸あけて只今つつぬける

芦屋市 黒田 能子

七合目あたりではっと気が抜ける

さよならの背中何かを言いたそう

住みつけ関西弁が標準語

源流の一滴長い長い旅

Uターン出来ぬ道だと分ってる

尼崎市(微) 春城 武庫坊

あと一花咲かせてみたい老い好み

多忙だから公園ベンチで考える

字余りの破調で漢字踊り出す

脳味噌が少し溶け出し物忘れ

不意のお客にあわてる妻の留守

尼崎市 春城 年代

通院に足を使っている強味

花競う町内平和な顔をする

振り向いてかけがえないこの世なり

あきらめと悟りに迷い込む真夏

鉛筆にも削りはじめの頃がある

尼崎市 長浜美籠

消費期限箱口令があるらしい
鬼灯が熟れる秋の陽もやがて
ケースバイケースと軽く逃げられる
聞かん気がいっぱい溜めている遣る気
先は先深くは悩まないことに

尼崎市 加川靖鬼

ドクターとナースに惚れて医者通い
大好きなケーキの名前猫につけ
未完成それでええのよ凡人は
半熟の夕陽を海が飲んでいる
ごきぶりも殺気感じて悲鳴上げ

尼崎市 林昭三

点滴が終わりましたと起される
塀沿いに僅かな日陰通院す
理由付け酒が毒にも薬にも
お手伝い勝手知ったる身の所作
我が里は事の始めは塩を撒く

伊丹市 山崎君子

この猛暑負けてはならぬひとり言
満足感鏡にはのほのとうつつ
甲子園テレビに写るとなりの子
原爆忘あなたの倍も生きました
朝の顔亡母そっくりと三面鏡

川西市 米原雪子

朝刊はスポーツ面を先ず開く
雨上り繁った緑逞しい
珍らしく片付いた部屋何かある
帰省の娘眩しいほどに成長し
逞しい商魂人脈を辿る

川西市 西内朋月

騒がしい輪からぼつんと外れてる
蛸焼きとおでんで騒ぐ缶ビール
タイプでは無いのに妙に馬が合い
天引きでいじめられてる高齢者
ごきぶりを叩きそこねた怖い顔

三田市 北野哲男

六十勝までは独走タイガース
抽象画みたいな川柳わからない
合掌と拍手は出来るわたしの手
そのもしも生きて手にした癌保険
指切りをした人出世してしま

三田市 堀正和

ユニフォーム汚さぬままに予選敗け
へまをした話はみんな聞いてくれ
二度づけはアカンとソースにもルール
ひと休みしたらと信号赤になる
お住いも高齢ですとりフォーム屋

三田市 久保田 千代

少年は越せない山もあるを知り
誘われて川の深さを知ること
見納めと言った亡母と見た花火
今はいま時代に添うて生きている
ねえなんでこんな人に人を殺せるの

三田市 石原 歳子

電話鳴り本のページの端を折る
電線の影でも歩く猛暑です
歯科医師に猫背を注意されました
いけないと書いてあるからしたくなる
お年寄公民館という居場所

三田市 上垣 キヨミ

知恵袋集めて過疎の村おこし
病院で俄かばあちゃん引き受ける
曲る背に課税が重くのしかかる
譲られた席へ素直にありがとう
今日もまた一人芝居に弾む毯

三田市 臼井 二英

悩む事日により瘦せたり太ったり
フリーハンドで直線書けるかやってみる
酔ってるかみるため立つて行くトイレ
宅急便用に置いてるハンコです
値打ちあるもののトップは愛だろう

西宮市 西口 いわゑ

ゲームだと思えば軽く生きられる
ピンチなどついぞ見せない母だった
どの道も意外なことにつき当る
鏡とや女の味方そして敵
オンザロック夢の一時ありがとう

西宮市 緒方 美津子

秋茄子が二つ二人で食べました
ティータイム赤ちゃん泣いてはい終り
大きな目の服を買うからまた太る
仲直り同じところで笑えます
ほつといてきゅうりはみんな曲りたい

西宮市 山本 義子

中ほどに本音入れとく日記帳
ご近所と中庸たもち日々過ごす
中吊りで世情のあらは読みとれる
中入りで着物美人が映される
中締め後淑女豹変踊らされ

西宮市 井上 松煙

犬連れて大きい夕焼けに溶ける
蟬しぐれ今わの恋の烈しさよ
飲むほどに当て食べていた腹まわり
謎めいたあの微笑みにまたやられ
ひらめいてくるのを待つて寝てしま

西宮市 牧 測 富喜子

蟬ないて夏の役者の揃い踏み
UFOが隠れていそう雲が湧く
止まり木の細さものかわ蟬密度
ふと出れば掴まれそうな積乱雲
何を守ってそんなに丸い背になった

西宮市 亀 岡 哲 子

水槽の透けて沢蟹子が産めぬ
性格は不一致でよし喜寿越える
家族愛深くて籠を抜け出せぬ
バージンロード娘の方が背が高い
白咲いて紅散り初める百日紅

西宮市 菊 池 トミエ

盆参り時間早めに檀家来る
施餓鬼料二霊の供養添えて出し
桔梗咲く熱さに負けず濃紫
熱帯夜クーラー止めて寝付かれず
熱い夜は食事の進む冷やつこ

西宮市 片 山 忠

サラ金のティッシュで擽むとむず痒い
素人に医者も薬も代えられる
お隣の境界線から掃く落葉
小煩いくせに呑み屋で気を遣う
やりくりは上手いが酒も減らされる

西宮市 秋 元 てる

善人に見えたか 荷物見て居てネ
老母の背を丸くしたのは誰だろう
穴があれば入りたいとは古風だね
水解と言うがしこりの見える声
食べるには困らぬ国の通り魔か

西脇市 七反田 順 子

白夜から戻るとオーラ待っている
ギャグ漫画残しあの世へシェーで行く
電磁波で頼らない脳刺激され
綾戸智恵元氣もらったコンサート
コンチキチ天神さんで福もらい

姫路市 古 川 奮 水

女房旅ひとり天下の午前さま
ムウムウでポニョポニョ踊り汗流す
幽霊は血の氣集める技がある
講演会空調が良し昼寝よし
朝日背に輝いている大漁旗

奈良市 天 正 千 梢

余計な事言つて地雷を踏んでいる
おそれなど知らぬ若さの特権か
十三年黄泉の旅路はどのあたり
むかえ水すればばちばち句が出来る
Uターン狸と友になりました

奈良市 米田恭昌

大和郡山市 坊農柳弘

ライトダウン風情をかます月明り

蟬時雨命を刻むかのように

無料バス老人ぶって気を遣う

顔つかるのを忘れてた美人の湯

母ちゃんの愛想でもっているお店

生駒市 飛永ふりこ

御家芸披露北京の開会式

やんわりと持って回って耳ざわり

紀州の海わたしの濁り丸洗い

小賢しい視線にわざと笑っとく

苦瓜のカレー残暑に立ち向かう

香芝市 大内朝子

限りある命へ悔いを残すまい

生き残る被爆樹からのメッセー

子を案じまだへこたれぬ縁の下

あたたかい暮しの音のする厨

人間の欲が仕掛けに落ちる罟

橿原市 居谷真理子

心して水を飲み干す原爆忌

美しい従姉妹と精進明けの膳

お金つてとても正直だから好き

募金する拾った金に少し足し

二代目の脇をうるさいのが固め

ねじれ国会同じ手口の鬼ごっこ

南極の水が溶ける地球危機

サプライズ裁判員の阿弥陀くじ

電子辞書八十路の脳トレあしんど

聞き役の位置で毒にも薬にも

奈良県 渡辺富子

使い捨てされた派遣が牙をむく

ちよい悪の男を許す昼の月

胃カメラが覗いた恋の雪崩あと

音なしの構えで骨を抜く女

流行を追うマネキンの無表情

和歌山市 福本英子

ピリオドはまだまだ花の種を採る

横丁の打ち水について呼び込まれ

昨日した約束なのに待ちぼうけ

涼を呼ぶ軒にゴーヤと豆の蔓

あの方もこのお方にも初盆会

和歌山市 玉置当代

孫たちと爆いだポルトヨーロッパ

作句する時間スイッチオンにする

シャワー全開夕べの夢を拭い去る

お互いの持病舐め合う昨日今日

果てしなき空へ小さな願いごと

和歌山市 古久保 和子

ヒートアイランド蟬が百倍暑くする
ザリガニを買わずに釣った夏休み
蟬時雨たまにおしっこかけられる
ママチャリの黒覆面がスーパーへ
もう秋の顔した雲に騙される

和歌山市 堀 畑 靖 子

残酷なことを言わせたのは若さ
本人にやる気ないのに押している
枝豆にビール我が家の幸福度
自転車に変え物価高のりこえる
情報過多わたし信じることにする

和歌山市 松 原 寿 子

山陰の人とわかった国訛り
木魚から飛び出して来た未来地図
ひとときの余韻と時間てのひらに
気まぐれな笛がふるさと恋しがる
微罪ふと零れた背なに眼が刺さる

和歌山市 武 本 碧

カラフルに生きて自分の彩探す
人生のそれぞれにある好きな場所
今日のうつ四つにたたんでくす箱へ
裏の裏見えて心に氷雨降る
滲み出る魅力に勝てぬ虚飾の美

和歌山市 喜 田 准 一

ハツとする目に輝きのある女
懸命なお世辞にもある生きる術
立泳ぎしながら出来る加減算
さり気なくすつと言われるブレッツシャー
艶話ちよつと混ぜてるティータム

和歌山市 田 中 み ね

笑いの種ふり撒き帰る孫と犬
笑い事でないと不手際さとされる
堂々と抜けたら呼名なさいませ
メンバーが揃い夜市へ傾れ込む
ぐちゃぐちゃとなつて猛暑の厚化粧

和歌山市 上 地 登 美 代

いい月だ暫し夜空にとけこもう
蟹だつて翔びたいだらう青い空
強く生きろと脈が私を叱咤する
地下足袋で稼いだギャラにおれはない
九回の裏にまさかが棲んでいる

和歌山市 松 尾 和 香

子に妥協して人生恙無い
生かされて感謝の命受けている
足達者おかげで行けるひとり旅
温泉で心も足も和ませる
走り来た人生だった丸い背

和歌山市 宮本 三喜夫

鳥取市 吉田 弘子

業界も提携合意おおはやり
跡絶たぬ偽装製品流通す
海の事故日本とつくに多発する
落書に恥知らずめと叫びたい
食い倒れ閉店淋しい道頓堀

海南市 堂上 泰女

糸トンボの恋の邪魔するお水やり
雷鳴に慌てて閉じるパソの窓
永遠の友礼節をわきまえる
あの方が笑うと温度下がり出す
蟬だってお昼寝したい昼下がり

海南市 三宅 保州

分別をしたら私は何のゴミ
誰だって小さな毒を持っている
クビになる夢をまだ見る定年後
電報のように手抜きをしたメール
図書館に誘おうお喋りなお方

鳥取市 下田 茂登子

方言で喋ると口が楽になり
老人もランク付けされ痛ましい
副作用解ついても飲む薬
雑草に負けてはいない過疎の老母
一人いて易者に頼ることばかり

おもかげを語る昔に花が咲く
初恋のおもかげ少し古稀の君
虎負けてスポーツ欄がにぎやかない
反抗期親のマジックかららない
五輪旗に罪なしテロばかり追うて

鳥取市 西川 和子

踏まれても真中にいる車前草
秋祭り厨も弾む笛太鼓
台所パパは近頃腕を上げ
温室で熟れて高値の付く果実
初物に七十五日生き延びる

鳥取市 岩崎 みさ江

ハッスルを諫めてくれる不整脈
解らないこれから生きられる
やさしさのなせる嘘なら許されよ
干涸びた脳へ潤う祭り笛
スクラムのあの一途さを忘れまい

鳥取市 春木 圭一郎

まず自問やりたいことは何なのか
どの役も楽しくできる工夫する
手始めに自分の思いさらけ出す
あわてずに他人妬まず比較せず
ちよつとした親切いつも心がけ

鳥取市 土橋 はるお

落魄れたおもかげだけはよく浮かぶ
焼酎がよく沁み込んだおもかげだ

溪流に点滅してゐるほたるかな

法螺吹きよ少しは嘘を省きなよ

サンヒーターが熱過ぎるほど沸く日毎

鳥取市 土橋 睦子

売約済札を見てから欲しくなる

誘われてなどと胡麻かす赤ワイン

名物の鯖寿司買って汽車に乗る

言い訳はもう飽きました検診日

抹茶立て気分落ちつく夫の留守

鳥取市 福島 庸二

相性を重ね重ねて開く運

辛口の批評に心開けて待つ

悔しさをバネに荒波対峙する

匙加減ひとつで変る人の味

継続は徐々に右脳を刺激する

鳥取市 夏目 一 粹

この猛暑意地も萎れてゆくばかり

身に余るお世辞のあとに頼まれる

人情に脆いお人で平社員

いっぺんに言われパニック起こしてる

古い靴ピカピカ磨き供養する

鳥取市 横田 春名

芝居跳ね無口な夫よく喋り

跳ねられた泥を黙って拭いている

しきたりの料理に先祖生きている

いい風が吹いているのに気が付かぬ

昨日今日平穏明日へ祈りたい

鳥取市 岸 本 孝子

お互いがつかいか棒でいるくらし

名物が行ったり来たりお中元

老い二人念を押したり押されたり

利き腕のけがで主婦業肩休め

皆して汚した地球いとおしむ

鳥取市 岸 本 宏章

口数が過ぎて時どき怪我をする

ゆっくりと進む時計で人を待つ

丁寧な書けば悪筆でも温い

告発がなければ日本変わらない

予想より厳しい老いの坂登る

鳥取市 平 尾 菜美

アンテナが下がると伸びる地獄耳

やる気だすためにハードル下げている

全霊で火の粉受けてる男伊達

陽溜りの庭へ落葉が踞る

真実に賭ける夕日が落ちてゆく

鳥取市 有 沢 せつ子

いい知恵は終った後で思いつく
大豆ごま薬と思ひ日々食べる
健康な時は宝と気付かない
親切な店で薬も良く効いた
時間待ちスーパの椅子ありがたい

鳥取市 奥 谷 彩 子

老いてなお陽浴びる幸を噛みしめる
温かな彩で埋めたい余生の図
いい話かき集めてるエコバッグ
プライドをやさしく包む割烹着
はちやめちやに生きてみたいと時々

鳥取市 中 村 金 祥

甲子園五輪の陰にあるドラマ
ポケットにちよつと入れたいいい話
携帯を捨てて人間らしくなる
熱い血がたぎりなかなか寝つかれぬ
年金を全てご破算したからう

鳥取市 倉 益 一 瑠

絵手紙の風鈴涼をつれて来る
一言がしつかり急所押えてる
やっぱりと言う目が背なに突き刺さる
ゴム紐がゆるみ夫婦の絵が褪せる
おかしいぞ老後バンザイだったはず

鳥取市 田 村 邦 昭

折りまがる腰が苦節を物語る
どしゃ降りの雨にあつさりあきらめる
登頂を果たし苦しみ嘘のよう
いい花を咲かしてくれと水をやり
うぬぼれが貧乏からも立ちあがる

鳥取市 中 宇 地 秀 四

はらわたを引つ掻き回すガン検査
神様に褒められるよう努力する
金は出せ拉致は勝手に片付けろ
戦争に良いも悪いもあるものか
ラーメンも竿竹売りもスピーカー

鳥取市 池 原 天 馬

便利だとけいたいもらい難儀する
人間の知恵に敬服百円店
放射能地雷いくさの傷深く
末期の水ベットボトルで持ち歩く
蛇を見た昔は多くいたけれど

鳥取市 加 藤 茶 人

姉妹でも姉にかなわぬ自己嫌悪
屋台から愚痴を肴の処世術
親元を巣立つと口調まで変わり
生かされているから今日の飯うまい
ハイハイエグレイの答だから揺れ

鳥取市 山宮愛恵

倉吉市 猪川由美子

わたくしはこんなものと自答する
八十歳十年先は考えぬ

楽しいはずが一言で総くずれ

人間のエゴ消費をしたくなる

家計簿は支出の欄でことがすみ

鳥取市 太田幸枝

門灯を点滅させて彼を待つ

肩書がとれて余生を草むしり

百までも生きたくないと医者通い

ときめきもないのに血圧が高い

さまざまな夢を見ました古い服

鳥取市 永原昌鼓

小銭投げ無理なお願ひすんません

すんません知恵もお金もよう出さん

すんません詫び専門の社長かい

聖職をワイロで汚しすんません

ありがとうすんませんで日が暮れる

鳥取市 福西茶子

初生りのトマトいびつな顔で熟れ

プランター並べて野菜植えまくる

片付いた部屋はわたしに向いてない

夕立のように病が来て去った

炎天下突如雷雨が大暴れ

政局混迷能面顔を練習す

恋愛体験いくつに言おか悩みます

鳴き砂の浜へ失恋捨てに行く

永田町狐と狸暗躍す

直ぐ顔に出て自他共に損してる

倉吉市 野口節子

ホームレス故郷に恥は晒されず

人間のエゴを地球に裁かれる

人影も疎らになった炎天下

老いの身に三十五度の照り返し

団塊がずらりと並ぶ安定所

倉吉市 最上和枝

アドバリン上がる景気は下り気味

丁寧な言葉遣いが身に着かぬ

怪我無いか最良力士が投げられた

定退し夫婦の立場逆になる

土俵入り化粧回しの派手競う

倉吉市 山本玲子

幸せな人の言葉はやわらかい

つい甘い言葉に乗ってずつ転ける

子沢山怪我なく育つ親の愛

何よりも孤独を癒すティータイム

衰えた足を逆手に口達者

倉吉市 松本 よしえ

御大は何も知らぬとうそぶいた

遺伝子が何億年の尾髄骨

父さんは単身赴任馴れたかな

父の留守シャンとして来る中二の子

甚平の2し買つて孫を待つ

倉吉市 山中 康子

鳥唄の小節まわしが性に合い

土壇場にへそくりそつと顔を出す

魂をゆさぶる詩におののいた

息の根が止まりそうですこの猛暑

災害の予告積乱雲の山

米子市 野坂 なみ

平穩を只祈ります北京五輪

童謡とその情景はみんな好い

叱るよりなるべく褒めて励まそう

うっかりと薬飲みすぎ救急車

五体投地素朴な祈り美しい

米子市 白根 ふみ

夏草の茂みに帽子だけ歩く

猫の額ほどの大地をもつてるよ

こつそりと利口なものが消えてゆく

場ちがいでこつそり猫かぶりである

実を結ぶまではせつせと水をやる

米子市 青戸 田鶴

無人駅時間ゆっくり流れてる

好奇心失わぬのに足なえる

故里の干物が好きな家族たち

うわのそらで過ぎた時間がくやまれる

私にはもったいないな帽子買う

米子市 光井 玲子

少しずつ整理をしよう身のまわり

迷信と分かっているが日を選ぶ

ハモニカが得意な老父に脱帽だ

八十路坂まだまだ学ぶ事ばかり

子供らの卒業証書大切に

米子市 中井 ゆき

胸の内今日も曇天スコール来い

舟着場なやめる猫が海を見る

なつかしい人の夢みるお盆前

初盆のように仏壇にぎやかに

花達も暑さにたえる負けまいぞ

米子市 政岡 日枝子

青写真あまり端折ると水が洩る

門限ぎりぎり遊び疲れた空財布

頂点を狙える位置で待つてみる

つじつまの合わぬメニューで面白い

三十坪の大地の地主威張つていよう

鳥取県 盛田夢路
もうちよつと背筋伸びんか なあ影よ

さるすべり先祖もてなす孟蘭盆会

エコライフ嫁と姑がタッグ組む

頑張れと影が頻りに背なを押す

オタオタするな脂肪が落ちただけのこと

鳥取県 松川行男

香典が少ない人の値ぶみする

会社関係OB会のボランティア

手みやげを持参したのに借りられず

シニア割引小さな活字そこまでか

オリンピック高校野球暑い夏

鳥取県 深田倶久

甲子園北京チャネル超多忙

口ずさむ昭和後期の流行歌

カタカナ語とばし朝刊ニュース読む

虎視眈々トップ狙って息ひそめ

前人未踏二種目連覇世界新

鳥取県 細田裕花

串だんごくつき過ぎて踊れない

串焼きにされて成仏する魚

夏休み河童も日焼け止めを塗る

疲れきりコントロールの出来ぬ口

幸せを自慢気に吐く換気扇

鳥取県 佐伯やえ
しつこい野郎アワダチ草をぶった切る

原油高騰人も魚も海に哭く

忘れたことにして生きるのも美学だな

六十年帰らぬ人の日記読む

原爆忌忘れさせない夾竹桃

鳥取県 石谷美恵子

逆ってみたが疲れて妥協する

職安へ男盛りが値切られる

怪我してもギャグですませるいい男

いつの間にマイク馴れた妻の唄

何辺も許しふたりでみる夕日

鳥取県 北村稔

心からおわびだなんてどの心

減反をして米輸入してパンを食う

ナイフ包丁もうんざりだやめてけれ

かわいいが子はしかるのが親ですよ

八十路そろそろ脳が点滅す

鳥取県 竹信照彦

跡取りの役目墓守り墓掃除

漁火の見えるお墓で盆迎え

お墓にはいませんなんて言わないで

日照りでもさすがにゴーヤ実をつける

熱中症ばかり警戒水を飲む

鳥取県 山下節子

松江市 川本 畔

すんませんなあお国訛りが温かい
本籍地書けぬ鯉が悩んでる

反応を即座によんだ目の動き

また欲の発芽をさせるジャンボくじ

別荘の表札に書くペンネーム

松江市 三島 崧 丘

生真面目と酒でバランスとっている

蟻の列何処に居るのか管理職

観覧車小さな宇宙ひと回り

吉報に胸も言葉も詰まらせる

わくわくの余韻に浸り独り酒

松江市 銭山昌枝

青汁は飲むが薬は服んでない

太陽が蒸発させた今日の薔

波の立つ気配さつさと輪を抜ける

セールのおいしい話には乗らぬ

思い切り派手なパジャマで寝ています

松江市 松本 知恵子

女神輿 大粒の汗弾いてる

風見鶏とミナト見下ろす夏時間

雨よ降れハートも茄子も固くなる

大粒の汗によもやの嘘を聞く

丹精を込めた返事の百合香る

美味しいと言ってしまったコッペパン
話したいことがあるので耳貸して

草の波わたしの恋を知ってるか

まっとうに歩いているによろけ編

三角形の中の蛍が睨み合い

松江市 津川 紫晃

煙草吹かし女図太い顔をする

紫陽花が泣いて笑って梅雨あける

このまんま夫婦漫才続けよう

連休になつても同じスケジュール

シナリオになかつた道を歩いている

松江市 安食 友子

捲りますすじゃあまたねえと回顧録

ヤングちゃんわたしの振りを褒めました

畳替えチビの成り行きにちよい待ち

裏腹も坂ですんなりお手どうぞ

食欲を案じてくれる一親等

松江市 小川 注湖

カレンダーまた確かめるバス時間

無駄時間これも人生潤いに

褒められて返事の筆がはずんでる

熱中症天気予報も水を飲め

商品券こっそり握る手から手に

出雲市 竹 治 ちかし

戦地にも故郷へ続く空がある
子の視野に平和に映る世界地図
価値観の違う時間を持て余す
転び方一つで変わる半と丁
喫煙も霊安室も奥の隅

出雲市 小豆澤 歌 子

てっぺんで返事に揺れているカラス
ときめきを水辺で待つている蛍
木から樹へ大地やさしく根を包む
乾くから急いで羽化を始めよう
曼珠沙華空の青さに咲き揃う

出雲市 小白金 房 子

三百号築き亡師へ感謝する(尼先生)
温顔な亡師囲んださたばなし
夕顔の匂い漂よう垣根越し
まだあったはずの酒瓶底をつく
作業服牛飼う夫婦の脂汗

出雲市 園 山 多賀子

気兼ねして生きて居ります卒寿坂
税金と思って医療費払ってる
ありがたい御免なさいの卒寿です
退屈な日も時にあり二十四時
咀嚼するために私の自前の歯

出雲市 富 田 蘭 水

一冊の本が乾きを止めてくれ
温暖化通りこしてる化け温度
しっかりとまわり見まわし今日生きる
鮮やかな朝顔と共朝仕事
心のカビはさらりと温泉で

出雲市 森 茂 美

アルバムに少女の妻が笑つてる
ふるさとの声を聞いている電話口
青々と出雲平野に夏が来た
しっかりと夏の呼吸をする田圃
正直な人は大臣勤まらぬ

出雲市 岸 桂 子

仁王門くぐり浄土の風に会う
柿の実が昨日と違う色をもつ
音みんな消して隣の喪に合わす
こだわりはもう捨てました青い空
砂時計人を許したことがない

出雲市 持 田 多輝子

会者定離送り送られ渡る娑婆
見直しは議員歳費の方が先
特売のセールスマイクのテストする
あんぱんをくわえて走る運動会
横車押して道理をへこませる

出雲市 多久和 敬子

倉敷市 撰 喜子

孫台風去つてひっそり飯を食う
蜚知らずに蜚の歌をうたつてる
いい夢を見たい枕を変えてみる
せんべいを食べて会話が良く弾み
エアコンに涼をもらつて五七五

出雲市 伊藤 玲子

術後三日金魚の泡見て飽きず
まだ醒めぬ右脳つついて五七五
喜寿なんて試験の年さサバイバル
深呼吸この世の汚れ入れ替える
失敗に乾杯無二の友が出来

雲南市 毛利 幸

夏祭り揃いの浴衣街に舞う
親子連れ子供夜店で駄々こねる
心ない涙流して直ぐ乾く
こっそりと人の秘密を掬い出す
青春のキャンプファイヤー天を突く

島根県 伊藤 寿美

愛されていた幸せの水の音
秋になればと言つた夫の忌は真夏
秋の海柩は無事に着いたのか
孫抱いて聴く白骨の御文章
盆の経覚えて去んだ夏休み

テレビ見て三食昼寝長寿法
ライバルを味方につけて波にのる
引き算よりプラス思考にみる未来
万歳で送った駅は今過疎に
原色を着て街を行く母は喜寿

美作市 大石 あすなろ

風が立つ葉挿んだページから
生涯現役まだ讀れない司令塔
あの時は目まいをさせたプロポーズ
思い切つたことが言えない自己嫌悪
選択肢妻に任せてバス旅行

美作市 福原 悦子

黄いばんだシャツは農夫の正装だ
清濁の流れの中に立ちつくす
廃屋の土塀栄えた跡がある
目玉焼き忙しい朝の共稼ぎ
老夫婦言葉少なによく通じ

真庭市 福岡 智恵子

小刻みに命が縮むこの猛暑
他所行きの顔でも皺は隠せない
生涯を情性のままで喜寿迎え
朝顔とお話をして今朝楽し
がむしやりに生きよとするこぼれ種

真庭市 国米 きくゑ

時々役立っている老いの知恵
ささやかな倅せみどりの中に住む
もつたない昭和を生きた老いの口
転んでも起きれば良いと慌てない
燃えるもの抱いて無人の駅を待つ

竹原市 時広 一路

本心が口から洩れた独り言
禁煙はバッチリ禁酒お断り
痛むなよ膝よゆっくり歩くから
古くなり紐が緩んだ知恵袋
缶ビール一本でいい僕の齢

竹原市 岩本 笑子

流れ流れて人間だつて丸くなる
迷つたら来いと石碑は建っている
ハサミチヨキチヨキ病気の気を切ってます
真夏日のじつとがまんの私です
私還暦整形美人になるつもり

竹原市 石原 淑子

約束を違わず逢いに彼岸花
朝鏡素顔の私チエツクする
優しくやさしくもつと優しく蓮の花
水涸れて水琴窟が謡えない
のはほんと生きて金魚とウマが合う

美祿市 安平次 弘道

誤解せぬように降ります花の雨
神様が言うから好きになりました
生きている証しか鬼が目をさまし
運命線仮面はすでにずれていた
首横に振って意見は別にあり

宇部市 平田 実男

縄電車あちらも後期高齢者
お袋の味に計量器はいらぬ
ケーキ入刀へお腹の子がはしゃぐ
国よりも自分のために立候補
友情で貸したお金で入るヒビ

東かがわ市 伊勢 八重子

蟬しぐれ此の世のすべてにかけて鳴く
里がえり心の重荷置いてくる
しがらみを捨てて棲みたい無人島
風鈴にしばしまどろむ熱帯夜
日に焼けた心を秋がノックする

東かがわ市 清川 玲子

胸底にまだ消えてない思慕一つ
廃校の椅子に残した淡い思慕
団結の母子に父はカヤの外
いい時に来たと言われて使われる
戦中派もつたないで生きて来た

東かがわ市 原 賢

情けなや老いて医療に差別され
嘘重ね夫婦の絆細くなる

時をみて男一氣に風に乘る

過去はかこ男の明日へ舵を切る

嘘ひとつついて重なる嘘の山

東かがわ市 川 崎 ひかり

毒ギョウザ真相じわり浮きあがる

出会い頭に蛇とばっちり目が合った

悔し涙流し球児の夏終る

外面がいいのは亭主と金バッジ

一二枚おまけに出して支払機

松山市 高 橋 宏 臣

生きている証毎朝顔洗う

思い切り笑ってみせる歯を磨く

無垢になりたくてカラスが水浴びる

正直な向きでヒマワリ咲いている

返り血の届かぬ位置で吐く気炎

松山市 古 手 川

ふる里というDNAがきつとある

何かある急に成長する会社

本物のピエロ母親だと思ふ

予告無く来る人生の締切り日

栄枯盛衰立派な墓が荒れている

光

松山市 宮 尾 みのり

消えるように死ねたらなどと贅沢な

受話器からうまい話がやって来た

老人用というコンビニの広さかな

しがらみを持たぬお人のきれいな

先人の祈りはるかに磨崖仏

大洲市 中 居 善 信

湧き水のここにも人が住んでいた

女口説くに少うし歳を取りすぎた

多寡が五反の田畑に飢える事はない

らんらんと光る猫の目私の目

虚ろな目嘘が隠せる訳が無い

西予市 黒 田 茂 代

残暑まだ風鈴の音が快い

西瓜と蜜柑太りで痩せる暇がない

季は立秋夏と秋とがまだ同居

散る命悟って薔薇が凜と咲く

女優擬きの名の柳人が気にかかる

高知市 小 川 てるみ

いい答え出るまで月と散歩する

戦争が絶えぬ地球を嘆く月

矢印のように明かりがぼつと点く

温暖化いやはや土佐は亜熱帯

クーラーがなけりゃ干物になっちゃう

高知県 小澤 幸泉

過ぎゆけば見ゆなつかしく美しく

飼犬のうらめしそうに雨の朝

ひまわりに地球を何と映すかな

方言を語れぬ子らに笑われる

男三人更に気ままな夜の床

唐津市 井上 勝 視

十字架を老いても背負う出来心

灰皿に老いの短気を悔いている

物忘れとくに利用の処世術

清流に育ち大河の苦い水

長い旅飾るものなく暮れかかる

唐津市 坂本 蜂 朗

釣り上げた魚の骨が喉を刺す

ごみ箱へ妻が家訓を捨てている

居酒屋のそれから先が雲の中

愛犬へ頬摺り恋のお裾分け

まあいいか親父を越えて飛んでいる

唐津市 市丸 晴 翠

サミットも終わり温暖化は進む

北京より血が騒ぎます甲子園

菜園を自給率百の猪が荒らす

敬老会居並ぶ後期高齢者

スベアキー娘に渡してたこと忘れ

唐津市 樋口 輝 夫

美人だと言われ続けてまだ独り

隣の子を褒めると機嫌悪い嫁

にぎにぎの掌が閉じている呱呱の声

一葉も諭吉も逃げて丸裸

嘘に嘘重なり化粧厚くなり

唐津市 山口 高 明

古の伝統守る刀鍛冶

夭折の妹の甕棺名は菊子

御坊に渡すは不憫蜜蠟す

旅半ば妻籠は雨の中に暮れ

三億円当てる資金と二百万

熊本市 永田 俊 子

よろめいてすぎる物ないひとり者

ポケットに老いの哀しみためている

天命を知る伸びきったゴムの紐

なるようになるさと風にまかせてる

玄関で用意の言葉ねり直す

熊本県 高野 宵 草

小気味よく車窓流れて里帰り

星空の悠久些末な恨みごと

生きてゆく諸悪を飾る髭ルージュ

淋しさに近所の犬を手馴づける

惚けまいぞ時の流れが速すぎる

熊本県 岩 切 康 子

十和田市 阿 部 進

トンネルに湧水流れ十四五度
青魚すすめる医者を信じてる
拉致家族劳らうしるし心づけ
最後尾気楽に歩く事にした
我が庭も負けず嫌いの百日紅

シドニー 坂 上 のり子

ワツと声立て忘れたい腹の虫
命短し怨み言う間のロスタイム
認知症死よりも重い生き姿
今日も猫だけが相手の日が暮れる
大声で偽装よ偽装だと叫べ

砂川市 大 橋 政 良

夢売りの言葉巧みに明日を売る
土砂降りをかき分けてくる霊柩車
好き勝手ばかり並べる嘘の皮
こわれものそんな表示のほしい人
遠回りして動静をさぐられる

黒石市 相 馬 一 花

金になる話になると伸びる耳
つまらない講義に伝染する欠伸
欲望があるから彼は惚けるまい
友情を盾に押させる保証印
惚れ薬たっぷり飲ませ骨を抜く

精一杯頑張った子をほめてやり
古希すぎて妻がかじとる凡夫婦
カラオケの歌より服をほめられる
笑顔にて聞いてくれます苦勞人
音痴だが孫に聞かせる祖母の歌

平川市 小 寺 花 峯

還暦を迎えて増える診察券
一病を持つているから生きられる
孫が来る今日は掃除を後にする
二ヶ月に一回でいい孫の顔
欲望を携えているこの十指

弘前市 福 士 慕 情

八の日は母の命日寺参り
ご供物は私の好きな物を選ぶ
線香の匂いの好きな数珠袋
須弥壇の仏年代物らしい
ご供物を仏に見せて持ち帰る

弘前市 高 瀬 霜 石

口下手な人が信頼されている
良妻賢母 ニート発生率高し
正攻法弱者は清く美しく
忙中閑びたりと嵌まるお葬式
居酒屋で充電キャバクラで放電

弘前市 須郷井蛙

新聞に銘このように来るチラシ
友の肩借りて帰った三次会
原油高エンゲル係数高くなる
鮎ともサヨナラをする日も近い
メタボにはなる暇がない農作業

弘前市 岡本花匠

干し梅にこだわる母の手前味噌
人間へ戻るおとこへ向い風
移植鋤ひとのわがまま受け入れる
初競りのりんごの笑顔素晴らしい
のほほんと生きて経年今日の幸

弘前市 相馬銀波

元気を誇張残暑のはがきです
日めくりの含蓄汲める花言葉
熱帯夜流星群を待つ団扇
騒がれたメダル北京の置き土産
要点的併記に汗の跡を読む

弘前市 今愁女

夏なれば蟬のジージー鳴いとくれ
生れたる蟬に葉脈うすい羽
切れ端を鈴虫にやり胡瓜もみ
もてなしに麦茶はいつも冷えており
午後の茶はアイスコーヒー所望する

弘前市 櫻庭順風

洪水を忘れた頃に来る地震
徐行して新花巻に着く安堵
放送はなかなかされぬじれった
暫くは長い退屈するばかり
やっと出た6時に発車するなんて

平成20年度川柳塔碑合祀祭実施要領 於 高野山大霊園

日時 11月8日(土) 雨天決行
集合場所 南海電車「難波駅」3階中央改札前
集合時間 午前9時30分(10時発特急に乗車)
会費 5000円(交通費、昼食費)
申し込み 10月5日までに本社事務所宛

◎別の交通手段で参拝される方は、その旨川柳塔社へご連絡の上、12時までに直接大霊園川柳塔碑前(奥の院下車すぐ)にお越し下さい。

大霊園事務所(Tel 0736-56-2966)

到着後すぐ法要を行います。(12時10分より約30分)

遠方の方で宿泊希望の方はお申し出下さい。

◎帰りは16時15分発に乗車予定

合祀者(敬称略) 5名

(19年8月～20年7月に逝去されたかた)

吉田笑女・瀧本きよし・岡井やすお・神原 文・中 宗明

川柳塔の

川柳讃歌

(46)

木津川 計

階段を昇る姿はぶざまなり

牧野 芳光

実力と功績が評価されて昇進するのならない。大分で起った教員の採用や昇格をめぐる贈収賄事件、あるいは情実や縁故で階段を昇る姿の無様なこと言ひようがない。いや無様以上に、その破廉恥を嘆うべし。

サザエさんの父親・チョビ髭の波平は現役の勤め人だった。が、朝日に連載の二十五年間、一度も残業しなかった。五時になると退社、帰ると尺八を吹いたりしていた。悠々としておもねらない万年ヒラの心意気である。

部下の才摘んでポストにしがみつく

坂本 蜂朗

破廉恥な人間は悲しいことにいくらでもいる。出る杭を打つ上司がいる。将来おれの地位がおよびやかされると思えば、その才を摘むのだ。そんな企業に未来のないことも考えない自分本位のエゴイズムである。

上に立つ者の真価はどれだけの人材を育てたかに尽きる。虚子の偉さは水原秋桜子、山口誓子、高野素十他多くの逸材を生み出し、育てたことである。でなければ大ホトトギスは形成されなかった。小物と大物の違いだ。

国民の味方に見えていた仮面

福永 ひかり

国民の敵を名乗って登場する野心家はいない。国民の味方を僭称し、大言壮語、バラ色の夢を見させるか、国民の敵を糾弾し、憎しみを組織して政権を握り、体制を固める。

そんな国民の味方にヒトラーやムッソリーニがいて、彼らの非人間性と戦ったスターリンが国民の敵と否定され……。

今は昔の話ではない。支配階級の味方が国民の味方の仮面をつけ、えらい目に会わされた庶民が仮面の正体をまだ見抜けない。嗚呼。

振舞った酒で言いたいこと言われ

菊地 政勝

割の合はん話である。政勝さんの腹立ちが分かる。僕にも振舞った酒食で割の合はん言われ方をしたことが何度もある。その店を出たあと、「雰囲気悪いですねえ」と抜かした男がいた。旨そうに食べたあと、「味、もひとつですねえ」と言われたら何イ?となるではないか。支払いをすませたあと、「今の店安いですねえ」に平然としていられるか。だ

から僕は「馳走になると、いつも安い店でも「高い店やのおおきに」と言う。

花束に所詮不向きな花である

太田 扶美代

北京オリンピックの表彰式に現われた案内嬢の綺麗だったこと、北朝鮮の美女軍団どころではなかった。なにしろ十三億人の中から選んだ三百数十人である。その背後に、不向きとされたあまたの娘たちが口惜し涙をのんだのであろう。

なにせよ、特等品として選別された背後には振り落されて区別され、差別されて不向きとされたものがあるのだ。見捨てられた花々を思わずして花束を手にはなるまい。としよりが輝いているここに住む

神保 坊太郎

張りのある日常を送っているとしよりは輝いている。生き生きしている。張りとは何か。①に習い事、稽古事などの趣味、②に学習、③にボランティア、④にスポーツである。

こうした張りを持たせるには条件がある。即ち、①健康、②経済的ゆとり、③時間的ゆとり、④しとしよりから健康であるうとするのを阻んだり、生活を困難に追いやる不当な権力が幅をきかせるなら、黙っていては駄目だ。声をあげるとしよりが輝く。

(「上力芸能」誌発行人)

自選集

都 倉 求 芽

つい渴く心に言葉の水を遣る
七色もなかつたあの頃の虹
言い出せばキリない見解の相違
かぐやからの青い地球がこわれそう
アカサタナ記憶が通りすぎてから戻り

土 橋 螢

女郎花桔梗と盆の花を切る
美しい波にもまれてきたおんな
肉体を鍛える海が荒れている
飯よりも冷やしうどんを召し上る
露となり北斗七星から落ちる

西 出 楓 楽

屋久島のフイトンチッドの旨いこと
(屋久島紀行)
深山幽谷髭の仙人在します
雲水峽歩けた自分褒めてやる
悩みごと消える屋久杉見上げれば
哲学者の風貌で佇つ弥生杉

仁 部 四 郎

或る意味で日本は法治国といひ
草の根は或る意味の「或る」考えぬ
或る意味の或るは説かない解説者
或る意味で初初しさが人の華
或る意味で人生なんてバラ色さ

波 多 野 五 楽 庵

窓枠を思い出だけがすり抜ける
鬼灯の花待ち侘びる妻の下駄
蜉蝣が葉になつた修司の本
モノクロの夢に出てくる父の皺
饒舌な風が野分けを走り抜け

林 瑞 枝

友に逢う燕飛び交う船溜り
エッフェル塔の秋のチャイムを手の平に
恩情の身に沁む母の十字星
飾らない野菊ふたりで雨宿り
沈み勝ちの心を癒す歌に酔う

早 川 清 生

遺跡画譜かなしきまでに富者貧者
生涯の悔悟球児のワンエンラー
一塁に最後の打者の土煙
郷土校勝つて路地回りをしてる
入院の窓下はいのち賭けきし街

前 たもつ

嫌われて海月ふらふら海浄化
蚯蚓とや土かきまぜて土肥す
雑草とて酸素を出してガスを吸う
喧しく鳴いて蛙は虫を食う
爺ちゃんは時に公園掃きにゆく

宮 西 弥 生

奔放に生きて有害蒔いて花
ひまわりに元氣をもろて今日も留守
女から誘いときめいてる逢魔
お隣も三食昼寝サマータイム
相性を無理に合わせてある戸籍

森 下 愛 論

世の隅に静かに暮らし蟬を聞き
精一杯鳴いて余命の蟬の声
うたた寝の耳にまどつく蟬の声
夕映えにミンミンミンと残り蟬
蟬の声途絶えて秋も程近し

八十田 洞 庵

傘さして睡蓮見てるモノが居る
さすが師匠一筆入れて絵が生きる
迎えに出た兄も帰らぬ夜店の灯
母の星そこは核など無いでしょう
ダンディズム眼鏡の枠に凝っている

両 川 洋 々

今日も書く日記だらうか遺書だらうか
無罪判決空と握手がしとうなる
賞味期限切れる間際の恋が炎え
リベンジへ汗の答えがまだ出ない
変り身の早さは君の特技かい

阿 萬 萬 的

中途半端な考えにある隙間風
一応和解だけど曲げない自己主張
言い出しべえやっぱり小さい裏があり
仮面つけても外して見ても僕は僕
朝の鏡つくづく疲れた僕の顔

板 尾 岳 人

神に手を合わすうしろに母居ます
出刃を研ぐ妻の笑顔が気になりぬ
日本語を喋る鰻にある不信
べったんの音が聞こえる父の部屋
じゃんけんぽん鬼が逃げ出す神無月

奥 田 みつ子

金かねカネ金で動く世おぞましい
石もまた金に輝く時がある
洗面所うぬぼれ鏡笑ってる
不器用に生きる自分をいとおしむ
清らかな月に癒され今がある

河井庸佑

好調が続き心を引き締める
幸せに見える人にもある悩み
口喧嘩互いに残るわだかまり
休肝日朝のリズムを狂わせる
先の先読まれた石を持て余す

木村 あきら

信楽の狸に化かされそうになる
水中花蝶も訪ねて来てくれず
腹割って話せる友が居てくれる
短所には触れず一家にある平和
天山南路シルクロードの旅続く

小島 蘭 幸

一生懸命にわたくし色というメダル
駅弁は買ったが座れないのです
孫が生まれて自分に甘くなってきた
自分にも他人にも甘く生き易し
深夜のコンビニにここにブランコが欲しい

小西 雄 々

微風にはなびかぬ父の旗がある
祭囃子一番星も聞きたがる
深爪を隠して悩みごと増える
十二単に縁はないけど妻達者
天空のことは届かぬ神無月

斉藤 嘉

子の風船風の怖さはまだ知らぬ
球場をわっと沸かせて来た代打
アップルパイ好きだったなあ仏様
ひまわりがこつちを向いて咲く至福
ねぶた笛聴きつつ稲の穂は伸びる

塩 満 敏

大阪のお城に杉の句碑誕生
ナガサキの誓い地球に発信す
選挙中カレライスを食べあきた
五輪後の北京が少し気にかかる
妻の庭今年はよくぞ働いた

新家 完 司

鉛筆を削っていると眠くなる
自分には甘い証拠の血糖値
ぺらぺらのいのち西日に炙られる
廃屋の主は闇の奥にいる
職務質問されて貝殻飾うたう

川上 大 輪

処方箋に薬一本と書いてある
焦げ付いた言葉東子で洗っても
満ち潮も引き潮もある鉤括弧
昨日より少し大きくなった窓
時どきはジャンプしているカタツムリ

玉置重人

サビ抜きのにぎりを食べるあかんたれ
焼きたてのパンが好きなアメリカン
時間ならたつぷりとある陸でなし
グルメではないがおやつも食べてます
外出にお茶を忘れず持つてゆく

恒松町紅

人間の醜さ大地に嗤われる
七転びの人生でした八十路坂
忙しい時間と喋って飲む時間
転がった先に勝負は見えてくる
一粒の種に大きな夢がある

津守柳伸

白桃がどっさり届く白昼夢
古時計修理反対する外野
荒波に揉まれ育った鯛の価値
ビアガーデンメタボ予備軍勢揃い
骨密度はらはらせる平泳ぎ

遠山可住

俺よりも妻は燕に気を遣い
温暖化閻魔のペンが狂てくる
ウマが合う趣味でいきいき年をとり
やあ生きていたかと言えぬのも同期
ホイ来たと雑用老いの手で支え

温故知新

長野 井蛙

散ることも知らず造花の色が褪せ
この雪へ生きねばならぬ足袋をはき
姑は炬燵にいても鼻が利き

西尾 栞

ようきいときやと妹ついでに叱られる
義理がたい人に元旦起こされる
応接間の金魚逆立ちしてみせる

西村 梨里

葡萄籠持てば貧しさ絵の如し
女なる悲しみおんな酌をする
愛と言う言葉をならべ詩人逝く

西出 一栄

混浴へタオル一本たよりにし
その恋をあきらめさすも友として
バサリ新聞カタコト牛乳朝の音

— 合同句集「私達」 —
昭和三十三年発行 選者麻生路郎



小島蘭幸選

大阪府 吉田 富美

親と子の絆は強い糸電話

ありがとう今日も元気で生きてます

一度だけ父が唄った伊勢音頭

花野行く時折思ひ出し笑い

探してた子猫壺から抜けて出た

よろこびも悲しみも過去傘寿です

香南市 桑名 孝雄

お荷物になっても重くないように

通行人ほどの役しかもうくれぬ

海水パンツ肌の弛みが隠せない

サプリメントお奨めしたいのはお酒

紫陽花の末路草刈り機が唸る

お山の杉の子唄が戻ってきた地球

美作市 小林 妻子

老い二人パントマイムのようにいる

リストラの悲しみといふちぎれ雲

リハビリへ杖ついて行く生かされて

チエンソーアート暑さ吹き飛ぶ轟音だ

仏との絆迎え火揺れている

鰻食べんでも土用抜けました

枚方市 小林 わこ

この暑さ怠け心も大切に

内緒ごと聞き耳立てる指狐

オーデコロン今日の香りはバラにする

三世代の名が堂々と表札に

繁栄の裏で涙が光ります

栄光の過去は無口で慎ましく

高知市 松尾 憲子

母の居る電話の向こういつも春

好き嫌い言えた昔に戻りたい

あるがまま伸びて欲しいな野の花よ

過呼吸のわけは恋だと知りました

君の為脳の片隅空けておく

死んでまで守ろうとしたものは何

岐阜市 平野 あずま

緑蔭の教室生きた学がある
人見知りせぬロボットの真正直
減り方が違う三色ボールペン
起きてるか眠っているか昼の月
骨粗鬆症無理な背伸びは止めておく

和歌山県 森 下 よりこ

裕次郎の甘い歌声深夜便
継ぐ人がないので生涯現役
油照り先祖の苦勞偲びつつ
みかん畑の朝はにいにい蝉の巢立ち
極楽の風に出会った炎天下

大阪市 澤 田 定 子

余暇ばかり遊びの下手な定年後
仏様の前でお笑い落語会
遊び上手な人の話に時忘れ
日焼せぬゲーム遊びの夏休み
三度目で振込み出来たATM

河内長野市 針 生 和 代

飽食の国もやがては飢餓の国
エンゲル係数高い暮らしをしています
目覚しに呼ばれて今日も幕が開く
人生の行方は所詮あみだくじ
魂を行方不明にした戦

羽曳野市 森 下 一 知

最大のギャンブル妻が横に居る
長男の嫁をお盆がこき使う
連れ合いを亡くして転ぶ一輪車
眼鏡を外すと散らかったのも平気
一代記屋台を曳いた涙坂

三木市 広 瀬 房 江

スリッパを新品にして初夏の風
すりごまもたつぷり嫁の味冴える
ピカピカにトイレをみがき暑氣払い
背伸びして身長計る診察日
打ち明けて傷口深くなるばかり

米子市 見 山 温 子

暑い日は句も献立も浮かばない
騒々しい我が家がなぜかホッとする
ざりざりの年金ゆるむ孫の顔
姑と嫁出掛けるプラン意気が合う
高履歴見せても嫁が見つからぬ

府中市 藤 岡 ヒデコ

マイッタと言わぬゴーヤの蔓の先
夏休み冷めるいとまもない麦茶
この夏も耐える力を試された
温暖に拍車をかけている吐息
大丈夫ビールの泡に励まされ

シドニー 三谷 たん吉

傷ついた地球に保険効かぬもの
怒れ地球核テロ銭に走る奴
省エネのオリンピックを四年後に
石油より水の時代はすぐそこに

メルボルン 藤原 ポン吉

鳥の巢に光と影が見え隠れ
国背負う重圧超えた汗光る
小声でもみんなに届く金の歌
五つの輪企業のロゴでなびく旗

札幌市 三浦 強一

福耳も萎びて後期高齢者
ハードルがだんだん高くなる老後
そば打ちを習ってそばの日が続き
欠点もあって好かれる癒し系

札幌市 小沢 淳

不揃いの野菜にあった安堵感
毒舌家さすがポイント突いている
咲いて散るそんな自然に僕もいる
人間の海でもがいて溺れそう

青森県 松山 芳生

にんげんが好きで酒盛りばかりする
コンビ二もないふるさとに母ひとり
日本酒はいわしの目刺し好きらしい
指先きの煙草の不安離れない

佐渡市 高野 不二

書道展読めない文字をほめている
期待した雨は降らない朝寝坊
甲子園行きに敗れてほっとする
父の日を誰も言い出してはくれず

草加市 飯土井 健翁

スポーツに理屈は要らぬ勝つばかり
弥陀の掌にお任せします九十八
十七回忌妻が見ている仏間の灯
火の玉となつて修羅場を越えた頃

横浜市 川島 良子

百歳のお顔の艶に負けている
北島康介キミは宇宙人かもしれぬ
笑い合う家族でいようずっとずっと
好物のコロッケ孫を待ちわびる

日立市 加藤 権悟

豊穡の大地なめてみるかいでみる
田の神が休耕田を見て黙り
畝となら大地にいのちある限り
晩学の峠あしたもいそがしい

藤沢市 加藤 スズコ

穏やかに余生につなぐ辞書とペン
古里の訛りに出合うケアハウス
うなぎに負けぬいわしかば焼き土用の日
婿殿ふたり笑い止まらぬ父の日に

和歌山市 田中 すすず

ぬるま湯に浸りチャンスをもた逃がす

弱点を愛して長い夫婦仲

楽しかったと番外編に書いてある

齢には勝てぬ淋しいことを言うお人

和歌山市 福井 菜摘

にこにこ何にも勝る処世術

二人三脚泣いて笑って半世紀

戻れない橋の向こうにあるカルテ

一枚のカルテに消えた旅プラン

和歌山市 根田 よしこ

サダメって誰が決めるの水の事故

孫ら来るクーラーおやつお目当てに

二十年先の医療を信じてる

老母介護よろこび見つけ生きていく

和歌山市 土屋 起世子

足らざるを補い合って戦中派

簡単にゆかぬ夫がやさしい日

嬉しさが色に出てくる茄子漬ける

孫の手の届かぬところへ置く偽装

紀の川市 吉村 幸

帰って来い父の西瓜がでんと待つ

本職より宣伝マンが似合う知事

森林浴さらりと夏の錆落す

旅半ば過ぎて身軽にするリュック

紀の川市 木村 徑子

美しい老いを夢みているのです

うろうろと余生楽しむマイペース

どこへどう転ぼうと今翔んでみる

わたしの詩ルーツはきつと亡父の歌

紀の川市 北山 絹子

連名が祝儀袋を厚くする

目の前に淋しがりやの父がいる

満月や恋泥棒に狙われる

時が流れて母の眠りが浅くなる

紀の川市 宇野 幹子

草いきれ大地の吐息もれてくる

饒舌なベンを味方にして無口

素うどんを一人ですする四面楚歌

ブレッシヤーに弱い男の骨密度

岩出市 村中 悦男

読み返すほどにむかつく契約書

音量を小さくしてと妻がいう

深爪になりそうになる風呂あがり

葉は緑きめると対話進まない

田辺市 大峠 可動

神無月出雲の夕日見て帰り

躊躇する一步を囁く風の笛

丁丁廃止雷雲が火を落す

追伸や今年もあまた天下り

海南市 小谷 小雪

アブラ蟬少し焦っていませんか
抹茶ミルクひと口飲んで小休止
辛口の批評に耐えて実をつける
広い視野おもちなさいと空の鳥

京都市 清水 英旺

甲子園判官びきたんという
蟬の声を天蓋にして小径ゆく
北京五輪光と影をあぶり出す
鳥の巣から百年の夢飛翔する

奈良市 矢野 良一

贅沢はおいしいものを一寸ずつ
風呂あがりみどりの風が堪らない
美瑛の丘おとぎの国へ来たような
燈火会に桃源郷の古都の夏

奈良市 田中 賢治

電話口笑っていると妻が来る
長電話妻の姉妹は皆後期
売り込みの電話の主は声美人
本当かな松茸づくしバスツアー

奈良市 尾畑 なを江

種も運生えたところから歩き出す
よろしおま何と不思議な響かな
うっかりとちやっかりが居て姦しい
彼岸花にぎやかに咲きひそと咲き

大阪府 西川 冷子

暑い日の熱い視線是北京へと
康介をたたえみずきに涙する
炎昼も萎むを知らぬ百日紅
百日紅見上げて我に喝入れる

大阪市 萩原 大朔

幸せだいそいそ帰る家がある
産声に皆んな集まる街だった
恩返しできる喜びよき余生
スピードを忘れ楽しい旅にする

大阪市 寺井 弘子

過包装断りエコを通し切る
夕立に一息の涼いれている
男ならロマンを追えと父の酒
縁日の金魚二度目の夏泳ぐ

大阪市 安藤 なつこ

口ピアス色々不便もあるだろに
仲たがいくり返し友になってゆけ
ストレッツチしながら洗濯物を干す
日本中そんなに癒やさなアカンのか

大阪市 田浦 實

朝顔で早寝早起き夏元氣
心の垢旅に遊んで落します
遊んでますかはいと答える有り難さ
銀蜻蛉会えたんですよ旅の宿

大阪市 尾崎 黄紅

人間でない人間が増えてくる
広辞苑の重さに歳が負けている
階段の数よみ老いの昇り降り
功成つて失敗談の得意なり

大阪市 尾崎 ゆめ

夏のしつぽに根性を試される
じわじわと貴方に融けて恋成就
思いつき泣きたい時のアイシヤドウ
女一人の耳に優しい雨の音

堺市 近藤 治子

温度計体温計をあざ笑う
英会話力だめしに豪華旅
辛抱も特技のうちに入れている
運のある子だと母親胸を張る

堺市 大久保 伸子

目標がおいでおいでと逃げていく
飽食のはてが偏食肥満体
笑い袋買つてぼちぼち生きている
満月よ地球は欠けることばかり

堺市 大隅 克博

電車には轢かれぬように繁る草
マンションが西日をうまく遮断する
誤解生む言葉さけると通じない
松茸の匂いを忘れかけている

堺市 羽田野 洋介

勉強は二の次先ずは朗らかに
人前では呼び名を変えるふたりです
和食だなんてどうせうどんかそばでしょう
斜めにしか世の中見ない未熟者

豊中市 源田 啓生

民族の祭だワツシヨイ北京でワツシヨイ
夏雲を頭のにせて磨崖仏
高齢化庭に紫陽花枯れ果てる
少年の日の白球はどこへやら

豊中市 松尾 美智代

猛暑日は涼をもらいにスーパへ
急に雨来ない迎えを待つてみる
バイキング試されている自制心
ずるずると流されてゆく楽な道

豊中市 谷川 勇治

銃の重み忘れられない敗戦日
父の日記延命拒否と書いて逝く
友達にかけた電話に秘書が出た
八月十五日芋粥の日と孫が言う

八尾市 寺川 肇

言葉が出ない熱い涙の金連覇
限りある生命余さぬ蟬時雨
陸続きで無い島国に居る安堵
世界一かわいい孫を金で釣る

八尾市 赤木 妙子

生産地探す地球儀くるくると
元のつく古い名刺にある孤独
水増しはしない心が乾くから
くだおれ太郎と旅の話など

八尾市 松葉 君江

次世代へ生きるルールを叩きこむ
血のにじむ努力へ運が味方する
無農薬土にこだわる太い腕
どろんこの好きな子供にある未来

寝屋川市 小嶋 みさと

蟬たちも昼寝してるか静かなり
古稀すぎて活字中毒治らない
玉の汗夏の球宴宝物
自分史はちゃんと顔に書いてある

寝屋川市 岡本 勲

望みばかり多くて年のこと忘れ
昭和史の鉄道唱歌が耳にある
おのぞみどおりしてやるといふ商品券
ほんやりと流れてたどりつくあの世

宝塚市 丸山 孔一

着替えたら犬は留守番覚悟する
朝一番神社清めの空気吸う

牛が問う俺の生れは何処なのか
ニイハオと言つて土用の鰻食う

茨木市 島田 誠一

おとなしく文句も言わぬ子で怖い
ブルータスだらけになった食偽装
文句なし今年の虎は猫じゃない
終業のベルが女に染め上げる

藤井寺市 増井 ヨシ枝

あけすけと言っているのはオチヨボ口
散歩道地球まるごと蟬の声
CO₂払う箸を買いにゆく
カナカナの声ききたくて降りた駅

藤井寺市 伊藤 アヤ子

何処からかぶかぶか浮いて来た噂
リモコンも効かなく成った私の脳
ひまわりが太陽に背を向けている
悲しみを抱いては明日へ進めない

池田市 多田 契子

肝だめし火の玉誰も見えないまま
西瓜出て静かになった隣の子
隣の犬うちの防犯まかせてる
孫自慢しかない貴女老いている

泉佐野市 稲葉 洋

よしず越す暑気もさすがに丸くなり
あれは僕ぼつんと秋の離れ雲

このメタボ冬眠用でございます
種播いてさて三年後八年後

泉佐野市 備後 三代子

長寿への道連れプツリどないしよう

迎え火に悲喜交交の日を憶う

初盆に験の奥もしめりがち

タクトふる蟬はどこかと仰ぎ見る

吹田市 早 泉 早 人

物忘れニコチン切れのせいにする

墓参り父に捧げるタバコ吸う

浴びるほど飲んで割り勘有難い

わたくしのどこを切っても酒がもれ

藤井寺市 俣 野 登志子

お昼寝の子守唄です蟬時雨

お迎えのパパにとつてもいい笑顔

秀才でも脇が甘いね御曹司

ありがとうごめんなさいと睦まじい

泉大津市 助 川 和 美

戻りたい親子で団扇蚊帳の中

物価高猛暑に勝てずビール呑む

長生さを詫びてる母は車椅子

東大を目指す子供の先案じ

枚方市 坂 本 ミヨノ

喫茶店おばさん達の声泳ぐ

歳月も走馬燈なり深い闇

ガラス玉のピアス平気で旅楽し

智恵袋うんと軽めに老いてくる

尼崎市 藤 岡 り こ

来客の目の高さまで掃除する

手鏡をのぞくとそこに亡母が居た

愛と憎しみ背中合せに誰も待つ

イケメンに愛想笑いの孫二歳

西宮市 藤 本 直

残像を求め佇む遠花火

水茄子と茶粥が夏のいのち綱

健康の話しながら煙草吸う

歯を磨く鏡の顔の日々新た

神戸市 木 村 忠 義

樹の陰が茶店に見える炎天下

その雲よ日傘になっていて欲しい

車より歩くのが良い出会いあり

僕が買うと魚さかなの日が続く

明石市 梶 谷 和 郎

ポイントが溜らぬカードばかり増え

太陽は変らないのに温暖化

図書館を居場所と決めた定年後

刃こぼれが生きた証を見せつける

篠山市 谷 田 多美子

湯上りに陽のぬくもりのパジャマ着る

開け放し入道雲と話し合う

盆の月リハビリ室の人まばら

夾竹桃咲いて八十路の夏が来る

山鹿市 阿部 ミツ子

お盆なりお煮しめいっぱい仏さま

七回忌会う喜びに主忘れ

すぎし日の生き永らえて七回忌

電卓をもてあましてつづ充電す

雲南市 福岡 博利

早寝早起き三食たべて句詠点

少し間を置いてご意見申し上げ

寒暖に関係はなくひる寝する

水戸黄門今日も昼寝の目ざましに

境港市 中井 虎尾

この日本何を信じて生きりやいい

寝るヤジる民が選んだ議員様

千の風吹かずにおくれ盆の墓

ハンドルのたこ消え腕と勘が落ち

鳥取市 津村 律子

丹精こめた稲穂の花が咲き揃う

市の台所賄う自負で葱出荷

スケールの大きさを見る北京五輪

カーナビを付けてもやはり人に聞く

鳥取県 岡本 幸枝

うで相撲爺の手加減氣に入らぬ

朝市の粒のそろわぬトマト買う

ひっそりと咲きたいのです折らないで

援護射撃楽屋はいつも太っ腹

鳥取県 田口 清帆

水をやる花は素直に返事する

履歴書に資格を並べて職がない

喜寿迎えギヤはスローに切り替えて

高齢化逆手に新しい街つくる

鳥取市 近藤 秋星

三途の川あるか見て来た人は無い

納涼祭雷雨も待つて居てくれた

北京五輪終わりテレビもホッとする

若しかしてあの世涼しいかも知れぬ

松江市 山根 邦代

メールでの誘い迂闊に乗られない

いそいそと出掛けましたよ特別便

実話読むかすむ活字を追いつながら

転げ出た温もり嬉し宅急便

米子市 小塩 智加恵

お礼状早いが癖の丸い文字

骨折って纏めた二人はや五十

焼酎もビールも酒も並べてる

オリンピック高校野球胃が痛む

雲南市 菅田 かつ子

激励の前置き少し長すぎる

パンとジャム買うだけなのにネックレス

夏休みパンにソーメンオムライス

おじいちゃん喜寿だ喜寿だと騒ぎ立て

米子市 吉田陽子

まだ咲いていたくて水を飲み続け

子が巢立ち無風状態つまらない

負けて勝つとは言うものの負けている

帰る頃やと調子が出る職場

松江市 相見柳歩

夕暮れの歌は優しさ求めない

焦らない来世も次の世もあるさ

仏なら敵を許して弟子にする

君と逢う夜空に星座描くように

府中市 岩本雅代

サロンの輪お手玉遊び童唄

物価高我慢がまんの夏を越す

いざと言う時に女も強くなり

吹けば飛ぶ老いにも税が付くばかり

府中市 馬場利子

ストレスを溜めて人間らしく生き

絵手紙へ意外と描ける蝶の舞い

無人駅つばめ親子のワンルーム

吹き抜ける風の涼あり過疎の夏

竹原市 土井輝恵

私の心を磨く墓掃除

約束は介護それまで自由欲し

自転車にバラソルセットしたまんま

意に副わぬ署名ついた事がある

竹原市 國實力

信号の赤わたる気で初投句

方言で友と話せた小半日

相性が良すぎて銭が溜らない

切れ味の凄さ英樹の書道展

今治市 渡邊伊津志

生きて居て申し訳ない原爆忌

欲捨ててから友達が寄ってくる

相槌を打つから話とまらない

発想を変えると解ける悩みごと

宇部市 高山清子

上げ底で済ます不況の交際費

微笑んでも弱みは見せぬ独りの灯

一寸先見えぬ世だから生きられる

沈黙は空気を読んだ思いやり

福岡県 林さだき

折り返し点から空が澄んでいる

敗戦後無神論者になった父

看護師に負けぬ介護のボランティア

悲しくも偽装見抜けぬそのひとり

香南市 近森功

登り坂つまづく石が多くなり

十二月八日自分史が始まる

四十キロメタボ知らずの大ジヨッキ

辛棒だ生きているから痛いのだ

取手市 葛西 清

妻と居て良いも悪いも時流れ

梅雨の雲口実にして昼の酒

子供部屋減築をして端居する

栃木市 岡野 すみれ

父母逝ってこの世にこわいものはない

楽のぞみ嫁った都会もままならず

日だまりの噂これから風に乗る

昭島市 野口 忠

連発の花火ビールの泡を消し

虫の音が夫婦喧嘩に気兼ねする

迷走の序曲地球の温暖化

東京都 井上 つよし

大鯰寝返りを打つ暑さかな

喜寿過ぎて刃こぼれ目立つここかしこ

昭和の風に時々出会う老いの坂

横浜市 巖田 かず枝

すみません米も良いけどパンが嫌い

一歳がまねをするから要注意

母と居る盆正月も帰省なし

静岡市 渡辺 芳子

必修に教育勅語修身を

お盆花造花にしてとお寺様

解り合う人の少なき八十歳

三田市 谷 祐康

ライバルは僕のピンチがうれしそう

黒い過去潜めて白く生きている

カラオケのトリに決まって出る軍歌

三田市 福田 好文

若き日の恋は互いに語らない

日に一つあれば輝く誉め言葉

久々に締めるネクタイまた黒

三田市 阪本 藤朗

朝曇り暑い一日どう暮らそ

山寺もやっぱり暑い夏の昼

立派だが花も線香も無いお墓

三田市 辻 開子

香と匂ぶらり寄らせる道の駅

ひと呼吸おけば毒舌ならぬのに

リハビリで裏と表の愛を知る

橋本市 石田 隆彦

六十で青春謳歌一人旅

古寺の歴史に出合う石碑文字

五輪見て愛国心を身につける

加東市 黒崎 美紗子

親善のゲームやっぱり意地を見せ

恋歌が流れカラオケ顔なじみ

アルバムを土産話のヨーロッパ

加西市 金川 宣子

内緒事口から羽が生え出した
初めての百点ひらり出して見せ
故郷にどつぱり浸る夏休み

和歌山市 坂部 かずみ

初年金花束ひとつ買う予定
脳トレのクイズばかりをひとり見る
新聞の切り抜き積んで捨てられず

和歌山市 堀 富美子

撥ね返す言葉だんだん空しなる
最後まで生き残ったカスミ草
回転木馬少し迷路へもぐりたい

紀の川市 辻内 次根

外出をするためとつてある元氣
笹舟の流れる川は澄んでいる
日本の良さは見せないワイドショー

京都市 藤井 文代

温暖化服のスタイルどう変る
飽食の今はいらぬ鰻の日
ノーと言えず私の影に支配され

奈良市 阿部 茶々

何故かしらこころ点滅いい予感
骨がないぬらりくらりとやめてんか
潮騒を聞きながら寝る遍路宿

奈良市 辻内 げんえい

骨太の方針かなり瘦せてきた
わが娘度胸と愛嬌誰に似た
喧嘩しても背中掻き合う老夫婦

奈良市 乾 春雄

リハビリの杖にほほ笑む青い空
風の噂に胸のトレモロ鳴りやまず
口下手の男すらすら嘘を吐く

奈良市 岩本 浩二

書道家の短冊みみずが這うている
度胸出し小遣い値上げ言うてみる
娘です整形前は似てました

生駒市 小西 稔

政治家は文句ならべて聞かぬふり
日本食ソフトな味に秘密あり
食べ物も心もソフト元氣出る

大阪市 吉川 弘泰

秋冷えに河内木綿の温かさ
街道の店でもみじの天ぶらが
肩寄せて居酒屋入る秋の風

大阪市 原田 すみ子

虚栄心すつかり抜けてさらし葱
泣かそうとしていなくてきつと泣く
真ん中は油断を誘う楽な位置

大阪府 畑 中 節 子

大阪府 小 栢 こずえ

泳ぐよりひしめきあいの白良浜
口に鮎ころがしながら草を引き
我が名札付けて野菜は旅立ちぬ

大阪府 神 野 千恵子

のびきったような真夏の午後三時

阿波踊り河童するりと紛れ込み

発想が豊か物の無い時代

大阪府 江島谷 勝 弘

朝六時手術成功友の声

百名山やつと六峰登ったぞ

執念と粘りで建った彬の碑

大阪府 吉 内 タカ子

夕立が心の汗も流し切る

茜雲ながめ食事に弾みつく

ニガウリの主役メニユーが暑さ除け

大阪府 若 月 祐 作

あんたもか後期高齢手をつなご

脳がまた昼寝で老いたかなと思ふ

瓢箪へちま朝な夕なに語りかけ

大阪府 高 木 道 子

声一つ幾千の蟬コンサート

テンポよく経読み帰る盆の僧

秋茄子の滴る紺を漬け込んで

今日もまたノルマにおされトコロテン
汗かいて涙の顔をカバーする

夏休み想い出作り親子旅

大阪府 坂 口 公 子

戦という字さへ身震いさせられる

でもやっぱり賑わうところへ行きたいね

水撒いて遊んでるんでない酷暑

大阪府 平 井 露 芳

五百円入れたら喋べる貯金箱

血統書付けて鰻売る時世

実力があるから記録出す水着

大阪府 橋 村 容 子

おそれた入院通知来てしまい

ベッドとは仲良くしすぎ帰れない

さらさらと茶漬けがいいな家の味

大阪府 山 本 加お里

いじめられてたことやつと気が付いた

黒猫にクロと呼んだらついてきた

趣味は別それでもうまが合う二人

大阪府 太 田 としお

サプリメントしつかり飲んでボケはじめ

肉ジャガがジャガ肉になる物価高

いじめられ松は見事な盆栽に

豊中市 藤 沢 長 一

夏盛りソーメンだけが喉通る
水風呂で親子で遊ぶ大暑の日
恋人とウキ輪を抱いて波越える

豊中市 荒 巻 夢

親戚に医者の一人も欲しい歳
漬かりすぎの胡瓜胃袋刺激する
風呂上り水の甘さが舌に沁む

吹田市 中 村 十八娘

それなりにまあいけて居る夏帽子
青簾諍う声が筒抜けに
ブルサイド古希の水着で人魚姫

吹田市 藏 田 光子

中庸を選んで無事に過してる
内緒ごと胸の中から掴み出す
スパイスをたっぷりかす愛の鞭

吹田市 二 宮 栄 子

真上の星亡夫と信じ話する
ボランティア結んだ手と手はなれない
厄年の息子へ神のはしごする

河内長野市 木太久 正 一

妻病んで男の料理限りあり
わが行方神にゆだねて今日生きる
北京五輪開会式に金メダル

河内長野市 黒 岩 靖 博

食事時妻が座れば後セルフ
教育者汚職の波に呑みこまれ
水茄子の色に染まったアート生地

河内長野市 内 海 綾 乃

セミ達も暑いが苦手晩に鳴く
憧れは職種ではなく正社員
仲直りするのにスイカ切っている

羽曳野市 福 田 悦 子

おはぎには亡母の甘さがまだ残る
そろそろとサンタに手紙書きましよう
十五夜に見せておきたい初デート

羽曳野市 宇都宮 ちづる

やっと寝た孫をそおと降ろす技
DNA忘れて我子に期待する
満たされているのに淋しさ少しある

羽曳野市 仲 谷 真 一

奥様の得意メニューはカレーだけ
喫茶店グラスの水持てあそぶ
かき氷つかの間の涼楽しめる

羽曳野市 松 本 静 子

合歓の花旅の途中で見る花や
蝉しぐれ聴きながら入る里の風呂
寺の庭ハスの葉で飲む酒の味

八尾市 西川 義明

高槻市 片山 かずお

羨しいお水飲んででも太る人

真正直生きていることが恩返し

亡父母の恩じんわりしみて来る読経

八尾市 笹倉 ひろし

メタボ腹抱え手摺にすぐ頼る

同情はいらぬガソリン下げてくれ

偶然の顔して皆んな偽装する

八尾市 田邊 浩三

百均でまたストレスを捨ててきた

ドッキリとさせる短パン孫娘

ばけ防止の知恵の輪解けず孫を呼ぶ

八尾市 前田 紀雄

畏れ入る三千本は通過点

鯛の夕暮時に聞く安堵

泳ぎ方変えれば友が遠ざかる

高槻市 安田 忠子

子の遊び奪ってしまう情報化

楽しんで未来を神にまかせてる

タクシーにお金貰って乗れるとは

高槻市 笠原 乃りこ

お向いも隣も孫の来るお盆

竹の皮の御手洗団子父の膝

アバウトになつて嫁から慕われる

頑張ったわりに効果のないエステ

ひこばえに生きる覚悟を聞いてみる

秋はどこ水面を渡る風に聞く

藤井寺市 津田 シルク

蟬の音が今年はどうも気に障る

ワンランク下げた生活にもなれて

武蔵の郷通過だけだが勇気湧く

藤井寺市 吉田 喜代子

トマトは赤食欲わかぬ黄トマト

喧嘩しない怒りの深さ気付かない

鬼の霍乱風邪も長引く事を知る

枚方市 小川 良吉

遊んでも空しさ残る戦中派

遊び下手生きるでだても歯痒いね

川遊び生命がかかる夏休み

枚方市 二宮 紫鳳

大笑い病氣も逃げる福も来る

アケスケな友のおしゃべり気が晴れる

人間も調律したい六十路坂

堺市 荻野 像山

酒のんで治る痛さは知れている

同情してる間がない葬儀委員長

水槽に住んで純血ほこる雑魚

箕面市 寺井柳童

留守電に馴れず緊張口籠る

海外旅行や々と通じた日本語

子はゲームママはメールにただ夢中

富田林市 古田千華

一滴の雫も川は見逃さず

心からいつも笑っている家族

木洩れ日が斜めに森を織ってゆく

岸和田市 中岡香代

空気が急に存在定年後

いつだって怒っているからこわくない

紅白で存在を知る演歌歌手

門真市 矢阪英雄

書店消え接骨院がふえる街

生き残る街は噴水いき止める

豆腐売るベルが楽しみ老いた街

西宮市 石野照代

敬老の日デイサービスでお赤飯

健康で日々是好日生きてます

紫陽花や形そのままに老いてゆく

尼崎市 桑原東園

駅名を元気に告げる縄電車

明け鳥今朝はソプラノ謳歌する

老いの知恵呆けぬうちにと遺書を書く

尼崎市 河津正治

感情の起伏を笑う波頭

あれからを支えた金の卵たち

万雷の拍手握手がぎこちない

尼崎市 小池幸子

趣味の会何時のまにやら年頭

追憶の母の教えに無駄がない

縁側の風鈴ゆれて午睡中

神戸市 武田恵美子

外泊でやっぱりと涙する

夫には見つからぬ前さがしだそ

すれちがい息子と逢ったラッキード

三木市 山口久子

孫娘塾と部活の夏休み

とら年に千人針はもうごめん

終戦日靖国神社で亡兄に逢う

加東市 岩本美緒子

四年後の五輪どうかながいのち

高校野球嫌いじゃあないが時代劇

医師よりも吾が身よく知る旧治療

兵庫県 永井かほる

朝二時間てんでこ舞の野菜世話

暑さ負けじオクラ私と競争だ

やつと暮れ寝ゴザ待ってる腰伸ばそ

倉吉市 酒井 美美子

ストレスがとれて明るい顔になる
母からのエールもらって元気でる
若返る薬がないかさがしてる

鳥取県 岩崎 和子

体内の悪玉除き空の青

声出さず読書三昧夫が居る
助っ人が夕食準備ほっとする

鳥取県 大塚 美代子

遊ぶ日をきっちり付けるカレンダー
お化け屋敷ひめいにのびるろくろ首
脳細胞右と左をかえて見る

鳥取市 大前 安子

頼み事するでないぞと肩が言う
情熱の卵抱えてまた一年
心窓開けて眼が磨かれる

鳥取県 斉尾 くにこ

食べ終えたジャムはラベルを張り替える
プライドが履歴知られてうろたえる
人間のランクと違う棒グラフ

鳥取市 谷岡 清子

盆参り拌めば涙湧いてくる
八月の夜空亡夫の星いずこ
一人居はさみしいかこの鳥だよな

鳥取市 山岡 紀子

残り物食べてゆつくり昼寝する
時計までゆつくり進む六十五
パートタイムに暇を出された六十五

鳥取県 橋谷 静江

ライバルが今はやさしく見えてきた
家族愛他人が見れば美しい
生涯の夢を途中で立て直す

鳥取県 飯野 菖子

人間に青い地球は疲れだす
すんません頭を下げて楽になる
腹心が飲むなのむなと責めてくる

鳥取県 岡村 孝明

麦めしのお陰か元気高齢者
大雨へ砂漠の人を思いやり
二度の職バスの知らせに胸弾む

鳥取市 坂本 智子

道迷う不安の中をうろうろと
高騰に安さ求めてうろうろと
顔並べ泳ぐ雑魚たち楽しそう

鳥取市 山口 千代子

日陰の花も秘かに咲いて生きている
老人会古希はまだまだ花盛り
若さはいいなメイクせんでも美しい

優秀なベアにもあつた透き間風

倉吉市 前田 喜美子

地球から驕る人間お灸する

大家族孫もひ孫も丸い顔

倉吉市 藤井 美津恵

菩提寺に蓮の花咲き静かなり

終戦の暑い日の事忘れない

夏休み炊事するのも忙しい

米子市 猪森 スミエ

一木一草大地を包むみどり色

ぶな林が見頃てくてく歩き頃

公園のブランコ人待ち顔の夏

境港市 遠藤 那珂子

レジ袋こまめに折って持ち歩く

鶴一つ折れないままに老いてきた

ライバルの顔色読んで一歩出る

雲南市 渡部 好榮

今一度チャンス待つてる赤い靴

行く道は一つ明るく今日も行く

天からの声に迷った団子虫

雲南市 武島 ちよえ

初物へまだ長生きをせよと言う

しきたりを私の代は変えられぬ

ふくらはぎ明日に備えて揉みほぐす

たつぷりと小遣い握り老い達者

安来市 原 煩惱児

知らぬこと分からねことの八十路坂

深夜独り見詰める青い街路灯

松江市 松浦 登志子

あと五分待つと勝算あつたのに

送り盆島棧橋のシルエツト

現金で払うガソリンぞつとする

出雲市 川島 和歌子

明日を待つ旅の支度も枕元

大軒コーラスを聞く旅の宿

携帯で今改札を出るところ

大洲市 花岡 順子

キッチンを磨く手抜き穴埋めに

うぬぼれが自然を破壊するヒト科

用心をせねば年金減らされる

高知県 いの 静草

相棒は孫が捏ねたるこのコップ

カラオケに耐えられぬから真人間

仙人を自称すれども金は要る

阿波市 三浦 千津子

自由とや三猿捨てて生き延びる

世知辛い世をスイスイとアメンボウ

思いやり広く平らな日を貰う

第59回 西宮市民文化祭 川柳大会

と き 10月26日(日) 12時開場
ところ 西宮市民会館 4階
阪神、JR西宮駅下車 市役所南隣
題・選者 (各題2句)

「シンプル」	嶋 澤 喜八郎	選
「淡 い」	板 野 美 子	選
「ウ フ フ」	藤 原 一 志	選
「几 帳 面」	奥 田 みつ子	選
「回転寿司」	大 森 一 甲	選
「短 い」	佐 藤 純 一	選

会 費 1000円 (呈 作品集)
賞 各題 秀句 呈
共 催 西宮北口川柳会 西宮川柳会
瓦木川柳勉強会 甲子園川柳社
連絡先 〒669-1142 西宮市名塩山荘17-16
佐藤 純一 TEL 0797-61-1718
甲子園川柳社

裸から育てた会社右あがり
八十路でもグランドゴルフ今が旬
音痴でも君が代だけは熱唱す

庭に水いやしてくれる蝶とんぼ
お盆には来れぬと皆で寺参り
八月の空は祈りで澄んでいく

唐津市	唐津市	唐津市
北 村	吉 富	岩 崎
松 風	節 子	實

あかつき川柳会 11月句会

日 時 11月14日(金) 14時
会 場 JR天満駅すぐ 国労会館
兼 題 「迷 う」「めらめら」
投 句 先 「手 紙」「時事吟」
〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14

江島谷勝弘宛

川柳塔のぞみ 10月句会

日 時 10月28日(火) 13時
会 場 銀座区民館(地下鉄東銀座3番出口)
宿 題 「ずっと」杉山昌善選「さあらん」洪川溪舟選
(各2句)「あつた」播本充子選
「自由吟」1句
欠 席 投 句 10月25日 必着 播本充子宛
〒193-0832 八王子市散田町2-31-3

第32回 寝屋川市民川柳大会

日 時 11月3日(祝) 12時開場
会 場 寝屋川市立総合センター 4階
(京阪寝屋川市駅下車、バス西口
乗場より守口市駅行、太間公園
行他乗車総合センター前下車)

兼題と選者 (各題2句)

「知 識」	角 野 仁 清	選
「創 造」	長 浜 美 籠	選
「マ ナ ー」	大 内 朝 子	選
「あわてる」	足 立 淑 子	選
「学 ぶ」	川 端 一 歩	選
「美 し い」	奥 田 みつ子	選

会 費 1000円
賞 各題秀句に賞状と記念品
投 句 10月29日必着(無料)
送り先 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9
高田 博泉 内 川柳ねやがわ
TEL 072-827-9204
主 催 寝屋川市川柳協会
後 援 寝屋川市文化連盟 川柳ねやがわ

麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

人生の雑音

帰れとは死ねといふことにもあたり

人類は悲しからずや左派と右派

労基法無視した老いの一徹さ

ああ僕も汽車を下りしにゆくところなし(啄木祭に)

女将さんと云うてやるには少し若し

あんたにプラスにならぬのなら考えるわと

駅を出た村の子既に影もなし

鯉節に男のちからからるる

親船を離れてきりきりと舞ひぬ

出鱈目に生きて米寿もないものだ

うんそうだそりやそうだとたかられる
壁に塗りこめられたやう人動かず

去年の子今年の子お玉杓子カラケットか

男ばかりで虫のいい話かな

しらじらしき悔やみの淀まず

水溜り飛びそこねても一人かな

涼み船水の深さを聞きたがり

涼むのかと思や女はついとたち

定食へかひこが桑を食ふ如く

元旦だせめて眼鏡を拭きましよう

老人の日の告白に妻が欲し

戎橋さえもいつしか秋となり

銀行と縁もないのに忙しく

貯金帳忘れたころに出し入れす

愛染帖

新家 完司 選

八月の蒼天蟬のレクイエム

日立市 加藤 権悟

(評) 六日広島、約十四万人。九日長崎、約七万人。死者の数が正確に把握できないということが、原爆の恐ろしさを語っている。

寝屋川市 太田とし子

涙拭く前に汗拭く慰霊祭

(評) 苦しみながら死んだ人たちのことを考えると「これしきの炎天」とは思うが……いま生きている生身の身体は、汗が吹き出る。

大阪市 大川 桃花

明日咲く蕾を持って母見舞う

(評) 咲き切った花はきれいだ、すぐに散る。ふつくら膨らんだ蕾だけを選んでお見舞いする。こころやさしい思い遣り。

鳥取県 春木圭一郎

無理をせず嫌な相手に嫌な顔

(評) 現役の会社勤めでは封じてきた自己主張。定年退職して無罪放免になったのだから、これからは自分のために、自分に正直に!

和歌山市 古久保和子

方舟に乗るには汚れ過ぎている

(評) ノアとその家族が方舟で救われたのは、彼らが「純真無垢」であつたから。わたしたちの誰に、その資格があるのだろうか。

香南市 桑名 孝雄

うるうるはしない飲み屋は決めてある

(評) 「ふらふらウロウロ飲み歩いてはっかり!」という叱責はご免蒙りたい。飲む店は一軒のみ。飲んだら真つ直ぐ帰宅している。

八尾市 田邊 浩三

二次会はタバコの吸える店にする

(評) 嫌煙権があるなら愛煙権も認めてほしいが、最近の宴会場には灰皿もない。二次会ぐらいは気楽にプカプカやりたいものだ。

芦屋市 黒田 能子

栄光の表彰状がセピア色

(評) 満場の注視を浴びた栄光の一瞬。あの日の晴れ姿を覚えているのは、他ならぬ自分自身と一枚の色褪せた表彰状のみ。

和歌山県 森下よりこ

山姥の姿で畑から帰る

(評) 着古したよれよれの作業着にもんぺ。破れかけた麦藁帽子に半分隠した顔は、土いじりに疲れてグツソリ。どこから見ても山姥。

弘前市 高瀬 霜石

出世には縁がなかったから元氣友だちが地獄で待っているらしい

吹田市 早泉 早人

世渡りの上手な犬が寄ってくる

自堕落に過こしてしまう妻の留守リタイヤのわたしに馴染む無精ひげ

三田市 北野 哲男

やつと喜寿これから好期高齢者

三代代雑音撒いて皆達者

池田市 上嶋 幸雀

エアコンが転た寝させる終戦日

炎天を逃れテレビの原爆忌
おぼろ豆腐のような暮しへ蟬時雨

寝屋川市 籠島 恵子

一日がドミノ倒しになる寝坊

今日はどうやすすみなさいと窓の月

黒石市 相馬 一花

いのちには色も香りも味もない

実力はないが笑顔で世を渡る

藤井寺市 鴨谷瑠美子

いるようでいらぬ物がまた増えた
PLの花火わたしの夏休み

松原市 玉置 重人

ツツコミがだんだん鈍る下り坂
ゴミの日をしつかり妻に教えられ

高知市 松尾 憲子

恋をして脳の半分カラ回り

鳥取県 竹信 照彦

棚経の憎も大汗かいている

鳥取県 竹信 照彦

大阪市 柴本ばつは
埃いっぱいたまっています元気です

香芝市 大内 朝子
再婚を待っていたのに古稀が来た

西宮市 牧瀬富喜子

草いきれまだ変わらない敗戦日
何となく蒲鉾板をためている

和泉市 横山 捷也

衣食住足りてる妻のグチを聞く
朝顔がしぼんだ僕はおこられた

和歌山市 木本 朱夏

格差にも上中並とございます
宝石のような葡萄を食べている

堺市 矢倉 五月

疲れてるけど老友に席ゆずる
お茶誘う電話かけたりかかったり

青森県 松山 芳生

ふるさとの青田にへばる青蛙
平服が静止画像のままの亡妻

箕面市 広島 巴子

万灯に山椒魚も姿見せ
ぐいぐいとビールで治す暑気あたり

鳥取市 夏目 一粋

騒音に変わる炎暑の蝉しぐれ
働けとはっぱをかける蟻の列

八王子市 播本 充子

老母にもパソコンという同居人
体重を減らして真人間になる

堺市 和田つづや
自分史の節目節目にある病

大阪市 渡部さと美
お彼岸が近いとチラシ言うっている

大阪市 小谷 集一

靴買いに自慢の靴を履いて行く
わたくしを作ってくれた皺である

京都市 高島 啓子

黒い雲眺め夕立待っている
岸和田市 井伊 東吉

米子市 白根 ふみ

百日紅あるじはとうに逝つたのに
蝉しぐれせみは休憩してつづけ

弘前市 福士 慕情

オウオウと言つて集まる鯉の口
父母の義理果して歩く熨斗袋

和歌山市 上地登美代

なつかしい味しみじみと芋の蔓
マスク美人ですが真夏は手で塞ぐ

藤井寺市 鈴木いさお

名医なら飲むな吸うなはず
美しい人は古稀でも美しい

豊中市 荒巻 夢

夏祭り浴衣の金魚跳ねている
死にたいと言つてる人の欲深さ

三田市 阪本 藤朗

捨てもせず使われもせぬインク壺
おばさんの影が日時計長はなし

鳥取市 西川 和子
ちよつと無理させた体がよく眠る

河内長野市 坂上 淳司
酔い痴れて地獄を何度見たことか

八王子市 川名 洋子

エコの本クーラーつけて読んでいる
礼服も作業着も居る屋台酒

吹田市 太田 昭

親はもう逝つて真夜中爪を切る
歳相応に飲めと女房のお説教

大阪市 森田 明子

結局は酒と心中するつもり
まつすぐに帰つて来たら夫留守

松江市 三島 淞丘

あんぱんが美味しそうですけしの粒
あんぱんに和洋の文化つまつて

神戸市 田中 章子

隙のないお人のあくび見てホッと
一流の女将八方睨みの目

唐津市 井上 勝規

三味線で軍歌老兵酔いつぶれ
余白には燻っている思慕がある

長岡京市 山田 葉子

帰りたい場所が変わらぬままのひと
子等のため長く生きないよう願う

大阪市 榎本日の出

ゴキブリも蠅も真面目に生きている

堺市 奥 時雄
やんごとなき姫もへソ出す軽井沢

鳥取市 福西 茶子
草抜いた穴でミミズが逃げまどう

大阪市 岩崎 公誠
ゴミ捨てで拾った本が面白い

弘前市 今 愁女
安全に目覚めはじめた自給率

大阪市 坂 裕之
猛暑日の法事お経も汗をかく

倉敷市 撰 喜子
保育園静かな時は昼寝だけ

松江市 川本 畔
手を引いた子に引かれたくない老後

「とほとほ」か「うろうろ」かどちらにしよう
返事はそつと手を触れただけのこと

三田市 堀 正和
美人には美人の苦勞あるらしい

分らないネジをみつけた部屋の隅
梅漬けるわたしに雨は聞こえない

藤井寺市 太田扶美代
ボタンもチャックもない服縫っている

大阪市 川原 章久
ぜいたくな時間をつぶす鈍行車

茶碗の音聞くと食欲急に出る
堺市 志田 千代

うろ覚えの道順を教えてしまふ
センスよく洗濯物を干してある

亀岡市 井上 森生
コンチキチン音色が疲れ解すよう

西脇市 七反田順子
コンチキチン露地のおにぎり旨いこと

寝屋川市 平松かすみ
血圧に悪い朝刊ばかりなり

福岡県 林 さだき
大きさの同じがすてき万国旗

藤井寺市 高田美代子
怒りたい日にも理性が待てという

八尾市 吉村 一風
人差し指握る赤ちゃんお早うさん

日高市 根岸 方子
義母からの深鍋で炊く盆の膳

四條畷市 吉岡 修
三役にとどまつてろよ日本人

米子市 政岡日枝子
私の名刺は中期高齢者

吹田市 穴吹 尚士
毎日がのどかに過ぎる金魚鉢

高槻市 佐甲 昭二
恋の道金魚鉢にもあるらしい

橿原市 居谷真理子
相棒にしたのは首の太い人

鳥取市 土橋 螢
一生に二度死ぬことはない命

大阪府 米澤 淑子
仲の良い夫婦も別別に浄土

倉吉市 山中 康子
ぎりぎりできくくり抜けてる所帯主

高知市 小川てるみ
酒の腕上げて高知の仲間入り

寝屋川市 岡本 勲
お茶漬けにおこうこあれば平和です

京都市 都倉 求芽
さらさら茶漬けは駄目と医者が言う

大阪府 小栢こずえ
養生をしたら草は倍に伸び

羽曳野市 永田 章司
願い事聞かずに消える流れ星

鳥取市 倉益 一瑤
欠点を味があるとはありがたい

和歌山市 田中 みね
気になる言葉それは「全然だいじょうぶ」

砂川市 大橋 政良
マンネリの足の動きをどうしよう

米子市 青戸 田鶴
終戦の日も咲いていたさるすべり

高槻市 富田 美義
生き下手で人より多く雨に遭う

シドニー 坂上のり子
家族の和ブツリちぎった嫁の鼻

枚方市 海老池 洋
阪神の試合予定も貼る手帳

和歌山市 福本 英子
自分から年寄りですと言うっておく

熊本県 高野 宵草
図書館はご近所なのに暇がない

森 茜
おむこさんやあいゴーヤの花盛り
寝屋川市

永原 昌鼓
盛夏ですもつこりお腹持て余す
鳥取市

徳山みつこ
外食へ暑と厭わぬ夏帽子
羽曳野市

土橋はるお
糞暑と球児が睨み合っている
鳥取市

川崎ひかり
スーパ―は遠慮気兼ねのない避暑地
東かがわ市

針生 和代
熱帯夜冷房でまた温暖化
河内長野市

西岡 洛酔
中ジョッキ老いの坂道登る意気
和泉市

水谷 正子
あつい日もゆつくりあついお茶を飲む
河内長野市

古川 奮水
安売りで金を浮かせて籤を買った
姫路市

根田よしこ
妹に老母の爪切り言いつける
和歌山市

井丸 昌紀
マニアル通り化けて街中同じ顔
大阪市

岸本 孝子
カロリーの計算だけは上手です
鳥取市

三浦 強一
娘さん下さいと来た不埒者
札幌市

大阪市 谷口 義
ご愛顧に応え長生き致します

坊農 柳弘
筋トレも脳トレもして古稀達者
大和郡山市

富山ルイ子
辛辣な批評うれしく聞いている
寝屋川市

藤本 直
顔だけを見に来たという親孝行
西宮市

春城 年代
聞き耳を立てて覚えた人生学
尼崎市

谷川 勇治
リモコンを妻に渡してロボットに
豊中市

木村 徑子
寅さんになつてみたいとうちの人
紀の川市

初山 隆盛
メタボリック・シンドロームと対話する
大阪府

山岡 紀子
姑さんと二人三脚して生きる
鳥取市

太田としお
マスコミはヒステリックでお節介
大阪市

酒井 一壺
メディア今すべておおげさすぎないか
羽曳野市

樋口 輝夫
戦争を知らない嫁のカボチャ好き
唐津市

岡本 幸枝
名水の汗が解毒をしてくれる
鳥取県

市丸 晴翠
省エネを祖母の暮らしに教えられ
唐津市

奈良市 岩本 浩一
辞書片手眼鏡上げたり下したり

黒田 茂代
石庭の石と仲良く小半日
西子市

岸本 宏章
悪知恵が働くうちはまだ悔けぬ
鳥取市

宮本かりん
衝突をしながら丸い石となり
堺市

安平次弘道
配当を当てにするから腹が立ち
美祿市

山川日出子
小銭入れニツクネームは小ゆめです
交野市

相見 柳歩
愚かしいことを言い合う恋さなかな
松江市

山宮 愛恵
くすぐるとまだ怒るから大丈夫
鳥取市

山口 光久
長生きの約束酒が邪魔をする
神戸市

近藤 治子
辛抱がはやらず離婚ふえてきた
堺市

辻内 次根
保険証と診察券が必需品
紀の川市

西谷 悦子
ポリウムを絞ればロツクいいもんだ
鳥取県

福田 好文
海に来てゲーム離さぬ孫悲し
三田市

若松 雅枝
秋海棠亡夫と最後の旅だった
藤井寺市

平成二十年度 路郎賞



川西市

西内朋月

胃袋がないのに腹が空いてくる
他人から見れば気楽なひとりもの
祈るよりほかに手がないから祈り
醒めた目で見ている僕が別にいる
いらんこと喋って悔いがまた増える

路郎賞準優秀作第一席

大阪市 升成 好

窯の火をくぐって白磁透きとおる
生きたとは少し木洩れ日少し闇
退屈の長さに足りぬ砂時計
伸びをしてちよつと運動したつもり
問診のような母への長電話

路郎賞準優秀作第二席

大阪市 森田 明子

路郎賞なんて自分には全然縁のない賞だと思っていたのに受賞したとの知らせにびっくりしています。ビギナラックでホールインワンをした時と同じ気分です。このようなビッグな賞を頂けるような作力は全く無いと思っておりますが、入選させていただいた選者の皆様に感謝しております。
これを期に賞に恥じぬよう勉強せねばと思っております。

柳歴

平成十一年	堺川柳会入会
同年	エイシス堺入会 (天笑先生)
同年	産経学園入会 (薫風先生)
平成十三年	川柳塔同人
平成十四年	川柳塔理事
平成十六年	川柳塔常任理事

外出着着せると母の背が伸びる
信じ合う絆はゆるい目に結ぶ
看板の地味さに惹かれ客となる
さよならを大切に言う癖が付く
友達もやっぱり少しヘソ曲がり

平成二十年 度 川柳塔賞

川柳塔賞準優秀作第一席

香南市 桑 名 孝 雄

宮総代神と内緒の飲む話

元の歩に戻りたがっている と金

哲学の顔で二月は閉じ籠もる

傘寿とや相合傘の傘の中

至近弾どかんどかんと来る訃報

川柳塔賞準優秀作第二席

札幌市 小 沢 淳

遠まわしだけと急所を突いている

無芸だが気配に生きる技を持つ

人情の垣根正論引つ込める

ピエロ役演じ続けて癖になる

ほどほどの欲がからんで人の味



枚 方 市

小 林 わ こ

誰よりも日傘欲しいと泣く地球
悪女にも淑女にもなる帽子買い
憧れのあなたはいつも川向こう
ありったけのプライド時に風を入れ
やりくりを忘れた顔で美術館

この度、何か区切りになればと応募しましたところ、受賞のお知らせに大変驚いています。これも、諸先生、諸先輩の温かいご指導の賜物だと深く感謝しています。本当に有りがとうございました。まだまだ未熟者です。皆様、今後ともご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

柳 歴

平成十七年 西宮北口川柳会入会

同 年 川柳塔誌友

同 年 毎日川柳教室入会

平成十九年 第二回初歩教室年間賞受賞

路 郎 賞 得 点 表 (応募総数142名)

1 位 = 5 点 2 位 = 4 点 3 位 = 3 点 4 位 = 2 点 5 位 = 1 点 (表の数字は得点)

選者	作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
河内	天笑		5				2				1	3			4						
西出	楓楽		5	4	3										2		1				
菊地	政勝		5						1	2								3			4
園田	猿沓	3		4						2					5		1				
都倉	求芽	5	2						1				4					3			
穴吹	尚士			4					5			1		3	2						
榎原	道夫			4			5		2		3						1				
瀬戸まさよ		3			4	5											2			1	
高田美代子			4	3		1			5												2
寺川	弘一		2	4				1	3								5				
平松かすみ		2		1	5										4						3
北野	哲男	5	3							1			2						4		
牧渕富喜子			5	3			2				4								1		
山本	義子		1		3						5								2		4
牛尾	緑良		2				3				1		4	5							
古久保和子			2		5	1												3			4
岩崎みさ江									3	5					4		1	2			
倉益	一瑤								5	1							4	2			3
武田	帆雀	4				5											1	3			2
最上	和枝				3				4				1		5			2			
小川	注湖	5		1					4							3		2			
竹治ちかし			2						5	4					1			3			
松本	文子		5				4		3		2							1			
石原	淑子			4				2										3	5	1	
平田	実男			4				3	1									5	2		
市丸	晴翠			4						3				2	5			1			
高橋	宏臣								3		4		1				5				2
合 計		27	43	40	23	12	16	6	45	18	20	4	12	10	32	3	21	33	14	2	24
	三島	升成	森田	武本	中井	大橋	海老池	西内	高橋	安土	志田	榎本	吉岡	矢倉	堀	高島	岸本	田中	平嶋美智子	夏目	
	崧	好	明子	碧	アキ	政良	洋	朋月	岳水	理恵	千代	宏子	修	五月	正和	啓子	宏章	章子	智子	一粋	

川柳塔賞得点表 (応募総数 67名)

1位=5点 2位=4点 3位=3点 4位=2点 5位=1点 (表の数字は得点)

選者	作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
河内	天笑						3		5	1							4			2	
西出	楓楽	4					1		5					3			2				
菊地	政勝		4						5									3		1	2
園田	獏脊				3						2			1			5		4		
都倉	求芽		3	4									2				5	1			
穴吹	尚士						3		1		5				4					2	
榎原	道夫			2			4				1					3	5				
瀬戸	まさよ	5							3			1		2			4				
高田	美代子					3	4			2					5	1					
寺川	弘一			3						2	1			5						4	
平松	かすみ				1				5	2	3									4	
北野	哲男			4						1	2						3			5	
牧渕	富喜子						4		5		2		3				1				
山本	義子			3					5		4								1	2	
牛尾	緑良	1					4	5								3					2
古久保	和子						5							2		1	3				4
岩崎	みさ江	3		5					1					4					2		
倉益	一瑤							4	3		1					2	5				
武田	帆雀							2	5		4						3				1
最上	和枝			5					4		3									1	2
小川	注湖		1		4	3			2											5	
竹治	ちかし		5	2						3	4						1				
松本	文子			5	2					1	4								3		
石原	淑子				5		4			3							1			2	
平田	実男			1	5				3	2					4						
市丸	晴翠		1		3	2			5								4				
高橋	宏臣							2	5					4			3				1
合 計		13	14	34	23	8	32	13	62	17	36	1	5	21	13	10	49	4	10	28	12
	安田	花岡	寺井	吉田	吉川	辻内	小谷	小林	川島	小沢	田浦	加川	平野	坂	北山	桑名	谷川	いの	土屋	根田	
	忠子	順子	柳童	陽子	弘泰	次根	小雪	わこ	良子	淳	實	靖鬼	あずま	裕之	絹子	孝雄	勇治	静草	起世子	よしこ	

平成二十年度二賞選考委員

第一次選者（六名）

河内 天笑・西出 楓楽・小島 蘭幸
村上 玄也・山本希久子・木本 朱夏

第二次選者（二十七名）

本社関係（二名） 河内 天笑・西出 楓楽

地方関係（二十五名）（一）内は人数 ブロック内五十音順

北海道・東北 関東 北陸ブロック（二）

菊地 政勝・蘭田 猿杏

京都・奈良ブロック（一） 都倉 求芽

大阪ブロック（六）

穴吹 尚士・榎原 道夫・瀬戸まさよ・高田美代子

寺川 弘一・平松かすみ

兵庫ブロック（三）

北野 哲男・牧渕富喜子・山本 義子

和歌山ブロック（二） 牛尾 緑良・古久保和子

鳥取ブロック（四）

岩崎みさ江・倉益 一瑤・武田 帆雀・最上 和枝

島根ブロック（三）

小川 注湖・竹治ちかし・松本 文子

岡山・広島・山口ブロック（二）

石原 淑子・平田 実男

四国・九州（二） 市丸晴翠・高橋宏臣

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を
選択して応募してください。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳
塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、
間違いないようにお願いします。

平成二十年度各賞選者

愛染帖賞 新家 完司

檸檬賞 鈴木 公弘 西口いわゑ

一路賞 小西 雄々 松原 寿子

各地柳壇賞 遠山 可住 播本 充子

受賞者の皆さんおめでとう

河内 天 笑

八月十二日午前十時例年通り二賞選考のために事務所に集う。小島蘭幸、西出楓葉、山本希久子、村上玄也、木本朱夏の五氏が応募作品の全てに向き合い五氏それぞれがチェックした後には私の机に回される。三氏以上のマークが入った作品が全体の約半数を占め、その中より路郎賞、川柳塔賞のそれぞれ二十作品を選び出す。

昨年につづき路郎賞は男性に川柳塔賞は女性に輝く。また六賞の内訳は男性二名女性四名となる。

路郎賞の西内朋月さんおめでとう。銜いなく日頃を詠まれた作品が大方の好感を集めた。準賞の升成好さん森田明子さん、お二人共日常を大切に、こまやかに詠まれました。

川柳塔賞の小林わこさんおめでとう、夢のある作品をたのしみにしています。準賞の桑名孝雄さん、小沢淳さん、どんな人間を詠みつけてください。前進あるのみ！

愛染帖賞の吉田あずきさん、檸檬賞の高田美代子さん、一路賞の福本英子さんおめでとう。お三方には軽いユーモアを抱いた作品に共通したものがあります。各地柳壇賞は太田昭さんに、そして準賞一、二席もすべて男性作家です。準二席の春城武庫坊様は八月末に鬼籍へ移られました。合掌。

二賞選考経緯

木本 朱 夏

暦の上では立秋過ぎとはいえ、相変わらずの猛暑の八月十二日、天笑主幹はじめ第一次選考委員が事務所に集合。小島蘭幸副主幹は遠路広島からの出席である。

路郎賞には百四十二名、川柳塔賞には六十七名の応募である。年々応募者が減少することを寂しく思う。例年のように規定違反がないか、チェック作業にはいる。

一次選考をクリアした作品は、最終的に主幹が路郎賞二十編、川柳塔賞二十編に絞り込む。伝統の栄えある路郎賞・川柳塔賞の最終の二十編に選ばれるだけでも誇らしいことである。

各作品をコピーの後、第二次選考に郵送。二十二日、返送された選考結果を西出理事長立会いのもと、山本希久子、木本朱夏が事務所で集計。路郎賞・川柳塔賞が決定した。

今年も応募作品には誤字脱字があり、なぜか全く同じ句で二度応募してきた同人が居た。せっかくの応募である。文字の上手下手に関係なく、丁寧に作品をしたためたと思う。

また一年間の集大成として二賞に取り組んで欲しい。勉強の機会として二賞に取り組んで欲しい。5句を自選という、その5句が案外に難しいようだ。せっかく2、3句良い句があっても、なぜこの句が？と思う句が入っている、選外になった方も……。5句揃えること、自選は難しいと改めて感じたことである。

二賞候補者在住地

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
路郎賞	松江市	大阪府	大阪府	和歌山市	富田林市	砂川市	枚方市	川西市	弘前市	檜原市	堺市	京都府	四條畷市	堺市	三田市	京都府	鳥取市	神戸市	大阪府	鳥取市
川柳塔賞	高槻市	大洲市	箕面市	米子市	大阪府	紀の川市	海南市	枚方市	横浜市	札幌市	大阪府	尼崎市	岐阜市	大阪府	紀の川市	香南市	豊中市	高知市	和歌山市	和歌山市

受賞作品

豊中市 吉田 あずき



吉田あずき

長年川柳をやっているつもり構えた気持で作句をしてしまいがちでしたが、愛染帖に出合つて素直な気楽な気持ちで思わず口をついて出る人間の本心を句にしました。お認めいただいて嬉しく光栄に思っております。有難うございました。

柳 歴

昭和五十九年 NHK文化センター入会
昭和六十二年 川柳塔同人
平成 十六年 路郎賞準優秀作第一席

この道を来たから会えた人ばかり
神様のお顔も存じ上げぬまま
臨月の腹には誰もさからえぬ
わが書いたメモをクイズの様に解く
美人の湯顔までつかりたい気分

評 吉田あずき：「この道を」「神様の」「臨月の」いずれも、深遠な命題を、分かりやすい言葉で表現した手腕は見事。「わが書いた」「美人の湯」には正直な姿が現れている。
相馬一花：「猜疑心」や「良い噂」というものから、捉え難い人間の本质を見抜き、みごと十七音にまとめた。
太田 昭：「もう一度」「満腹に」いずれも現在の自分を詠つていながら、万人に通じる普遍性があり共感できる。
太田扶美代：年間を通じてコンスタントに佳吟を提出するのは至難であるが、常に安定した力を發揮した。
(新家完司)

準賞作品

黒石市 相馬 一花

直線を曲線にする猜疑心
途中から霧散してゆく良い噂
初孫をロールキャベツのように抱く
吹田市 太田 昭
もう一度こけたら杖を買いにゆく
満腹になると信号機を守る
人間の言葉に犬が妥協する
藤井寺市 太田 扶美代
花の下ちよつと小遣い持つてます
突然がよいな拍手も花束も
生きるのもつらい痛いだるい眠い

受賞作品

藤井寺市 高田 美代子

ため息の長さはわたくしのすべて

評 嘆きの彩として付け加えられた溜め息はたくさん聞かせていただいたが、これほどまでに愛しさを覚えるものとは感じてこなかった。この溜め息は命そのものであり、各人が抱いている固有の道程でもある。
(鈴木 公弘)

ため息の長さ、でこの句は決まりました。すらりとした立ち姿のような句、作者の感性が生んだ比類なき秀句です。準賞作品、伊勢田毅さんの句、拉致問題に切り込んだ句に胸をうたれました。高杉千歩さんの句、丸腰になって、生きて行く心境をうまく纏られました。
(西口いわゑ)



高田美代子

出来ちゃった川柳が私のスタイルで本来は雑詠が好き、人間の句いのする句を大切にしたいと思っています。選者の方が一度は目を通して下さる事を信じて投句を続けてきましたが今回は檸檬賞という爽やかなびきのご褒美をいただき後期高齢素直に御礼を申し上げます。

柳 歴
昭和四十五年

川柳を始める
川柳塔社同人 理事、
常任理事を経て参与
日本川柳協会常任幹
事 他

準賞作品

拉致の子を抱きたい親が老いてゆく 伊勢田 毅
丸腰になってふらふらしなくなる 高杉 千歩

候補作品

横文字の国で微笑みなら通じ 平野あずま
酔い醒めの水これからを考える 坊農 柳弘
群青の沖に溺れてゆく大志 森下 愛論
機嫌よく酔ってこの世の千鳥足 早川 遡行
A3の話B5にコピーする 斉尾くにこ
粒選りでないが親孝行だった 小林 妻子

受賞作品

和歌山市 福本英子

編みかけたままセーターも歳をとる

評 自分自身のセーターか。または、両親が恋人へのプレゼント用か。年齢のためか気はあせるが進まない。そこに数々のドラマを秘めている。

準賞作品は人間としての生き方に対し、警告と安らぎを意識させる句と言えましょう。

(小西 雄々)

どなたのセーターであったのかドラマチックですが、加齢は作者だけでなく、セーターもという手法がこの句を生かしユーモアが効いている。準賞作品は、出る杭は打たれるという事なのか、個性を強く打ち出すのも生き辛い世相に立ち向かう姿勢の現れでしょう。避けては通れぬ道を受け止める私も句の中へ同化され心を打たれる。

(松原 寿子)



福本 英子

一路賞受賞と川柳塔わかやまの大輪主幹から報せをいただきはんとのことかとびつくりしました。

故西尾某先生から皆さんに解る句を作るようにと、教えていただき、長く続けてきただけの私に後期高齢者でも受賞出来る、励みになりました。ありがとうございます。

準賞作品

実力があるのでポスト外される

志田 千代

余命表ここから神の掌に渡す

太田扶美代

候補作品

農政を非難しながら種をまく

吉田 弘子

荒む世に格差が走り風騒ぐ

富田 美義

小さいと蟻は思ったことがない

奥 時雄

柳 歴

昭和四十八年 川柳わかやま同人
昭和五十四年 川柳塔社同人
昭和六十三年 川柳塔社理事

平成二十年度 各地柳壇賞

受賞作品

吹田市 太田 昭

組の上で通した黙秘権

評 受賞句は、組の上の鯉ならぬ黙秘権の意外性がおもしろく男性的なスケールの大きさに魅力があります。

準賞の「人間が」と「お荷物に」の二句ともに人間としての尊厳を大切に生きる姿勢が好ましい。

候補作はそれぞれに作者の顔が見える佳い作品でした。

「上等な句を選びなはれ」薫風先生の声が聞こえてきました。受賞句は、川柳味たっぷり、骨太な作者の生き方「自分を守るのは自分」に共感。お見事！

準賞二句は、大人とは斯くあるべしの句。
候補作は、日常をさらりと……思わず引き込まれてしまいました。



太田 昭

この度、予想だになかった各地柳壇賞をいただき、身之余の光栄です。二十数年前、今は亡き橘高薫風先生にお声を掛けて頂きながら、転勤族の悲哀で腰の落ち着かぬまま過ごし、離職を機に川柳のお仲間に入れて頂きましたが、今回の受賞を氣を引き締めて受け止め、一層精進して参ります。どうも有り難うございました。

準賞作品

人間が人間らしく居る痛み 杉本 孝男

お荷物にならないように生きたいな (敬) 春城武庫坊

候補作品

適当に忘れて次を詰め込もう 中村れんげ

少年にもらった席が心地よい 吉村 一風

面倒見よくてちよつぱり疑われ 小川てるみ

帆を下ろす男の顔が丸くなる 神夏磯典子

柳 歴
平成十、 N H K 学園
十二年 (川柳講座)

平成十二年 川柳塔社 誌友

平成十三年 翠洋会 会員

同年 川柳塔社 同人

平成十四年 川柳塔社理事

誹風柳多留一篇研究 38

小栗清吾・伊吹和男

山田昭夫・増田忠彦

山口由昭

清 博 美

273 始皇帝鷹をとらまえそうにする

小栗 「始皇帝」と「雁」で、「雁門」のこ
とだと分かれればそれまでという句。

「雁門」は、『日国』に「咸陽宮の築地が
高いため雁が越えられないことがあるので、
始皇帝が雁の通り抜けられるように設けたと
いう穴。日本で創作された説話と思われる」
とあり、また『平家物語』（巻五「咸陽宮」）
には「秋は田の面の雁、春は越路へ帰るにも、
飛行自在のさはりあれば、築地には雁門と名
づけて鉄の門をあけてぞ通しける」とある。

初かりを門内できくしこうてい 安七信6

「門をあほう」と鳥ぬけ 五六5

全頁 賛。

274 いふ年でわるちゑをかう源三位

小栗 悪知恵を飼うは、悪知恵をつける。

源三位頼政が以仁王を担いで謀叛を企てた
事件を詠んだ句。時に治承四年（一一八〇）
のことで、長治元年（一一〇四）生まれの頼
政はすでに七六歳。まさに「いい年で悪知恵
をつけた」ものである。

古来稀なる頼政のむほん也 一五42

源三位大きな智恵をつけもふし 一〇8

全頁 賛。

275 ゑほして八手からにならぬ向ふ疵

小栗 向こう傷は敵と対面して受けた傷であ

るから、一種の手柄と言つてよい。しかし烏
帽子を被つていて向こう傷を受けたこの人の
場合は、としても手柄とは言えないという意で、
答へは忠臣蔵の吉良上野介。

にげ疵はうしろにかきものてなし

切り口へ塩のしみたハゑほし疵 一三25

明三宮4

全頁 賛。

276 公家にしちや大きな声と鳥羽でいひ

小栗 この句「史伝」では「文覚」の項に採
り、文覚が後白河法皇の御所法住寺殿に暴れ
込み、大音声で勸進帳を読み上げた挙げ句捕
まえられた事件を詠んだ句とされる。三面子
先生がおつしやるからそうなのだろうが、知
識不足のため状況を解説できない。鳥羽は？
伊吹 文覚は公家でないから、まわりには公
家ばかり居るものだと思つていたら、大声の
僧が乱入というのだろうか？文覚が暴れ込ん
だのか、治承三年三月で、その十一月に後白
河法皇は平清盛のために鳥羽殿に幽閉された
から、そこで思い出して言っているのだろう
か？ ？ばかりです。

増田 賛。伊吹氏の補説にも。

山口 賛。『源平盛衰記』によれば、この時、

太政大臣師長が琵琶、大納言資賢は笛、少納言盛定は簫などで管弦の最中であつたといふ。「思ひもよらぬ大法師、調子乱るる大音にて、片言がちなる勸進帳を読みたれば」とあるから、公家達は驚いたろう。伊吹説にも賛。

277 銀きせる中うだめにしてはなしかけ

小栗 中溜めは、宙にささえていること。

道楽息子がキザなポーズで話しかけているといふのであらう。「中溜め」が具体的に今一つはつきりしないが、顔の高さに大様に支え持っているようなポーズだろうと思う。

全員 賛。

278 ぜんひやうかうすきちきりにふら下カリ

伊吹 仙台高尾。高尾太夫が三又で伊達綱宗に吊るし切りにされたのは、体重と同じ重さの黄金で身請けされることになったため、大形のさお秤にぶら下がったのがその前兆である、といふのである。島田重三郎との「薄き契り」を利かせる。

ぜんひやうも 請ヶ出ス時もつるされる

安七板2

全員 賛。

279 度くちよくしよの義にあらず雷の事

伊吹 菅原道真の怨霊である雷に悩まされている御所からの勅使が、比叡山は道真の旧師法性坊をたびたび訪れて、その窮状を訴えているところ。たびたびというのは「勅使三度に及ぶならば」(謡曲「雷電」)からにやう。

度々の余の義にあらず月の事 安二鶴2
持てたのも余の義にあらず夜具の事

五六27

と似た句があるけれど、何かの文句取りなのだろうか、それとも決まり文句か。

公家のなきことを憎正三度き、天四天一

山田 賛。「余の義にあらず」は手紙などの決まり文句でしょう。

山口 賛。武家などがちよつと改まった時に「余の義にあらず」は日常会話として使うでしょう。

280 駿河から遠江までかたくるま

伊吹 東海道は駿河国島田宿から遠江国金谷宿までの間には大井川があり、その川幅が一里ほどあるのを川越人足の肩車に乗つての

旅。例句は川溜め。

駿河様遠江様も御たいくつ

傍四18

山口 賛。スケールの大きさと狭さをからくつた面白さ。

281 御てんもの来てくだんせをわすれかね

伊吹 陰間を買った奥女中。別れ際に「また近いうちに来てくだんせ」と言われた上言葉が、いつまでも耳の奥に残っている。相手は芳町の陰間あたりだろう。

よし町のふらち御殿へばつと知れ

近ひうちごんせと後家を送る也

傍三44

山田 賛。陰間は上方出が主だったようので、次のような句がある。

関東の子ハよし町へむかぬ也

拾八23

282 めしびつへ顔をつつ込ムつよい暑氣

伊吹 炊いてからまだそれほど経っていないのに、饂えてしまったのではないかと、飯櫃の底に残ったご飯を嗅いで見るほどの暑い夏である。

ほと、きすもふひや飯もすへる頃

八14

きつい暑氣飯が一盃ひける也

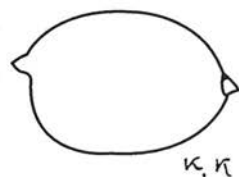
宮一41

全員 賛。

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)



「うろろ」

高瀬霜石選

夏休みまたバトカーに会いました
踊り場でうろろしてる人がいる
求人覧ばかりうろろする眉毛
うろろで一日済んだ初仕事
どこへしまったんだ大切な時間
うろろとしてると私逃げますよ
その他大勢の中でうろろしてしまふ
掌の上でうろろろ生きてる
徘徊の老母の後ろをつけている
鳩尾にうろろろしてる蟻り
うろろろもあって人間味が出る
姿見の中でうろろろしてる魔女
好きですと言われて古稀がうろろたえる
古希になりまだ定まらぬ座標軸
うろろろとしたら仲間に入られる
生まれ落ちてまだうろろろとしています

西宮市	牧瀬富喜子
鳥取市	平尾 菜美
大阪市	尾崎 ゆめ
大洲市	花岡 順子
西予市	黒田 茂代
鳥取県	斉尾くにこ
和歌山市	田中 すす
鳥取市	春木圭一郎
枚方市	丹後屋 肇
大阪狭山市	矢野 梓
松江市	三島 淞丘
大和郡山市	坊農 柳弘
豊中市	江見 見清
大阪市	近藤 正
堺市	志田 千代
堺市	柿花 和夫

「うろろ」

木本朱夏選

うろろで一日済んだ初仕事
御仏の掌の中だった放浪記
名人がなおうろろと道探す
地球上うろろしたら地雷踏む
恍惚の人うろろと花を追う
うまい蕎麦捜しうろろしてる舌
一人うろろガイドの旗に叱られる
地図もつてうろろカモにされそうだ
ばくだつてその場にいたらうろろたえる
うろろと噂に右の耳を貸す
心得が無くてうろろする茶席
うろろとしてたら急にふけ出した
髪伸びるうろろしてもしくなくて
うろろろが肥やしになった三代目
おみくじの女難うろろする期待
夜の街もの欲しそうな回遊魚

大洲市	花岡 順子
東京都	井上つよし
羽曳野市	吉村久仁雄
鳥取県	岩崎 和子
香南市	近藤 功
大阪府	古今堂蕉子
茨木市	藤井 正雄
羽曳野市	徳山みつこ
大阪市	萩原 大朔
米子市	小塩智加恵
愛知県	早川 遯行
東かがわ市	清川 玲子
海南市	小谷 小雪
高知市	小川てるみ
富田林市	片岡智恵子
和歌山県	森下よりこ

お先にどうぞちよつとうろろしたいので
 人工の星がうろろする宇宙
 ヒマワリの迷路を出ない赤い靴
 胸の中悪魔うろろしだす時
 センサーに怪しい奴と睨まれる
 通り魔がうろろしてる街も好き
 手術台あの世うろろして戻る
 うろろはしてはられぬ物価高
 うろろとしてたら僕の席がない
 CO2増えてうろろする地球
 うろろとしてたら株が下がった
 試食済みトイレ探しているのです
 うろろとするから目ばちこが出来る
 うろろと生きて世の中^{くろ}寝める
 胃の中をうろろしてるピロリ菌
 デジタルの森で迷子になっている
 平和へと曲りくねっている迷路
 淋しいのがうろろ寄ってくる屋台
 ハローワークの窓をうろろする蛭
 入る家決めかねている福の神
 うろろとしても三度は食べている

秀句

枕方市	小林	わこ
三田市	堀	正和
八王子市	播本	充子
大阪市	平嶋美智子	
大阪市	大川	桃花
大阪市	井丸	昌紀
尼崎市	軸丸	勝巳
岸和田市	堤	植代
羽曳野市	安芸田泰子	
府中市	藤岡ビデコ	
松原市	玉置	重人
三田市	北野	哲男
大阪市	谷口	義
寝屋川市	太田とし子	
尼崎市	藤井	宏造
河内長野市	山岡富美子	
吹田市	穴吹	尚士
四條畷市	吉岡	修
弘前市	斉藤	劼
明石市	桃谷	和郎
堺市	宮本かりん	
寝屋川市	籠島	恵子
八王子市	川名	洋子
鳥取市	夏目	一粋

当てもなく一往復した御堂筋
 うろろも出来ず居場所のない私
 挙動不審いいいつもの散歩です
 徘徊じゃないぞと犬を連れている
 徘徊へ目鼻をつける発信機
 紅一点うろろ空気裏返す
 デジタルの森で迷子になっている
 ヒマワリの迷路を出ない赤い靴
 とても楽しくうろろそれも華の刻
 お先にどうぞちよつとうろろしたいので
 レフェリーの笛はうろろなどしない
 うろろと生きる尻尾が出たまんま
 諦めぬ影がうろろ探すあいいうえお
 電子辞書うろろ探すあいいうえお
 隠された酒がどこかにある筈だ
 曲者の如くうろろ喫煙者
 うろろとデパチカで秋捜してる
 手術台あの世うろろして戻る
 図書館へうろろと寄る某と某
 後期高齢うろろしてすみません
 公認の老いだうろろさせてくれ

秀句

藤井寺市	高田美代子
大洲市	中居 善信
堺市	羽田野洋介
三田市	堀 正和
京都府	高島 啓子
鳥取県	田口 清帆
河内長野市	山岡富美子
八王子市	播本 充子
米子市	政岡日枝子
枚方市	小林 わこ
鳥取市	有沢せつ子
和歌山市	武本 碧
福岡県	林 さだき
宇都市	高山 清子
香南市	桑名 孝雄
西宮市	亀岡 哲子
吹田市	大谷 篤子
尼崎市	軸丸 勝巳
唐津市	仁部 四郎
美作市	小林 妻子
泉佐野市	稲葉 洋
横文字にうろろしてる化粧壇	榎本 宏子
檻の熊きみも所在が無いのだね	古久保和子
横文字に化けてうろろしています	夏目 一粋

公園のベンチ読書の虫がいる
 塾飽もう公園に用が無い
 公園の四季を描いている余白
 公園で初めて吸った好奇心

公園へたばこ仲間会に行き
 公園にともだちがいるお年寄り
 公園にハローワークで会った人

叱られた子が公園で缶を蹴り
 公園の花が一途に咲いている
 公園のなかつた頃は子沢山

公園で鍵つ子秘密基地を持つ
 公園のブランコが錆び風が錆び
 塾へ行く子にブランコの哀しい目

公園で助けた犬が居つかない
 公園はこどもの育つ場所だった

平和公園梅りは深し原爆忌
 夕暮れを待つ公園のテロリスト

公園の掃除の番がくる頃だ
 少子化を心配してる滑り台

人生いろいろ公園の車椅子
 人

公園に来てもゲーム機離さない
 地

陽が落ちて公園別の貌になり
 天

公園に住民票は移せない
 軸

公園に良い子ばかりと限らない

グ ラ ス

伊勢田 毅選



乾杯はグラスに限る響き合い
 魔性っぽく見える女のサングラス

露浮いたグラスに下戸も喉が鳴り
 想い出のグラスにそつと愚痴こぼす

眠れぬ夜グラスに誘う水中花
 酒好きの妻のグラスが威嚇する

グラス干すたびに外堀埋めてくる
 屁理屈がグラスの縁にへばりつく

愚痴の浮くグラスは塩でよく洗う
 止まり木で悩み溶かしているグラス

ペアグラス一ヶだけには理由がある
 決断はグラスに氷鳴ったとき

天主堂八月の陽を波璃の窓
 けじめあるグラスはのり酔つてゆく

細工師の心のままになるグラス
 三杯目あけたグラスが喋りだす

独り酒グラスを猪口に持ちかえる
 手に馴染む古いグラスで飲むお酒

言い過ぎをビールグラスに託しておく
 君は君なのにキリッとサングラス

カットグラスいつか凶器になるだろう
 野心まだグラスの底に秘めておく

理不尽にグラス割りたいときもある
 太陽に何を恥じるかサングラス

唇にグラス押し当て目で合図
 とときめきのグラスの底にある宇宙

おつとつとグラスの縁を越す本音
 ごみ捨てに行く時かけるサングラス

グラスの底今日はじつくり嘘探す
 告白をワイングラスに泳がせる

娘は二十ワイングラスがデビューする
 記念日はグラスを換えて夕の膳

愛に飢え愛を満たしてゆくグラス
 グラスからこぼれた夢の数いくつ

ギョッギョッとグラスをみがく妻に距離
 切子です形見分けです酔ってます

あの音は確かグラスが割れたんだ
 佳

乾杯のグラスの底にある敵意
 グラスから尻尾キュンキュン振る金魚

駄菓子屋の虹の架かったガラス瓶
 罪いくつグラスの底に火が鎮む

ステンドグラス魑魅魍魎を和らげる
 人

サイダーの泡しゅわしゅわと君を恋う
 いい音がするからきつといいグラス

何色になりましようかとグラス言う
 軸

とまり木のグラスが明日を模索する

善 信 鐘 造 充 子 満 子 弘 風 重 人 玄 也 邇 行 絹 子 千 代 子 毅 幹 子 恭 昌 朝 子 忠 朝 子 茂 美 壽 美 正 雄 典 子 時 雄 雅 明 堀 正 和

武 史 活 恵 秀 四 巴 子 忠 和 郎 准 一 公 誠 庸 佑 麗 黒 兎 藤 朗 一 粹 光 久 五 月 大 朔 章 司 一 風 小 雪 千 代 志 代 みつこ

主 一郎 強 一 ルイ子 朝 朗 蜂 朗 あずま 孝 一 堀 丘 菜 摘 康 子 伊 津 志 葉 子 淳 司 日 出 妻 子 幸 雀 くにこ 次 根 み ね 登 美 代 幹 子 霜 石 谷 川 勇 治

初歩教室

題一なげ

三宅保州

先祖返りの絵文字

先月号の題は「字」でしたが、それに因んで一か月遅れで恐縮ですが「絵文字」について一くさり。

最近、メール等でいわゆる絵文字が大流行ですね。ところが、絵文字というのは今に始まったものでなく、文字の起源はご承知のとおり、絵文字や象形文字なのです。その意味では、粹がつて絵文字を使っているのも、先祖返りにほかならないのかも知れません。「校正の眼がさかさまの田を見つけ」という名句も、パソコン時代で活字離れの現代には通用しなくなってきたのでしょうか。

人という象形文字にある尻尾 保州
生コンの字が上になり下になり 南都
いまでも言う吉田茂の茂です しげる
何回も字引の世話になった薔薇 かすみ

【同想句】

「始めに浮かんだ句は捨てよ」「同想句に

なりそうな句は作るな」と、耳にタコが出来るほど言われていますが、今回も、子どものなげという質問や、殺伐とした事件が起こるのはなげという同想句がたくさんあります。同想句がすべて駄句でもないのですが、同想句を佳句にするには、よほど卓越した表現力、比喩や意外性が必要で、それはなかなか至難なことです。

「子どものなげ」という疑問を詠んだ同想句」

なげなげと尋ねし孫も二十六 智加恵
なげなげと孫に問われて立往生 治子
孫達の何でなげに逃げてくる 浩二
なげなげと孫に問われてガリ勉に ヒロ
曾孫になげなげと問われて困る祖母 久子
孫のなげ眠った振りやりすこし 勝久
一寸待て子供のなげは難しい 直
子のなげに四苦八苦した遠い日々 宏造
なげという心するどい幼年期 稔
なげなげと聞く幼子の目の光 かずお
幼子のなげでなげに困り顔 光子
なげなげと幼児未知の鍵開ける 房江
なげなげと問う子可愛く鬱陶しい ちづる
子等はなげなげと聞き返し 弘泰
なげと聞く親は嬉しく受け答え 周子
なげと問う頃が我が世の春だった 孔一

「殺伐とした事件を詠んだ句」

なげ殺すみんな大事な命です 美智代
親が子を子が親殺すなげだらう こそえ
巻き添えにしてなげ死に急ぐ若者よ 律子
理由なくキレる子どもの恐ろしさ 大朔
なげなげと思う事件が多すぎる かすみ

【添削・批評句】

原粗食ばかり食べているのになげやせぬ みち代
粗食を食べるが重言になっています。
添粗食しているはずなのになげ痩せぬ
原やせている姉さんなげか食べないの 清
添よく食べる姉がなげだか痩せている
原なんでだろう振り込め詐欺がはびこって 道子
上五に出来る時は安易な上六は避けたい。
添なげだろう振り込め詐欺が後絶たず
原葬式とお通夜に何故かはしゃぐ奴 たん吉
葬式とお通夜同義語に近い。奴は避けたい。
添通夜の席なげかはしゃいでいる男
次の二句は「ら抜き語」を避けたい。
原古着でもなげか捨てずまししょう 正二
添古着でももつたいなくてまししょう
原ためたままなげか捨てられぬ不用品 那珂子
添ためたままなげか捨てられぬ不用品
原おい自分なげ実らない恋をする 柳歩
添実らない恋とわかつているけれど

原 増水困るこちら全然なげ降らぬ 綾 乃
 添 大雨のニュースこちらはなげ降らぬ
 原 なげなのと詰める女の目が悪い 憲 子
 添 なげなのと詰める女の目が悪い
 原 妻の留守なげか鼻唄出るのです 菜 摘
 添 鼻唄がなげか出てくる妻の留守
 原 減る病院増えているのは高齢者 冷 子
 添 病院が減って高齢者は増える
 原 素顔に惚れた言っているのになげ化粧 像 山
 添 なげ化粧するの素顔に惚れたのに
 原 なげと言言葉が聞く知の世界 ポン吉
 添 なげと言言葉が聞く知識欲
 原 マネキンが着れば素敵な服なのに 好 文
 添 マネキンに似合い私に似合わない
 原 友の無口なげ飲み会によく喋る ミヨノ
 添 飲み会になると無口もよく喋り
 原 一年経つなげか亡妻が遭いに来ぬ 堅 坊
 添 亡き妻よなげ逢いに来ぬ一周忌
 原 なげ出来ぬあの人出来てなげ出来ぬ 芳 子
 添 あの人出来て私になげ出来ぬ
 原 なげうちは貯蓄が無いのお父さん 健 柳
 添 既に同想句（暗合句）があり残念です。
 【少し工夫をするとか佳くなる句】
 この夫婦なげかヒントも合ってきた 嘉 彦
 「ああ夫婦」とかで思いを深く詠みたい。
 「なげだろう」今更聞けぬ恥ずかしさ 洋 子

かぎ括弧はできるだけ使わないように。
 原 わだかまり秋刀魚の煙なげ流れ 俊 子
 添 秋刀魚焼く煙り流れぬわだかまり
 原 疑問符が脳の活性化してくれる 次 根
 添 疑問符がもたらす脳の活性化
 原 今以て嫁の心を掴めない 絹 子
 添 努力しても嫁の心が掴めない
 原 二千円札生まれた日からお庫入り 節 子
 添 二千円札いつからお蔵入りしたの
 原 なげだろう女房にやさしい年となり 長 一
 女房はできるだけ使わないように。
 添 なげだろう妻にやさしい歳となり
 原 会いたいと思うとなげか電話あり 弥 生
 通常の会いたいよりも思慕の逢いたい。
 添 逢いたいと思うとなげか電話あり
 原 Uターンのわけは聞かずに母優し イセ
 優しは言わずもがなです。
 添 Uターンのわけは聞いたりしない母
 原 赤ちゃんはどこから来たの永久のなげ 勇 治
 添 赤ちゃんはどこから来たという疑問
 原 子のなげに雄しべ雌しべで狼狽える 幸
 添 子の疑問雄しべ雌しべに狼狽える
 【佳 句】
 なげ惚けるあんまり欲を出すからよ 瑛 子
 後期高齢なげか強がりばかり言う 徑 子

不条理に神の沈黙問いつく
 なげよりも笑顔の今を見てほしい 夢
 親の小言なげか今頃効いてくる すみ子
 なげもつと親を大事にしなかった 乃りこ
 なげなげを掲げ図書館へ通つてる としお
 なげと問う鬼を大事に飼つてます 起世子
 風の向き不意に変わった思いやり 實
 終止符を打つてなげから這い上がる すみれ
 幹 子
 【今月の推せん句】
 腑におちぬ話へ黒酢飲んでみる 中上千代子
 腑に落ちぬ話へ黒酢という一見無関係なものに問答があり、いわゆる「二物衝撃」の効果
 果が如実な句に仕立てられています。
 頭にはなげかよじれた糸があり 藤井文代
 言われてみればなんとなく納得させられる
 句です。その糸は欲望とか嫉妬でしょうか。
 当たり前のこと話しても解説者 岡本 昇
 スポーツ放送の解説者など賛否両論があり
 ますが、見付けのよい句です。
 なげという袋背負って育つ子ら 小林わこ
 良い比喩が佳句となる模範のような句です。
 【私の句】
 それにしても値段を言わぬコーマシヤル
 日本に日本でない基地がある
 （登載洩れの方は役員が添削して返送します）

秀句鑑賞

同人吟 西内朋月

— 9月号から

川柳を始めて十年余り、作句の楽しさ、苦

しさを味わいながら奥深いこの道を模索中です。私自身川柳とお酒を最高の友として、なぐさめられたり、励まされたり、時には見放されたりしながら歩んだ十年でした。

当たり前のことを、当たり前に表現して、真情を理解してもらおう、これが私の川柳です。

河内天笑主幹、奥田みつ子相談役に教えていただきながら、あちこちの句会に出席して、どつぶり川柳に浸っている毎日です。真剣に鑑賞をさせていただきましたが、解釈の相違がありましたらお許し下さい。

ていねいに西瓜の種を取るオトコ

古久保 和子

西瓜ががぶりとかがぶりつき種はベッベツと吐きだすのが男と思つているのに几帳面に食べる前にていねいに種を取っている。恋人が夫か全くの他人か分かりませんが少々物足りなく感じてるのでしょうか。

男性の女性化、女性の男性化、近頃男らしオトコも少なくなりました。

この恋もいまが潮ときかも知れぬ

石谷 美恵子

何事も潮じきがあるのです。幾度も恋をして別れの辛さを経験してやっと今の自分があると思ひましよう。さあまた次の恋に挑戦しようではありませんか。

喫煙のカフェーに集う少数派

田中 章子

喫煙の場所がだんだん減つていき、御堂筋で喫煙したら罰金を取られます。世間から白い目で見られる煙草がかわいそう。然し千円になつても止めぬと豪語する愛煙家もいるようです。

自伝史に粉飾がある闇がある

穴吹 尚士

会社の粉飾決算は罪であり株主に対する背任です。然し個人の粉飾はブライドを持ち挫折を乗り越えた自負があります。闇は闇のままにしておいた方がよいと思います。

コンビニのおかず言い訳そえて出す

山本 希久子

百歳に近いお母さんを見舞いに京都の大原まで、しよつちゅう行き、編集人の大役をこなし、コンビニのおかずと言ひ訳をしつつ夫に出している親孝行な良妻が浮かんできます。

ライバルに知られたくない医者通ひ

村上 玄也

よく分かります。終生のライバルだった奴が元氣そうにしているのに体調が悪く好きなゴルフなど止めてしまひ医者通ひしているなんて、絶対知られたくないのですが…。

加齢のせいもあるので余り無理せずによつくりいきましょう。

二人ではトイレ取り合うこともない

片山 忠

子供たちがいた頃、朝食後わたしが先、僕が先だとトイレを争つていたのを懐かしう思い出します。今は老夫婦二人勝手気配にのんびり暮らしています。

手ぶらでも行けば喜ぶ友がいる

星野 育子

義理の仲では何か持っていないと思ひますが、その品物に苦勞します。その点手ぶらで顔を見せるだけで喜んでくれる親友を持つている幸せですね。

枕にはちと堅過ぎる広辞苑

菊地 政勝

昼寝の枕がわりにされた広辞苑、すこし不

満に思っているのと違いますか、堅くて分厚いから皆に愛されていると思います。

救急車一度も乗ったことがない

早川 廻行

事故にも会わず急病もせず、今までこれた事を感謝しておられます。ですから人間万事塞翁が馬、何があるか分かりませんので、くれぐれも御身ご大切に。

待たされて余計にうまい手打そば

升成 好

名物と聞いて入ったそば屋、注文してからなかなか出てこない。空腹でいらいらしてきた頃にやっと出てきた手打そばがうまい。計算して待たせたのかも知れませんね。

晩酌は麦焼酎に決めている

井丸 昌紀

焼酎は芋と決めている薩摩人。鹿児島で酒と言えば芋焼酎を出してくれるそうです。その独特の匂いと味に癖があり、それが良いと言う人もおられますが、私も昌紀さんと同様に焼酎は麦と決めています。

持ち頃は月の砂漠と赤とんぼ

岩崎 公誠

いいですねえ、王子と王女を乗せた駱駝が砂漠を歩くロマンチックな月夜です。

「旅人も月もやがては去る砂丘 薫風」が浮かびます。郷愁を誘う「赤とんぼ」龍野の

里に石碑が建てられています。

昨日とは何も変わらぬ誕生日

森田 明子

ええっ今日は誕生日だったんだ。子供の頃はケーキにローソクを立て友達を呼んだり、プレゼントを買ったりしたが、今は歳を一つ重ねただけで何も変らぬ日常生活ですね。

切り札の予備を持つてる懷手

藤井 正雄

そうですね、切り札のジョーカーは一枚しかないと思ってましたが、まだ予備のカードを持つておられましたか。余裕ですねえ参りました。

紙おむつ替えている間にしっここれ

齋藤 さくら

本当は赤ちゃんもおむつなんて暑苦しいものはして欲しくないのですが親の都合でしているだけで外したとたんにはシャアと気持よくされているのが目に見えてきます。

先年のことより今日の晩ごはん

河内 月子

五年先は、十年先はなんてことを考えていたらきりがなし。それよりもまず今晩は何にしようか、鰻屋にでも行きましょうかなんてことは無いでしょうね。

値上がりの分アクセスを軽く踏み

太田 昭

ガソリンがあつと言うまに値上がりし年金生活者にとっては堪えられません。いつそ車を売つたらとも思うが事情もあることだし、せめてアクセスを軽く踏んどくか、たいして変らないと思いますけどねえ、気休めですか。

青空が慟哭呑んだ終戦日

野下 之男

八月十五日、九州の疎開先で聞いた雑音が入るラジオの意味がさっぱり分らず近くの大人に戦争は負けたそうだと聞かされ嘸々と泣いたのを憶えています。確かにその時の空は青かったと思います。

直角に暮してるからくたびれる

黒田 能子

結婚して以来、夫に尽し子供の面倒は一人でして孫の世話までしている自分を誉めておられます。然しこの際少し一服されたらいかが。

捨てようと思っていたがまた仕舞う

石原 歳子

流行おくれだしもう着ることもないから捨てようと思ったのに、取りだして見れば着ていた頃を思いだしています。

真つすぐに歩くと壁に突き当たる

伊達 郁夫

十五夜は眩しすぎます一人身

広島 巴子

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 9月号から

喜田准一

ふるさとの過疎を労るそばの花

農政を語る減反とのいくさ

加藤 権悟

進む過疎化と限界集落。食料自給率39%の貧困な農政。減反・増産の猫の目指導。そんな時代を描写し、立ち向かう風刺の効いた句。

轟々と鳴るは熊野の水しぶき

大峠 可動

轟音たてて落ちる靈験あらたかな大滝。落差133米、幅13米を一気に流れ落ちる那智の滝。男のロマンと勇壮さをかき立てる句。

病室に四人四色のドラマあり

二宮 栄子

相部屋四人の入院生活を彷彿とさせる句。小生も三度の入院で、その都度交わした会話の中で、お互いの人生ドラマを垣間見て、勉強させて貰ったことがある。四人四色に味わいがある。

独りが好きでも独りでは生きられぬ

松尾 憲子

人生長丁場。周囲との交りの中で、何もかもうざくなり、独りになりたい時もある。だが家族や仲間と居る時が幸せと感じることの方が多くある。照る日、曇る日、それでよいのだと思う。

反論はしないでおう雨あがる

早泉 早人

会議での相手のひと言にカチンと来る。オウム返しに反論は、感情が先走り、理屈が通らず、悔やむ事になる。そこはベテラン、ひと呼吸おいて雨あがりを待つ。「雨あがり」の表現がよい。

ていねいにアクを掬ってお出しする

尾崎 ゆめ

料理は丹念にアクを抜くほど、味がよいという。擬人法としてのアク抜きは、プラス、マイナス、両面がある。豊かな個性、鋭い感性、あつけらかんの人柄を灰汁として掬い取る誤ちは避けたいものである。

もみじマークの車行き交う農繁期

森下 よりこ

高齢化した農業従事者。田植え時ともなれば、農道はもみじマークの車が行き交うばかり。今様の農村風景をもみじマークを取り入

れ巧みに詠み上げている。

無い方がよかった妻の書いた地図

羽田野 洋介

折角の地図が、方向違いや通り違い、目印のコンビニなど見当らぬ。暑い最中、汗だくで探し回り、揚句は電話で再確認。怒鳴りたくもなる実感句である。

夾竹桃炎ゆる生命の証とも

吉田 富美

夾竹桃と言えば、夏盛り、たくましく生き抜く生命力を感じさせる。「生命の証」がよい。私の先輩福井桂香さんの句に、「夾竹桃咲いて八月十五日」という句がある。

釣人に一戸残った峡の宿

萩原 大朔

川釣りの好きなお方とお見受けする。アユ解禁の山深い峡谷。昔は大勢の釣人が訪れ、釣糸を垂れ、釣宿も繁昌していた。時代の移り変わり、一軒となった釣宿への思いが伝わってくる句。

国際線ハエが一匹思案顔

三谷 たん吉

清潔な機内、きれいな客室乗務員。場違いに紛れ込んだハエの当惑。さてこれから、異国までの長旅どうするか考え込む擬人法。

第23回国民文化祭・いばらき2008

「自然あふれるふるさとにひびき輝く」

あたらしい文化」

川柳大会 11月9日(日) 10時30分～16時

会場 コミュニティーセンター・城里

題と選者(各題2句)

「猪」 川 俣 秀 夫 選

「ひびく」 田 頭 良 子 選

「反骨」 零 石 隆 子 選

第二次選者 竹本瓢太郎・久保田半蔵門・佐藤 岳俊

岡崎 守・奥田みつ子

賞 文部科学大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長

賞他多数

入賞作品は、「作品集」として発刊し応募された方(小・中・高校生は入賞者)に無料で配布します。

事前投句は締め切り済み

問い合わせ先

〒311-4304 茨城県東茨城郡城里町

下青山1-1

第23回国民文化祭城里町実行委員会事務局宛

TEL 〇七二九-二八八-三三三五

FAX 〇七二九-二八八-七〇〇六

主 催 文化庁・茨城県・城里町・(社)日川協他

全日本川柳誌上大会のご案内(柳多留第13集)

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」(平成柳多留第13集)を開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ(社)全日本川柳協会の権威ある三大自然行事ですので、こそぞってご参加ください。

課題と共選者(各題2句・連記)

「ガソリン」 篠田 東星 ー 浜本 耀子 共選

「占める」 渡辺 松風 ー 植野美津江 共選

「呼 吸」 駒木 一枝 ー 赤松ますみ 共選

「地 域」 長谷川冬樹 ー 鈴木 如仙 共選

「物 価」 花道 歌子 ー 高田美代子 共選

第二次選者 竹本瓢太郎 小松原爽介

参加費 2000円(投句料・「平成柳多留」第13集代金含む)

賞 平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・

(社)日本青少年育成協会会長賞・(社)全日本川柳協会会長賞

全日本川柳誌上大会賞(予定)

締 切 平成21年1月31日(土)(当日消印有効)

発表・表彰 第33回全日本川柳札幌大会(平成21年6月)

参加方法 参加用紙(雑誌1句)と出句用紙(2通1組)

に記入し、参加費2000円(振替又は小為替)

とともに左記へご送付ください。

〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-905

社団法人 全日本川柳協会

電話 (06) 6352-2210

FAX (06) 6352-2433

振替口座 0097009-3575

本社 九月句会

九月八日(月) 午後五時半
アウイーナ大坂

九月の幕開けは各地で大雨が続いたが八日の本社句会には好天で迎えた。出席九十六名。開会に先立ち八月三十一日亡くなった春城武庫坊氏(参予・尼崎市)へ黙祷を捧げた。お話は「随筆など書くことが大好き・・・」と日頃言っておられる井上桂作氏。万巻の書を読破された幅広い知識からの奥深いもの。テーマは「芭蕉の川柳愛好説」。俳聖として今も崇められる芭蕉の生い立ちに始まり、俳号の由来を探究、続いて江戸での暮らしにまつわる出来事とエピソードの数々にふれ、永遠の旅人として終焉の一句「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」へと続いた。

このあと『野ざらし紀行』及び俳諧七部集の中にある「猿蓑」と「続猿蓑」の中に芭蕉が川柳を志していたと推測できる句が数多く見られると述べた。

さらに奥の細道など彼の漂泊の足跡と余話を交えつつ「物言えは唇さむし秋の暮れ」など名句の背景に迫り人間臭のある芭蕉川柳愛好説の締め括りとされ、ホットな30分であった。(公誠記)

初出席に三田市の白井二英、上垣キヨミさんのお二人を迎えた。

月間賞は大阪市の谷口義さんに輝く。

(司会)昭・美穂(協取り)月子・(公)代
(受付)篤子・舞夢(清記・直樹)

席題「先生 山本 義子選

先生が好きで数学好きに成り
先生のあの拳骨で今の俺
先生のくしゃみ教室まるくする
先生の先生今も元気で
にんげんが好きで生涯一教師
先生の愚痴を聞くのはベツトだけ
先生とちがう意見を褒められる
先生があんだとたと言っ見舞い
恩師の死にわか同窓会になる
家に帰れば先生でないお母さん
聖職の裏にうごめく黒い金
教え子と老後を語る歳になり
怖かった恩師がいまも胸の奥
先生としての器を問うか 風
手品の先生失敗ばかりしてみせる
青春の顔で恩師を取り囲む
先生が憧れたった良き時代
叱られた恩師の言葉に温い意味
先生と恋していますうふふふ
先生と言われてちよつと照れ臭い
コンビニで会う先生のカップ麺

美智子 郁夫 寿子 篤子 楓 和夫 光久 朝子 蕉子 シマ子 東吉 たもつ 月子 森子 美花 尚子 富美子 キヨミ 楓楽 太郎 正雄

初恋は先生でしたランドセル
上方落語うちの師匠は国宝や
先生がカルテ眺めて深い息
先生も漂白剤にさらされる
立たされた先生だけは覚えてる
先生と呼ばれてからの肩の凝り
今もまだ恩師と続く年賀状
先生と呼ばれてわたし給食かきです
先生も同じ給食食べてはる
先生と呼ばれてはつと身構える
先生のそばに行ったら元気出る
佳
先生に聞いたら知らん言わはった
先生と呼ばれて入る穴がない
先生といわれた母をきらいぬく
せんせいの言う事ちゃんと聞かんちゃ
大先生やつぱり母だサシスセソ
人
悪友も私にとっては先生だ
地
先生に叱られたくて悪さする
天
先生が人間だった木の校舎
軸
お師匠さんシャンと鳴つたら腰が伸び
兼題「大きい」 坪井 孝一選
故郷の駅大きな希望持つて発つ 庸 佑

集一 柳弘 公誠 昭 勝弘 正和 ルイ子 瑠美子 弘風 ダン吉 日の出 瑠美子 則彦 ばつは 朝子 ばつは 二英 シマ子 好

今も昔も母という名の大ききよ
踏み台の要らぬ便利な嫁が来た
ちつぽけな地球を笑う大宇宙
国内産此の玉葱は大き過ぎ
約束を破り大きいものなくす
大きな声出して世話役させられる
大きな目の笑い袋を持ち歩く
大きい木だ寄りかかっていいですか
大空をつかむつりの幼い手
大きくはなかつたけれど胃は切られ
乾杯と大きい声で待った酒
それにしても大きな顔をしてる基地
大きくて重いものほど捨てられず
賞罰はなしと大きな字で書いた
くい呑みもやっぱり大きいほうをとる
長生きで大きな負担子にかける
お財布は大ききよりも中味です
内緒事できぬ大きい妻の声
同じ値につい大きい目を掴む俺
すんまへん大ききおいど割り込んで
僕の名が大きく見えている投句欄
人物を大きく見せている寡黙
大物といわれストレスためている
亭主より大きい軒かて家内
見合い写真聞くところでは大違い
大げさな男ですぐに風邪を引き
大声を出しての方が負けている
大小に切って大きい方をくれ

シマ子 美義 朋月 律子 一步 堅坊 能子 義子 みつ子
(失)五月 遠野 保州 日の出 瑠美子 理恵 五月 集一 昌紀 勝弘 弘風 淳司 玄也 ばつは 東吉 順子 楓楽 耕治

大欠伸してもただ今ひとりです
迷っているうちに大きい方取られ
大根のような男で頼りない
佳
生きているかあ大きな声で友が来る
スコップで大仏様の耳そうじ
おおかかな人だと思ふ大きな字
力抜くとのめは大きく見えてくる
父からの便り大きな字で叱る
人
大きい方がやっぱりうまい握り飯
地
日本中の空が秋一色になりました
天
町工場から宇宙へでかい夢を抱く
軸
人それぞれ大きい荷物持っている
兼題「幅」 宮本かりん選
ストレスの幅を縮めるウイスキー
若作り賞味期限の幅伸す
解釈の幅を広げて妥協する
左遷地で伸び縮みする人の幅
誠実と感謝で人の幅が出来る
倍ほどもあるてのひらで握手され
幅広い人脈こわいものがない
聞き上手広い男の胸の幅
趣味を持ち友達の間幅目慢する

月子 昌紀 洋 哲男 いさお 好 ともつ 正雄 遠野 美花 賢子

吉本の若手蠢く狭き門
考える幅を抜けて丸く生き
腹決めて歩幅その気になつてくる
木犀の匂いに遅くなる歩幅
幅効かすあの人今日は休みらし
淋しさに耐え人間に幅が出来
永年の努力が実り幅がきく
結論に幅をもたせたイエスノー
反対論のまれて幅の広さ知る
母さんに幅が出来たか笑顔ふえ
流し目のひとつにもある芸の幅
頂点もどん底も知る人の幅
逆三角あの肩幅にほれました
わたくしその幅を読んでる秋の風
他人より自分で勝つてできる幅
大幅の譲歩で明日へ繋ぎ止め
信じてる自信歩幅は変らない
喜怒哀楽越えて人間幅が出来
私の個性いかしている歩幅
以心伝心愛の歩幅を見逃さず
起きて寝て食べて喋って増えた幅
人間に幅が出来たか怒鳴らない
プロボウズ返事に幅をもたせとく
佳
バーンロード父の歩幅がきこえない
張り詰めた心へ少し幅もたせ
現役の歩幅に朝の道ゆする
あの人の幅の広さよ海の色
幅のある人で笑顔を絶やさない

孝一 公誠 丹吉 朋月 月子 みつ子 ルイ子 (欠)千代 ダン吉 舞夢 好 篤子 ばつは 森子 森子 靖子 雅文 美子 寿子 公誠 富美子 天笑 柳弘 光久 たもつ 一歩 三喜夫

人
手を引けば母の歩幅にある歴史

岳人

地
たとえばの話で幅を探られる

耕治

天
にんげんの幅に豊かな人間味

紀乃

軸
子と合わず歩幅に力み出てしまい

兼題「浴びる」

籠島 恵子選

耳奥に浴びた喝采生き続け

雅明

太陽を浴びて幸福無限大

螢

喝采を浴びて敗者のゴールイン
森林浴体がしゃんとなりました

いさお
太郎

わたくしに知恵を浴びさす広辞苑
喝采も野次も浴びずじただ走る

日の出

慈しむ視線を浴びて咲いた花
木漏れ日を浴びて小鳥の私語を聞く

郁夫
見清

せめてもは太陽浴びる青テント
浴びるほどのんだあげくの自己嫌悪

保州
理恵

浴びるほど呑んだ男のプロポーズ
絶頂期ライスシャワーを浴びた頃

キヨミ
柳伸

河内弁で浴びて来るので一歩引く
登山靴森林浴もして帰る

瑠美子
月子

一言が機械掃射を浴びている
太陽を浴びてりんごの甘い顔

富美子
美花

愛情を浴び過ぎ子供狂い出す
酒浴びる夢を見ている休肝日

昌紀
一歩

喝采を浴びて北京のエビローグ

満作

妻の罵声弁解できぬ訳がある
叱責を浴びて私を取り戻す

たもつ
ダン吉

ブリーング浴びてムクムク湧く闘志
B面がなぜか脚光浴びている

幸雀
光久

喝采を浴びて仮面が外せない
マンネリを抜けよう水も火も浴びて

たもつ
五月

ライトアップ大阪城もお疲れや
相槌を打ったばかりに火の粉浴び

ばつは
好

放り出し首相が浴びるブリーング
私に代わって雨を浴びる傘

正和
洋

喝采を浴びると調子付くマイク
ときめいています木洩れ日浴びながら

玄也
篤子

砲弾を浴びても瞳光る子等

舞夢

佳

母の愛いっぱい浴びた子の笑顔
CO₂浴びて地球がもたえてる

能子
蕉子

称賛も嫉妬も浴びる受賞作
喝采を浴びても象の目は哀し

(矢)五月
耕治

妻の愚痴浴びて私は錆びはじめ
注目を浴びて誤作動してしまふ

尚士
希久子

脚光を浴びて彬がよみがえる

希久子
一歩

地

夕日浴びる今日いちにちをありがとう
泥水を浴びても花は咲いている

天
義子

兼題「コーナー」 村上 玄也選

貧乏神四コーナーで振り切った
すみっこに忘れられてる私の名

哲男
希久子

コーナーは見渡せるので好きな席
コーナーに坐ると人の輪ができる

勝弘
順子

コーナーでみんなの話聞いている
隅っこにポツンと居ても目立つ人

幸雀
幸雀

宴席の隅で二次会声をかけ
いずも屋の角から急に腹が減り

遠野
好

居酒屋の隅で人間取り戻す
ベストセラー今はワゴンに積まれている

靖鬼
善純

日の丸は呉服売場にございます
下着コーナー誰も気づかぬ喉仏

正和
善純

敬老の売場が広がる九月
半額コーナー確かな主婦の目が活きる

キヨミ
寿子

見せしめか喫煙コーナーガラス張り
片隅でこっそり払うたばこ税

なきさ
雅明

コーナーリングが下手で出世に遠く居る
隅っこで一言居士が目をつむる

幸雀
ダン吉

窓よりのコーナーが好きひとりぼち
きつちりとコーナーをつく妻の勘

理恵
郁夫

コーナーに追いつめやと吐かせたよ
隅っこまで耕し冬を迎え撃つ

森子
月子

人生のコーナーにある陰と陽
重箱の隅の隅の隅の隅の隅の隅

(矢)五月
光久

重箱の隅をほじくる暴露本
緊張の糸が解ける曲がり角

光久

第三コーナーやはり潜んでいた刺客 保州

鋭角に愛の欠片が蹲る

森子

コーナーをつないで獲った銅メダル

則彦

裸婦像のコーナーに来て目が冴える

弘風

部屋の角あごで指された僕の場所

美智子

柁と鰯我が家の裏鬼門

淳司

佳

曲り角ボチの儀式は片足で

ぱっは

人生の第四コーナーの恋よ

天笑

コーナーで片寄せ合っている枯れ葉

三喜夫

コーナーでふと人生を振り返る

尚士

コーナーがあるのにたばこ歩いてる

月子

人

あげ底の隅で良心乾涸びる

好

地

選外品コーナーにある自尊心

理恵

天

コーナーを曲がつてわつと泣く未練 朝子

軸

インコーナー突いてハートをえぐり取る

兼題「演技」

河内 天笑選

演技力総理は知事に負けてはる

富美子

初対面思わず演技してしまふ

見清

雲は今秋の媚態をみせはじめ

シマ子

初舞台演技力より体当り

みつ子

無理をして夫婦円満演じてる

更紗

演技などしないベツトに癒される

能子

健さんの背中黙って演技する

朱夏

演技など出来ず真つ直く生きている

美花

幸せの演技はいつも自然体

善純

セリフのない役で存在感がある

志千代

作演出ジンベー鯨の自己主張

柳弘

ライバルが見ていることは先ず笑う

好

優しさのあなたの芸に騙された

(奥)五月

涙しておんな演技に酔うている

理恵

演技でも良いありがとう言われたい

キヨミ

里の老母気遣いさせぬ演技する

庸佑

笑い過ぎ何だか演技めいてきた

かりん

オレオレの演技スカウトしたくなる

正和

目を見張る模範演技は神の技

加お里

口パクで演技した子の太っ腹

則彦

義母が来る演技続かぬ一週間

麗

酔ったふりするのも楽でないですな

月子

台本を越える子役の熱い芸

公誠

善人を演じて肩を凝らしてる

玄也

やり直すとびオーバーになる演技

(志)千代

ご主人はいない方だと思つてた

郁夫

ラブですか悪戯ですか投げキッス

洋

お互いに下手な演技もして夫婦

集一

にこやかに欺く酒を注いでやる

耕治

大袈裟に初めて聞いた振りをする

富美子

善人を演じていつも蹴つまずく

三喜夫

父さんの演技尻尾が見えます

かりん

歌よりもふりのうまさごまかされ

時雄

病床でビエロ演じる他はなし

朋月

口惜しさをぐつと泳えてハハハハハ

いさお

演技とは思いたくない彼の愛

雅明

佳

ええ格好するから長く続かない

義

貧乏の役ならすべて地でやれる

雅明

死んだ振り元気な振りもして生きる

洋

人柄のにじむ仕草に敵わない

みつ子

いい人に見せるおしゃべりひかえめに

恵子

人

振りなのか本当なのか妻の呆け

蕉子

地

認知症の母と毎日演技する

和夫

天

デスマスク今日は貴方が主役です

谷口義

軸

家を出てたたいま言うまでの演技

第28回

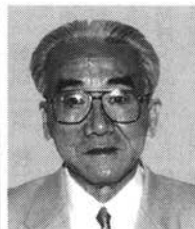
川柳塔鹿野みか月川柳大会

日時 11月30日(日)

場所 国民宿舎「山紫苑」

詳細は次号、御参加お待ちしております

ます。



春城武庫坊氏を悼む

平成二十年八月三十一日逝去

釋 和 心 八十八歳

武庫坊様に感謝

長 浜 美 籠

計報第一報は、携帯のメールから入りました。おおよその病状は聞き及んでおりましたものの、現実となると矢張りショックでした。そして最後まで、川柳塔に投句を続けておられました意志の強さに、改めて感服いたしました。

武庫坊さんは「トッチン」と奥さまの年代さんを愛称で呼んでおられました。その時のやさしい表情のまま、安らかな永久の眠りにつかれ、最後のお別れをいたしました。

ご夫妻とも京都出身、さして遠くない所に住んでいた幼馴染と聞いています。幼稚園からの同級生が、心寄せあつて成長し結婚、戦中戦後を支え合い、晩年にいたるまでお揃い

で各句会に参加されました。ローズ句会などでは、思わず「あらご馳走さま」と言う時もあるほどです。今年二人して米寿を迎えられるなんて羨ましい限りでした。

思い出は数々ありますが・・・

武庫坊さんは一つの扇子をそれはそれは大切にしておられました。男物で、一面に旧満州の地図が描かれたものです。

「澄ちゃん」と扇子で私の肩をぽんと叩いて当時のことを事細かに説明して下さいました。深夜の行軍であつたり、食糧調達に苦労した山越えをした話など、夏を迎える度に聞かせて頂いたのも昨日のように思われます。

また相撲場所が始まると、どのぐい呑みにするかご夫婦相談で決めて「トッチンと星取表を前にテレビ機軸でみるんや」とうれしそうに話しておられました。

こうして私が川柳を続けているのも武庫坊さんご夫妻の影響あつてのこと、お蔭だと思

つています。

初めて鹿野みか月川柳大会に行く車中、奥様と相席になり「作句できたら送って、武庫坊が私をみせてもらうから」と言つて下さったのがずっと今も胸にあります。

深く感謝申し上げますと共に「冥福をこころよりお祈り申し上げます。」

合 掌

幼稚園からの

仲良しさん

奥 田 みつ子

春城武庫坊さん・年代さんのご夫妻は幼稚園からのお友達ですから、武庫坊さんご逝去の米寿まで約八十年余りのお付き合いということになります。どこにいらつしやるのも一緒にの典型的な鴛鴦夫婦で、皆の羨望の的でした。

長身の武庫坊さんは小柄な年代さんをも庇い、いたわつていらしたので、告別式の最後、喪主の年代さんが「今までは二人で川柳を続けてきましたが、これからは一人になりました。どうぞよろしくお願い申します。」と声を詰まらせながらのご挨拶が、なおさら耳に残りました。

お二人のご結婚後、しばらくして武庫坊さんは召集をうけて戦地へ赴かれ、中国各地を

転戦、終戦を中支で迎えられたと聞きました。そして、終戦の翌年、一九四六年に無事復員されました。

川柳を始められたのは年代さんの方が早く一九八三年に同人になられました。武庫坊さんはお仕事の都合で半年遅れて、一九八四年六月に同人に推薦されておられます。

その後はお二人揃って各句会へ積極的に出席されました。本社句会をはじめ、尼崎いくしま・豊中もくせい・京都塔の会・西宮北口・西宮ローズ等々。中でも特筆すべきは、夜市川柳には第一回から毎回欠かさず、ご夫婦で投句を続けられて、昨年の第25回記念夜市川柳大会には、お二人にそれぞれ表彰のトロフィーを授与され、ご健吟を称えられました。本当に「継続は力なり」のお手本と感じ入りました。

もう二〇年余り前になりますが、川柳塔社主催で一九八四年・八六年・八八年と三回にわたっての中国旅行、一九九一年には台湾旅行がありました。そのいずれもご夫妻で参加され、西尾葉先生、橋高薫風先生、東野大八先生と私たちが川柳仲間として旅の感動を共に出来たことを昨日のことのように思い出します。その時も武庫坊さんは中国の地図を広げては、この辺りは徒歩で進軍したとか、ここではこんな事があつたとか懐かしそうに話

してくださいました。

そのかわら、一九九〇年一〇月から一九九五年一〇月まで五年間、川柳塔社の会計担当として力を尽くされ、会計の基礎を固める功績を遺されました。

武庫坊さんは昨年秋ごろから体調を崩され句会もお休みがちで、塔誌三月号に左記の二句があり胸を衝かれ、ひたすら御全快を祈るばかりでした。

胃カメラの結果を聞いて手術する
癌手術これで長生き出来るだろ
半年ぶりの今年の四月に出席されたローズ句会の左記の自由吟に皆ホツとしました。

二人米寿で桜見物幸せだ
塔誌には十月号まで投句を続けられました
た。

最後の最後まで川柳を詠み続けられた武庫坊さんのお通夜・告別式には多数の川柳の仲間が参列されてお別れを惜しみ、弔吟が披露されました。

蟬はもう啼かなくなった浮き雲よ

墨 作 二 郎

先に逝くゆつくり来いと千の風

板 尾 岳 人

好き合つてずうと一つ屋根の下

河 内 天 笑

心からご冥福をお祈り申し上げます。

遺 句 抄

黄塵萬丈 騎馬民族の幻か
森を抜けると風は無色になつて吹く
詩の一行に背中を強く叩かれる
千本の菊を束ねて神を呼ぶ
青春も戦野も無限昭和消ゆ
道草をした人間で幅がある
父の死角に母のなさが置いてある
陽のあたる場所は避けてる兵の墓
妻にだけ聞こえる鈴を振っている
金婚や全てを許す貌になる
しゃべりすぎてどつとさみしき湧いてくる
次々と明治が消えて寒い春
モネの絵を飾つて蝶を待っている
恙なく秋には秋の風が吹く
曾孫の文ふたりに読める老いの幸
伴走の妻のおかげで今日を生き
流れ着く岸がわからぬ新世紀
花開く花の鼓動が胸を打つ
戦友会ももうすぐ死語になる言葉
暑くなるときと戦野の夢を見る
祇園はやしが駅に流れて夏招く
捨てること覚えて心広くなる
振り向くと妻より外に誰も来ぬ
色々汗があつまる終電車
朝の画廊に秋の空気が正座する

切字私見

早川 清 生

川柳と俳句の違いについては、古くからいろいろと論ぜられており、いろいろと差異が挙げられているが、最近における両者の新しい領域への進出はめざましく、とりわけ広い意味で前衛を志向する句の増加がある。前衛作品の場合、川柳であるか俳句かその識別がより至難になっている。

霜柱俳句は切字響きけり

波 郷

自然諷詠か人事詠か、韻文か口語文かどうかなどもあるが、その違いの最たるものはやはり季語の有無と、俳句には切字があるということだろう。季語の方はまだ周知されているが、切字は知られているようで案外認識が十分とはいえないところがある。

切字は室町時代に、連歌師の飯尾宗祇が著書の「白髮集」に十八種のを例示しているが、それだけではない。去来の著した「去来抄」は芭蕉の言葉として「切字に用ひる時

は四十八字皆切字也。用ひざる時は一字も切字なし」と言つたということが残されており、芭蕉が切れの効用をいかに重視していたかを示している。

古池や蛙飛び込む水の音

芭 蕉

小包を解くやころころと柿

草 城

降る雪や明治は遠くなりけり

草田男

切字の代表的なものは「や」「かな」「けり」とされるが、それに限らず切字は句の中、五七五のどこにも置かれる可能性があるのである。例を示した。切れが句の中にあれば二句一章の二元構成になり、句尾にある場合は一句一章の一元構成になる。そのほか芭蕉の言葉のように、切字を用いなくとも切れが生じる場合もある。

去年今年貴く棒の如きもの

虚 子

ピストルがプールの硬き面にひびき

智 子

切字の効果は、詠嘆、省略、格調を整えることの三要素が、その主なものとしてされている。切字は俳句の誕生とともに俳人たちにその効用が見出され、磨き抜かれてきたもので、俳句に独特の拡がりや深み、暗示性をもたらし、季語とともに俳句の骨格となった。しかし切字が俳句の専有物かという点、私は決してそうではないと思う。切字も日本語特有の用法としていわば民族的財産である。俳句以外に

用いるときは、もちろん俳句におけるような約束事はもたないけれど、使つていけないとはどうしても思えない。

川柳にだって二物衝撃の手法があり、相互に無関係な二事象を句中でぶつつけ合い、そこに発生する未知の感覚やエネルギー、あるいは意味性を求めようとするものである。古くは取合せといわれ、呉陵軒可有以来の文芸観である。切字から詠嘆の響きが流れるように、私はここで生まれる二句一章の間隙に、余情余韻を鋭く感知したのが薫風さんではないかと思っている。

人の世や 嗚呼にはじまる広辞苑

薫 風

四面楚歌 故郷は豆の花の頃

恋なれやわれに聲あることし

と彼にはこの種類の名句が多い。

切字が俳句だけのものでないとした場合、柳俳の区分はさらに困難となる。先に述べたように柳俳とも領域の拡大に努めてきた事実があつて、両ジャンルは根っこにおいて混在状態にあり、からみ合つて今さら分離を図ることは現実的でないし、実益もない。もし誤りがあつても、それは今後の歴史的過程で十分是正されるであらう。私は基本的に俳句は行きて戻る感性のものであり、川柳は説明の文芸であると思つているが。

**石見川柳会創立30周年記念川柳大会
第59回浜田市文化祭協賛**

日 時 11月9日(日) 午前10時開場
場 所 浜田ステーションホテル(JR浜田駅前)

TEL 0855-22-8111

宿題と選者 「各題2句」

「神」	天根 夢草	選
「太鼓」	新家 完司	選
「塊」	但見石花菜	選
「ねずみ」	門脇かずお	選
「続く」	金築 雨学	選
「綱」	長谷川博子	選
「夕日」	松本 文子	選
「亀」	佐々木 裕	選

会 費 2000円

(大会誌、参加賞、昼食込み)

欠席投句 1000円(大会誌、参加賞)
(切手不可、適宜用紙に連記)

投句先 〒695-0102 浜田市宇野町245

石見川柳会 佐々木 裕

TEL・FAX 0855-28-2917

主 催 石見川柳会

後 援 浜田市教育委員会・浜田市文化協会他

第五十回 豊中市民 川柳大会

と き 11月23日(祝) 正午開場

と ころ 豊中市立中央公民館 1Fホール
(阪急宝塚線曽根駅東100米)

挨拶 豊中川柳会 会長 石川 勝

落 語 桂 三若

宿 題 「各題2句」 締切13:00

「イメージ」 前田 咲二 選

「立 場」 田中 螢柳 選

「走 る」 足立 淑子 選

「偶 然」 久保田元紀 選

「じっくり」 有田 一央 選

「時事雑詠」 前 たもつ 選

席 題 「 」 岩田 明子 選

会 費 1500円

(発表誌、記念品、軽食)

賞 豊中市長賞他 各題に呈賞

連絡先 〒560-0015

豊中市赤坂1丁目6-9 石川 勝

TEL/FAX 06-6854-1990

主 催 豊中川柳会・豊中市立中央公民館

平成20年 尼崎ザ川柳

と き 11月22日(土)

と ころ ビッコロシアター(県立青少年
創造劇場)

会 費 1000円 締切2時

お 話 太田 昭(川柳塔社理事)

宿 題 「違 う」 杉山ひさゆき

「走 る」 北野 哲男

「こころ」 田中 螢柳

「音 」 小山 紀乃

「喧嘩」 田頭 良子

「どうして」 長浜 美籠

懇親宴 白雪レストラン(長寿蔵)

(会場よりチャーターバス)

宴会費 男性4,500円、女性3,500円

主 催 尼崎川柳協会

連絡先 尼崎川柳協会

事務局 山田耕治

06-6491-1612

ご祝儀等の儀は固くご辞退申し上げます

**出雲総合文化祭
川柳大会ご案内**

日 時 11月15日(土) 開場11時～

会 場 パルメートホール 4F

兼 題 各題2句 締切午後1時

「孝」 新家 完司 選

「友」 佐々木 裕 選

「油」 金築 雨学 選

「道」 松 彬 選

「楽」 長谷川博子 選

「天」 安黒登貴枝 選

「 」 竹治ちかし謝選

席 題 「 」

会 費 1500円(昼食費含む)

賞 市長賞・教育長賞ほか

欠席投句は参加料1000円を添え

10月30日までに〒693-0006

出雲市白枝町423 伊藤 玲子宛

お送りください。

主 催 出雲市・出雲市教育委員会

出雲総合芸術文化祭実行委員会

出雲市川柳連盟

お世直し

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

川柳大阪(前月分)

長井

善純報

厄介な心のやまい地獄絵図

厄介なことに水着でもめている

厄介な話も聞いてお人好し

吉兆が使い回しの手本みせ

厄介な妻のヤキモチなだめかた

年寄りを厄介者にする政治

厄介もの代表格は核兵器

厄介な種も混ざったバస్తゥア

厄介をやさしく包む介護の手

厄介を丸く納めるありがとう

秋葉原寸差で生命行き来する

年の差を技の力で埋めて勝つ

お隣はベンツでつせと妻が言う

さわやかな笑顔に負けている落差

生き残る社の命運は努力の差

万馬券鼻の差で負け泡と消え

天地人そんな大きな差はないよ

和

芳香

洛酔

彦太

章久

一步

ダン吉

美籠

柳弘

朝子

川童

鉄心

重人

笑風

東吉

功

青道

イエスノー聞かず後期にされてます
大地震連の格差が生死分け

年の差はあるが喧嘩のない夫婦

絵手紙に溢れ出ている人の味

よろこびの酒は溢れるほどに酌ぎ

不条理が溢れる世間変えなくちゃ

酒溢れ手の酒なめる父の顔

雨の朝木々に溢れている活気

夫支えて溢れる愛の車押す

いい笑顔溢れる汗に未来見え

お財布に溢れているのはカードだけ

盃に溢れる酒はこぼさない

ポランテア溢れる汗が心地よい

竹原川柳会

古田

太虚報

流れ星その一瞬の幸掴む

川の藻は流れにそうておだやかに

問題がとけない時間流れてる

ふるさとへ雲は流れる兄の忌よ

杭一本流れを変えたのは誰だ

流したのでなく流れたのです耳

予定表月に二回の遍路旅

花火ドンドン夏のリズムになつてきた

リズムよい話へ財布口を開け

ふたありの暮しに無理のないリズム

社交ダンスリズムに乗れぬまま終わる

美世子

笑歩

照月

柳昌

まつお

紀雄

喜楽

美花

一風

信醉

勝弘

修

善純

汎美

房子

年子

貞子

蘭幸

幸子

栄香

笑子

笹舟

慶子

現代

双肌で昭和のリズム打つ太鼓
勝負の日一本締めのリズム打つ

七夕へ蛇の子になり逢いに来る

雨上がり七色の空になりました

七不思議の一つを胸に抱き続け

七福神さあ揃ったぞ帆を上げよ

七輪で餅焼きましたよき時代

太陽がくれた七色シヤボン王

主婦の座に七曜表の空がない

七福神の笑顔に負けぬ家族です

四つ葉のクローバー探しているガラス

バイバイと手を振るようになりました

子育ては楽しかったよさくらんぼ

愛に飢え愛を満たしてゆく沙羅樹

和歌山三幸川柳会

武本

怒る時歌舞伎の眉になる夫

民族の血をたぎらせるフラメンコ

ステージはキツチンステップはチャチャチャ

人間を信じて鶴が舞い降りる

わくら葉のまだ舞いたげに吹きだまる

身の丈で舞い一日が満ち足りる

てんでこ舞いしていた頃を懐しむ

泣き笑いで終日の舞い納め

考古学どうあろうとも石舞台

荷が重く舞うこと出来ぬカタツムリ

敬子

千代美

太虚

千枝

栄恵

一路

力

輝恵

弘子

淑子

あゆみ

史子

比呂子

厚子

碧報

元三

俣子

和子

絹子

理恵

純子

桂香

登美代

昇

起世子

殿様も悪代官も居る舞台

昼行灯と言われることも策のうち

のはほんとは知らない父の計算機

のはほんとし過ぎて座標が定まらず

のはほんとし過ぎて天狗の折れる鼻

のはほんとし生きるも知恵の一つかも

のはほんとし心虫干し里帰り

献花台に向く黙祷の重い首

十重二十重巻いて家族という絆

重症となつて火の恋突つ走る

程の良い重石だったか素直な子

不器用な奴で荷物を重く持つ

少子化が重い荷物を背負わされ

簡単な一日と重い一日

後期高齢辞書積み重ね惚け防止

平和はけ小さな幸に気が付かぬ

幸せの切符自分で掴み取る

幸せな女影まで丸くなる

幸せを壊してならぬ温暖化

愚痴こぼす度に幸せ逃げていく

松露川柳会

小西

雄々報

病む友へ冗談も入れ励ました

有り難う仕事に励む父の背に

山登り励ます声に元氣でる

励まされまた励まされ八十路越え

孝義 保州 朱夏 菜摘 孝子 東吉 柳昌 章子 イセ みね 幸 次根 美花 かずみ 瑛子 碧 町子 幹子 当代 准一

励ましの声かけ時に気をくばる
病床の友を励ますことば選る
竹馬の友励まし合つて茶飲み会
リハビリへ励ます言葉ありがたい
励ましの声を百歳からもらう
余生をお芸に励んで熱く燃え
農業に励んで田畑荒さない
お見舞へ弱気な友を励まして
後線が霞み励ます今日の風
東大阪市川柳同好会 森下
よく笑い陽気な妻について行く
行革も知事に従うしかないか
従っているふり遺言見るまでは
本人も忘れた話耳に入り
本人に言えない前が開いてます
湖に映るじぶんの影が無い
幾つものトンネル抜けた人間味
トンネルをぬければ空と海の青
深呼吸してトンネルの出口待つ
よく走る貧乏神を振り切れぬ
原油高走れぬ道をまた造る
一日を走つて落ちる沙羅双樹
弔辞読む声ゆっくりと過去を追う
無言館声なき声を聞く悲哀
醜さを知らずに泣いたアヒルの子

香音 久子 公美枝 弘子 鈴枝 和代 信雄 静江 雄々 章久 太一 克己 風子 和代 秀夫 美弥子 美子 和子 八郎 敏子 あや子 湖風 朝子 賢子

佳句地十選 (9月号から)

三好 專平

助手席に安全ナビの妻が乗り

お化粧をすれば鏡もよく笑う

お弁当ふたつ作つていく娘

百歳の現役感謝を忘れない

青雲の夢を詰め込む塾範

手作りの平和誰にも奪えない

赤んぼが泣いてるばあさんが笑つてる

それぞれの楽器なだめる指揮の棒

願いごと多くて悩む天の川

宇宙から眺めた地球まだ青い

迷走のみち母さんの花あかり

岸和田川柳会

土橋 房枝報

扇風機お前も後期高齢者

窓開けて省エネ我慢扇風機

喧嘩する夫婦へ回す扇風機

主婦業が円熟しても誉められず

志ん生は高座で眠る芸を見せ

円熟を五輪に合わすアスリート

練り上げた氷上の舞神の技

円熟にまだ程遠い青リンゴ

寛容も忍耐もある円熟度

俊夫 房恵 椒子 美智子 折杭 いさお アキラ 日枝子 千賀子 雅明 愛論 笑司 弘子 蛙城 香代 昭 幸子 寿海 力枝 房枝

円熟と言われ体よく干されてる

怒ってはいくれぬ墓前に手を合わす

怒ったり宥めたりして父の鞭

怒りつつ心で諭す親の愛

人間のエゴに怒りの青い星

冬山の怒りに触れた軽装備

背にやいと俄然ボバイの真似をする

あなどれば俄然力を溜めて翔ぶ

突然の別れ話に狼狽える

孤立して俄然私を取り戻す

さようならクールに言ったのは彼女

過去形で言えぬ貧乏物語

子育てはクールなままでいられない

川柳らくだの会

岸本

宏章報

一番になろうと努力する二番

迷いつつ七十路の坂を登ってる

ぎりぎりの歳へピンクの紅を引く

椅子を待つ二番手がいて落ち着けぬ

山頂のあの感激にまた登る

年寄りにはさら湯は駄目と二番風呂

別れ際やつと心を手渡せた

体調に合わせて古稀の坂のはる

はったりが駄目で二番手泣き落し

大物だぎりぎりに来てすぐ帰る

長柳会

村上

直樹報

夏休みさせてと孫を押しつける

洞爺湖はエコサミットだ無事終る

蟬の声鳴き様で暑さバロメータ

蟻の列行方聞いた子二兎の父

うまかった茄子の朝漬け銀のシャリ

愛犬の行方探してビラ配る

猫の名を呼びつつ探す蟬しぐれ

淋しさは男やめめの一人旅

受けた恩情け無用と義理を欠き

猛暑です父の行方はピアホール

追わずともあなたの行方風に聴く

竹トンボ行方知ってる鬼瓦

路地裏の明かり人情染めてゆく

曲り角行方占う下駄の裏

暑い時熱熱うどんああ熱い

多事多難どこへ行くのか日本丸

こつてりと心に付いた垢落とす

ヨン様に熱何処までも追いかける

坂道を妻の日傘がはずんでる

亡父に似た入道雲の行方迫う

肝臓がもう疲れたとストライキ

父探すテレビドラマにはまってる

温暖化改め地球炎熱化

幸雄

淳司

正子

たかし

靖子

正博

輝子

史

敬二

もこ

三和子

和代

武男

明子

たけし

靖博

よしお

けい子

昭信

光弘

芳野

マサ

エミ

直樹

道徳も倫理も行方消したまま

栄養の行方脳より腹らしい

わが行方神にゆだねて今日生きる

川柳塔鹿野みか月

福西

茶子報

熱帯夜恐れ火の玉も飛ばぬ

点滅が早くなったら湯を沸かす

船頭の喉が自慢の河下り

親よりも祖父母が見える孫の顔

火のような夫婦げんかも寝て直る

DNA孫におもかげまだ残る

竹島が赤の点滅出している

この暑さ火種なくても火が出そう

もやしにもおもかげはある豆の頃

納得のいかに火の粉を浴びている

カアチャンの尻に敷かれて耐えてます

予報士の所によりに迷わされ

年を重ね身体点滅して困る

悠久の河も阿修羅の牙をむく

海が鳴る私の胸もなる砂丘

暑いのに火までくわえて煙草すう

トンツートンと友だちに打つメール

また今日も男が浮いている河口

形見着てその面影に縛られる

脳一杯ラップしているいい話

武彦

彩子

孔美子

かおる

実満

幸枝

クニ子

房子

弘子

蟹郎

忠良

きみ子

久枝

重忠

(西)和子

菊乃

照彦

和枝

幸安

公子

正一

和美

和子

蛇行してやがて大河になる構え

(節) 子

ゆく河に訊いておきたい事もあり

汲 香

点滅の中で命を考える

みさ子

ゆるやかに語らせている走馬燈

諷 人

面影が後ろ髪引くことになる

満

点滅のナースコールに手間が入り

永 子

温暖に河川ポトポト SOS

みどり

黄河には大きな虹が立つと言う

睦 子

蟬り飲んでそ知らぬ河になる

茶 子

川柳塔唐津

仁 部 四郎報

杖代り老母が押してる乳母車

高 明

闘病の果て辿りつく般若経

勝 視

道草を今日はしませんが退院日

四 郎

もてあます心を抱いて足のまま

實

七十五歳も忘れる歳である

蜂 朗

朝夕の糠床に祖母気合い込め

晴 翠

マネキンをじっと見つめる妻の顔

輝 夫

川柳塔わかやま

川上 大輪報

五輪五輪うちもとなりも燃えている

徑 子

世界の祭り繋ぐ地球の裏表

佐 一

やわらママ金より光る銅メダル

怜 女

民族へ波をたたせていた聖火

大 輪

戦争もオリンピックもある地球

利 治

九条を柱に築く理想郷

前向きに築く必ず道開く

克 子

築きあげた苦勞は言わぬ父の口

めぐみ

新築は甲羅に似合う門構え

豊 太

鉛筆で築く余生の宝物

和 香

人民の汗と涙で建った城

保 州

子の築く城に世代のギャップ知る

富美子

根性で築いた城にそつがない

和 子

財産を築く女の細い腕

三喜夫

停電の前に雷神あはれ打ち

小 雪

地図買つて旅の空想はしいます

三 男

義理人情やがてロボットから学ぶ

緑 良

空想のアニメの中にある胞子

美 子

空想を漂流している少年期

あきこ

空想が少し照れてるラブレター

紀久子

意外にもライバルに塩送られる

美 籠

三次会下戸がすすんで音頭とる

光 久

人生に意外あるので止められぬ

たもつ

意外性のないのが僕の取り柄です

昌 紀

花の名を覚えてくれた山男

義 子

地上潜伏近頃雷だけ元氣

清 生

水汚し空気汚して生きています

楓 楽

当然の顔して入る注射針

哲 夫

一口にゴミと言えどもプライバシー

いわゑ

妥協して丸が上手に描けました

希久子

輪にとけて鬼も仏も盆踊り

遠 野

高知川柳社

小川てるみ報

阪神が勝つてニュースをはしこする

まさ子

嫁が来るニュースで息吹く過疎の村

典 雄

玉音のニュースは今も耳の底

美 々

凄惨なニュース聞いても動く箸

和 江

マイペース走って止まぬ火の車

哲 史

歳月が走る傍観する齡

健

呂谷氏逝く天も泣き出す走り梅雨

三 郎

走り走りの見舞を母に叱られる

京 子

感情に走ると碌なことがない

暖

飽食のねずみが走るネオン街

千恵子

小走りをやめて視界が広がる

てるみ

ゆつくりと走る余生に夢がある

幸 子

逆走が出来れば楽な人の道

三千世

定年の椅子よさよならありがとう
背もたれの椅子に座っている安堵
その昔まん中だった父の椅子
不況風ケラケラ笑う空財布
一寸見張った財布の後遺症

川柳ふうもん吟社

夏目 一粋報

地図のないあの世オドオドしなさんな
腹心は山の高さを知っている
すんませんなあお国訛りが温かい
眉太く描いてオドオドなどしない
コテンパン口でけなしして惚れている
腹心とこだわりのない酒を酌む
すんません社長の靴を履いっちゃい
歯が立たぬ妻には今もコテンパン
オドオドとするな明日食う米はある
腹心の目で愛大が顔を見る
すんませんちよつこ主人借りますよ
なるようになるさオドオドなどすまい
夏野菜暑さでまいりコテンパン
オドオドとバンドラの箱胸に抱く
誰でもいい命そんなに安いのか
オドオドとすまい私は社長です
腹心が多いと舵は定まらぬ
腹心が内部告発しやがった
オドオドと小さくなって金を借り

栄美子 紀美子 谷忠 千鳥 ひとり
洋々 美恵子 節子 一瑠 かをる 菊香 蟹郎 清信 無限 稔 主一郎 一京 清帆 諏訪男 志げ緒 金祥 昌鼓 妻子 秀四

コテンパン調査をしても白は白
コテンパンに叩きのめされ目が覚めた
裏をかき腹心金も妻も盗り
腹心が時どき踏み絵踏まされる
映画館泣きこえあげてすんません
腹心の恐ろしき酒注ぐ
桃太郎猿飛大は忠臣か
すんませんまだ足腰は元気です
オドオドとついで行きます抹茶席
好技のかげに腹心捕手があり
ときどきは吠えて絆を確かめる

川柳塔おつばこ吟社

川崎ひかり報

細はその暮しにひと日贅を盛る
嘘重ね夫婦の絆細くなる
親友の絆も細くなり孤独
細やかな余生に迫る物価高
細い糸切れないままに半世紀
目を据えて酔いどれがゆく細い道
細いけと結び目固い絆紐
年金で家計を守る細い腕
曲学阿成も通った細い通学路
細くともしなる強さの女竹

京都塔の会

都倉 求芽報

ATM大きな声でやり直せ

春名 孝男 由美子 穀 善夫 行男 あしび 菖子 喜美子 虎尾 一粋
はつ恵 賢 くに子 八重子 あきら 放任 よしみ いさむ 弘 ひかり 求芽

一言とお世辞で妻がATM
ここは過疎大気を思い切り吸おう
宵囃子 四条通りの蒸し風呂に
ばつさりと上司斬つて縄のれん
ばつさりと空気を裂いて出ていった
夫まではつさり捨ててクールビズ
温暖化 氷河突き抜く穴があく
突つ張ると漫画になつてくる傘寿
捌め手を突く作戦が図に当る
山動くまで一匹の突く力
ひとことの冗談わたし突き刺した
不意を突く味な計い助け船
トラブルに突つ込み首が外れない
ていねいな言葉で突いた言葉尻
意表突く法話生きたくなつてきた
突つ込みが足りず本音をさきもらす
突つくなよそこには夢が埋めてある
着信はないが充電だけはする
充電に心を洗う名作集
充電のたびに人間らしくなり
窓際で旨く充電しています

川柳ささやま

遠山 可住報

二人して越えねばならぬ坂がある
曲り腰遊びにシヤンとなる不思議
越えてゆく息子眺めている至福

宏子 篤子 ふりこ 福子 啓子 公子 高栄 石舟 庸佑 欣之 典子 文代 美義 昌乃 和友 葉子 かずお 綾子 輝美 則彦 孝一 純子 美緒子 二英

蛇行する川に直線の記憶

直角に曲がり変身試みる

ネクタイの曲り直している夫

姫はたるを連れてる仕方なく曲る

音だけを聞いて夢呼ぶ遠花火

王音の判らぬままの夏十五

音だけでホームランだと聞き分ける

ハワイアンそれが私の青春譜

糠漬けの瓜さくさくと涼を噛む

社務所まで賽銭の音ひびかせる

救急車そこどけと通り過ぎ

音と読めば虫笛鐘も和の響き

メンバーの中に居ります胡麻の粒

見て聞いてぐつと押える喉仏

向日葵に夏の楽しみ聞いてみる

鶴を折る指が折っている平和

雷神のどしや降りをして穢土洗う

俯くとなぜか悲しくなってくる

飯面つけても取っても僕は僕

五七五心のうちが字にならぬ

汗流す自分に決めた約束に

南大阪川柳会

吉川

寿美報

天井に美術の粋が集められ

天井を眺めて明日のおばんざい

天井は揺れているけどまだ飲める

章子

紀乃

歳子

晴美

江美

富喜子

忠

正和

直

耕治

りこ

哲男

美代子

美籠

孝一

折杭

松煙

二英

萬的

多喜子

求芽

天井を話相手にしてひとり

天井のねずみも静か八月忌

ほつた張られて覚めた夢の恋

冷たさと匂いが好きなサロンバス

ラブレターひと呼吸して切手貼る

張り裂ける胸千松は忠義者

張り紙は禁止の上に貼るチラシ

ひび割れたハートは愛で貼り合わす

時代劇貸屋の文字の斜め向き

張り替えた障子まぶしい夏陽差し

鮮やかな素潜り海女の手に鮑

弁古が鮮やかすぎるコマーシヤル

過去を消し蝶変身をして見せる

引き際の美学野茂には惚れている

監獄跡今百日紅鮮やかに

切り札は鮮やか藤川が躍る

茶ころがしつかり鮮やかな襖紗

立読みの本に品格教えられ

飢えた日の記憶も遠く王子割る

難問を秋まで冷凍保存する

姥捨てる長寿の国のまつりごと

栄光も汚名もやがて風になる

ナイフ一本持つて落着く日もあった

これ以上脱くものがない熱帯夜

絵日記の海外旅行誇らしげ

どんな日も妻の笑顔が味方する

栄子

一步

弘泰

和雄

弘子

柳伸

東吉

千里

たもつ

章久

シマ子

なぎさ

雅文

憲太郎

ダン吉

誠

柳弘

忠昭

寿美

学子

集一

尚士

修

洋

清

更紗

川柳クラブわたの花

西川 義明報

優しさは母をモデルに生きている

言い訳の下手な男を好きになる

いい答出たかビールと父の声

不祝儀で幼馴染みがお茶を飲む

都落ち親が故郷で待っている

しつかりと抱いてあなたを羽化させる

昼寝断つセールのベルやめてエナ

それから苦勞話がまだ続く

鬼さえも改心させる蓮の花

門限めぐり押し問答をする父娘

有り過ぎる無いのも困る欲の皮

今日はひま心の掃除しておこう

重い過去背負い八月まためぐる

世間体素顔になれば恐れなし

横道にそれると恐い思い込み

葬式は外資にまかすことにした

名刺など無くて一筋物造り

メモ忘れ名刺の裏へ覚書

ふるりの面影消えるタムの底

せいはいっぱい生きる証をせみ叫ぶ

水増しはしない歳にもメタバにも

信念を変えず見守る鬼瓦

先生もお金払った生徒問う

笑ってはいるがストレス溜めている

愛子

ミツ子

宏至

幸枝

莊司

美はる

克美

いつふみ

義明

宏

正春

欣子

妙子

俊子

晴美

浩三

孝子

和子

八寿子

ふりこ

ますみ

はじむ

たえ子

美代子

鬼に逢い仏にも逢う生きる旅
名刺入れ今は診察券入れに
この名刺受けて良いやら悪いやら
物騒な世間見直す人の道
温暖化防止協力早く寝る
気にかかる追伸読んで電話する

耀一
知佐子
民
君江
博子
一風

ほたる川柳同好会

水野

黒兎報

熊野古道今にも出そう森の精
新記録胸に眩しい金メダル
夏草の繁みに眠る無名塚
先祖より継ぐ田に繁るネコジャラシ
人脈は向う三軒両隣

柳童
禮子
祥風
肋骨
春代

二、〇眩しくないかと案じます
夏休み繁みの下に孫と蟬
眩しい事ひとつ大事にほうせん花
人生の真中生きて悔いはない
繁る葉は大気汚染の清浄機
フラッシュで原稿見えず立往生
秘めた恋破れ樹海にそつと捨て
つわものも最後は人脈にたよる
人脈に頼る業界天下り
勝敗の別なく球児皆眩し

契子
勇治
美智代
いさむ
長一
信男
幹治
久子
黒兎
勝

川柳茶ばしら

板山まみ子報

古いことだけはしっかり覚えてる

秀水

達筆は分かるが読めないの困る
書き順の違いに気づく筆運び
パソコンのせいにしている筆不精
まだ余裕あるはずだったミスの数
よく動く若い肢体がうらやまし

週行
美千代
かつ子
幸子
まみ子

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

はつといて良いの悪いの第三者
ああ妻よ僕の老後ははつといて
泣いてへん一人で帰るはつといて
病人をはつといて妻川柳へ
心経の教えに何時も添い兼ねる
いつも楽しい友と集える有難さ
幸せにまだ酒の味変らない
変られる己と未来時間きされ
戦中派時代変れどわたし流
変り映えしない暮しが心地よい

加津子
烈
シマ子
弘直
喜美子
あずき
ますみ
香住
慶子
能子

むらくも川柳会

毛利

宿題を残し駆け込み汗をかく
宿題に少しは役立つ老いの知恵
私への宿題今は川柳作り
宿題を背負って生きている今日の友
ブルサイドこどもババが幅きかせ
夏空が戻って梅を干し上げる
戦争は心を鬼にさせる鬼

幸
宣雄
定子
彰
美保
秀子
信夫

川柳塔まつえ吟社

三島 淞丘報

梅雨あけを待って一声蟬しぐれ
さりげない言葉で心うばわれる
日の丸を出すのに勇気いる世相
涼しげに浴衣姿は真夏の美
泊り行き新呉浴衣のみだらけ
信じてる約束心が揺れ動く
箸を割り人は出逢いをくり返す
玄人と一目でわかる身のこなし
逃げ足の早い時間を抱きしめる
ふるりの橋は淋しい風ばかり
むらむらがもう笑ってる花の下

惠美子
ます美
喜美
清子
久子
蘭水
瑞枝
俊夫
秀夫
かずこ
安次

もの好きがやたら貯めてる不要品
路地の町歴史をきいて好きになる
好好爺孫が側から離れない
千年紀好き好き好きよ源氏さま
好きだった人が住んでた町も過疎
好きですと言われてみたい古稀の夏
波がしら古い話をぶり返す
どんぐりが作った波紋なら平和
春夏秋冬波の詩聞く島育ち
波しぐれガソリン高価漁も出す
人生の節目ふしめに寄せる波
美しく散ろう散ろうと波の花
一匹の蟻が歴史をつくる夜

叮紅
知恵子
静恵
日出子
桂子
禮子
畔
ちかし
房子
小生
和歌子
昌枝
柳歩

金婚式妻とつくった歴史です

神風が吹けば歴史が狂い出す

ブルの爪古い歴史を掘り起こす

残された歴史へ好きな色を足す

時移り過去の歴史が嘘をつく

失った花がいまでも美しい

もう今は失うものがない強さ

喜寿過ぎて何も失うものはない

失ってその大きさに気づく今

夫逝って佗しと暮る昨日今日

見失う自分励ます八月忌

僕の目を釘付けにしたあのメール

ヨシさまとこっそりメールしています

メールでは伝え切れない胸の内

メールいや貴方の文字を待っています

着メロを聞いて少年発芽する

時どきは覗きたくなる娘のメール

川柳花の輪

妻谷 重風報

スローライフ二人楽しむ古希の春

ゆつくりと長寿の祝辞かみしめる

ゆつくりと団扇にのつた子守歌

青春の古傷そと写真帖

元カレの写真の始末つけにくい

俄か雨虹が出そうだ写真とろ

証明の写真は嫌や正直で

注 湖

多賀子

たけし

治代

幸

茂美

多喜

螢

政子

英子

スズコ

蘭

ちえこ

薫

幸子

紫見

浜丘

重風報

薫

重風

とし子

泰子

音成

ミヨノ

善栄

写真には写りませんか胸の内

アルバムに信じられない僕が居る

父のごと老いを生きんと見る遺影

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

半分をさし出した手があたたかい

車椅子半分妻に支えられ

それなりの餌ではねずみ寄りつかず

何も彼もまだまだ亡母に及ばない

ご用心上手に税金吸いとられ

お料理のうまさを決める塩加減

したたかに生きたねずみの認知症

玉手箱封印といったばかりに

ゆく道を閉ざした後期高齢者

はびきの市民川柳会

アイスノンエコをしますます熱帯夜

別居中氷点下まで冷えました

熱少し氷枕は波の音

夏バテや散歩の犬も引きずられ

給食も残さず食べるカレーの日

うなぎよりカレーライスの土用丑

母作る昔のカレー懐かしい

パパさんの得意な料理カレーです

夏のカレーにビタミン剤を混ぜておく

レトルトと知らずに褒めているカレー

やすの

一幸

克衛

恵美子

かつ子

好栄

ちよえ

聖子

伸子

はるみ

博利

清泉

章司

アヤ子

扶美代

美喜

猿杓

りつえ

正子

敏

美代子

六点

激辛で叩くわたしの脳細胞

若い日の希望の星も還暦に

ふる里に星の童話が降りしきる

星三つ頂きました家族から

同じ星の下で格差に泣く笑う

日の丸をすかせば見える星条旗

新知事は期待の星で盛り上げる

望郷の虜囚に星が凍っている

この暑さ寿命の縮む思いです

老母さんが小さくなつていとおしい

検診の度身長が縮んでる

震度七心臓縮む怖い音

縮んではおらんぞ俺の肝つ玉

洗いすぎ縮んだ浴衣ぬい直す

核実験の縮む記事に会う

身を縮め明日のジャンプへ備えてる

強かに生きて後期の波かぶる

逆境へ芯の強さを見せる妻

豊中もくせい川柳会

江見 見清報

奥吉野の風に吹かれて夏泊り

耳鳴りか蟬が敗けずにやかましい

病人には困る医院の盆休み

薄く時期が遅れ静かに咲きました

渋滞の中でケータイ託びている

自信持ち肩の力を抜けと父

みつこ

恵子

一知

ちづる

光男

泰子

耕策

重人

喜久子

ヨシ枝

一壺

一筒

フジ

ダン吉

いさお

久仁子

庸佑

一度出た里にもどれず蟬の泣く
 言い負けて花を待たせた事にする
 白寿まで生きる自信のウォーキング
 跨ぐな父思い出す新聞紙
 遅咲きの花道にある晴れ姿
 出遅れて取りもとせず八十路すぎ
 一度ぐらい夫を殴ってみたかった
 ただ一度の青春戦争で消えた
 飼い主の内緒を喋り出すインコ
 一度とは言わず明日に賭けてみる
 自信ある熟女は尻で席を取る
 官邸で胡坐をかいている過信
 親心立派な名前がつけられる
 リセツトは出来ないんだ子ども達
 遠花火体感温度二度低下
 落書きのように消せぬ胸の傷
 ハス植えて浄土へ土産できました
 人知れず意地で燃やしているいのち
 高ぶりをバワーに変えてゆく自信
 五輪とや飢餓も戦もある世界
 僕よりも遅れる人がいる安堵

いずも川柳会

佐藤

治代報

勇 治
 十八娘
 宇乃子
 則彦
 満寿巳
 肋骨
 寿美子
 見清
 美智代
 隆
 美義
 尚士
 都代子
 夢
 佳恵
 寅次郎
 巴子
 求芽
 葉子
 幸雀
 正雄

向い風わたしのスピード邪魔をする
 マイペース守って暮らす置時計
 ともかくも一杯の泡欲しい口
 暗算の鈍る速度で不正解
 再会はビールの泡も嬉しそう
 マネキンを真似てちよびり若返り
 わくわくと靴屋の靴を履いてみる
 釣り竿の先にわくわく下げておく
 スピードも儂い過去となった独楽
 シャボン玉に成り損なつた泡です
 スピードに命をかける流れ星
 暴落の野菜も揃え出荷する
 わくわくと一色を足すわたしの絵
 常連が揃うと牌が弾け出す
 個性派で揃う吾が子の未来追う
 亀は亀スローで生きて価値がある
 粒が揃う中期高齢者の怖さ
 五欲みなマメでわくわく止まらない
 豆紋り揃えば厨はずみだす
 加速する老いを絆が温める
 人のくせ盗み上手に真似ている
 わくわくとさせてなんにも出てこない
 減速で行きます八十路半途
 プラモアルわくわくしてる出来上がり
 わくわくを買って蹴られた宝くじ
 にんげんを真似る十七歳の台詞

キミエ
 たえこ
 房緒
 煩悩児
 佳子
 敬子
 治代
 多喜
 歌子
 としき
 すみこ
 房子
 喜子
 昌枝
 左余
 ちえ
 祐次
 浜丘
 玲子
 寿美
 幸
 茂美
 きみえ
 まこと
 文子
 章峰

格好と真似から入る趣味の道
 川柳塔すみよし
 岩崎 公誠報
 ちかし
 萌
 ヒロ
 克博
 桃花
 篤子
 幸子
 岳人
 りつえ
 裕之
 半銭
 かりん
 定子
 シマ子
 遠野
 チエコ
 蕉子
 ばっは
 美籠
 伸子
 太郎
 舞夢
 (奥)五月
 (矢)五月

妻の手を握っていると思つた
司馬遼の思いに太い芯がある

昌紀
公誠

尼崎尾浜川柳会

田原 宏一報

玉音を頭を垂れた夏の昼
スーパールの冷房頼るお買物
金メダル裏に涙の物語
若い肌照る太陽にはねる水
バスタオル姿であける冷蔵庫庫
早よ起きや組板の音母の声
ママでも金果せなかつた無念の銅
ハリポッター家事の手抜きをそのかす
仰天だシャイな貴方のお月様
路地裏を照らす昭和のお月様
夕立に蟬も一息つく猛暑
さりげなく照らしてくる七光り
仏壇の冷酒蒸発早くなり
見覚えの日傘が先に会釈する
進む道待ち構えてる風と波
曇る日も照る日もあつて生きている
冷やかな視線の中で詫びを入れ
内心の火照りを気付かれぬように
冷汗をかいて繕う二枚舌
ほとんどは頭冷やせばすむ話
残照へ両手を合わす明日の無事
冷淡に見えて情愛には脆い

宏一
江美
勝巳
よし子
五月
野薫
亀与子
政江
里江
耕治
靖鬼
美代子
美義
雪菜
孝一
朋月
かずお
紀乃
正治
求芽
鹿太
美籠

岩美川柳会

石谷美恵子報

かわいげにも言う人は腹黒い
呆けた妻がかわいい返事する
百歳の笑顔ひとりの敵もない
願わくばかわいく歳を重ねたい
かわいいが邪魔な新芽はむしりとる
野の花にかわいいいわねと声をかけ
かわいいの殺し文句を疑う目
次々の値上げラッシュにうんざりだ
ナイフ包丁もうんざりだやめてくれ
献金をうんざり顔で懐へ
うんざりとするほどこみはすぐたまる
二枚舌うんざりさせることを言う
ケイタイを睨みつけてる孤独な日
美しい国ようしなかつたから睨む
安過ぎるうなぎ睨んで思案する
睨まれて笑顔ウインクして返す
あせるなよ大器晩成睨んでる
頼まれもせん事しては睨まれる
大トロは睨んだだけで回す寿司
責任を押しつけられている難儀
難儀だな口ほど手足動かない
菓子箱に難儀な話つめてゆく
原油高難儀ですなと合ことは
人間は難儀泣いたり笑ったり

蟹郎
重忠
忠良
節子
公子
菖子
美佳
圭一郎
稔
幸安
雅安
かつみ
孝男
はるお
よしえ
たぬ
幸枝
清帆
幸子
螢
公乃
一瑤
きみ子
茶子

岬川柳会

八十田洞庵報

人間に化けて難儀な世を渡る
灰明り見つけ難儀のなか生きる
憧れはあんなかわいなお祖母ちゃん
化粧する優先座席眺めてる
年の功忘れ上手を使い分け
あの人が別人となる得意技
ピリオドをどっちにするか揺れている
正直に馬鹿がついても曲げぬ口
腰痛にリハビリ誘う老い仲間
甘い水こちらと詐欺が来て誘う
幽玄の世界へ誘うはたるの灯
問わずとも答えがわかる老いのしわ
高齢者乗るも乗せるも安全運転
虫の音に癒やされ眠る夏疲れ
傷口の噂を好きな壁の耳
燃える夏地獄の蓋も飛んだのか
お断り出来ずお酒もパスも酔い
小雨降る心配よそに友つどい
誘ったか誘われたかはヤブの中
解答は白紙でもよい合格す

倉吉川柳会

竹信 照彦報

大小の波が地球をもてあそぶ
新閣僚こんどはどんな波立てる

一粒
和子
美恵子
とみ
寂子
茂平
和香
年子
悦子
蛙城
東吉
桜琴
圭子
洋子
令子
富美子
貞夫
富美
和美
洞庵
康子
泰輔

穏やかな波が飲み込む離岸流年ごとに荒くなるのが老いの波母の波ころろの中に畳みこむ汚染され波打ち際のゴミの山八十路過ぎ大波小波振り返る徳俵あつて人生おもしろい横綱を転がすためにある土俵狭いねお相撲さんの仕事場はさあ選挙土俵の外は燃えている七人の敵が土俵の外で待つ遺産相続した嫁は土俵外総理の座わたしとくなくない土俵際丸を書き土俵の線でもめている高齢化少子化著しい変化負の遺産環境破壊著し著しい弟子の上達師をこえる著しいゴミの山には無いマナー教育界の腐敗咄然とするばかり二人の子比べようない違う道貧富の差著しくて住みにくいひよとして人間みんな馬鹿者かこの顔に女としての化粧するよくばよく監督として野村さん人として鬼畜の心持つ怖さ老醜は女としての悩みごと凜として夫の遺影が我を見る

龍枝 鬼一 きみ子 貞子 日出子 重忠 石花菜 みちる 賀寿恵 萩江 京子 英子 美津恵 螢 悠子 風露 喜美子 よしえ 和子 瑞子 次男 由紀子 けいこ 茶子 和枝 酔芙蓉

ひよとしてガラスの靴を捨てたかも戦場を世界遺産として残す

六甲川柳会

伊勢田

毅報

イヤリング山を動かすこともある母は海父はあくまで高い山乾杯をしないと落ち着かぬビール孫と飲むビールが歳を忘れさす締めつけるもの解き放ちいざビールビヤ樽も願まけですよメタボ腹地ビールの味重ねつつ旅をする下戸なのになぜか父さんビール腹将来が楽しみですよモミジの手楽しみは長寿をめざし指を折る君となら何をするのも楽しいよ万歩計スタミナ切れで夏期休暇この夏はちよつと違つとガラス鳴くアリバイを頼める人のない都会一言で淋しい気持ち吹つ飛んだパラサイトいつまで親とくらすのか髪染めて若くなつたと笑顔みせうつつ気分・一二の三でとんでいけこの暑さ蟬の声にて二割増し指を折るたびに昭和が遠くなる謎めいているから君に惹かれてる満願の声高らかにきこえう蟬

祐子 照彦 いわゑ みつ子 能子 寛子 純江 基輔 千賀子 淳子 光久 繁義 史郎 政一 美恵子 無限 弘子 順子 忠貞 春香 茂 和郎 武彦 孝子 (小)

足踏みをした所だけ覚えてるカトレアの蕾のぞいたその日からジャンパーと帽子で後期子を守る寂しくてことさら虚勢張つておく

川柳さんだ

北野 哲男報

目配せに気付かなかつた目の悪さ水不足蛇口ぐるぐるまきにされ故郷へ心の地図で帰る夏花切られ過ぎ余生はビンの中お祈りをしたから後は運まかせ飛来したカブト捕えて値踏みする長寿国世界の人気回る寿司改革はいい火の粉が来なければ飲みすぎた朝の鏡に棲むお化けゆつたりと生きたい後期という枠で遠回り無駄でなかつた日々至福朝刊を読みきらぬうち来る夕刊冬が好き冬になつたら夏が好き銅メダルでも世間の風は温かい涼風がご馳走である熱帯夜目配りも我が身のためが増えて来る大家族風がまあるく抜けていく

川柳塔打吹

野口 節子報

孝子 美穂 毅 楓 楽 和代 美紗子 ちあき 見 歳子 好文 雅司 二英 朋月 千代子 キヨミ 一泉 正和 忠 順子 哲男 章子

げらげらと笑いおれるか温暖化

げらげらと笑って妻の目をそらす

げらげらと飲ませた酒でよく笑う

わいわいげらげらと熟女弾ける旅の夜

青春の過去をげらげら同窓会

下手な芸げらげら笑う愚子たち

げらげらと水吐き出す冷蔵庫

泣いた子がげらげら笑い軽くなる

太陽はゲラゲラ僕はイライラだ

裏金を送り表で裁かれる

父母を送って里が遠くなる

山奥に愛送りたい人が住む

歳とった親に今でも金送る

港では待ってる女がいるはずだ

出港せぬ漁船が並ぶおらが海

舟唄をうたう港の看板娘

港から時折ひらく時刻表

港町イガイの飯に舌鼓

ふる里の港は知らぬ人ばかり

飛魚を漁つてもどつてくる港

辛いです女は港言われても

大山が見える港にたどりつく

港までスキップ弾む大漁船

ハンゲルが溢れ港がややこしい

ぞんざいな言葉が温い港町

人はみな母の港を出て惑う

清

たけ代

紀美恵

龍枝

禎元

照彦

京子

美知江

完司

美代子

美美子

富恵

幸子

義人

みち子

玲子

美ツ千

善江

睦子

螢

和子

重忠

滋

三津子

芳光

玲坊

阿久悠が鳥賊をあぶっている港

引折れ母の港に辿りつく

川柳大版

長井

善純報

オーイお茶返事ないけどお茶が来た

いつもよりその服まじや細みえる

まじやな貧乏しても子は元氣

寝込むよりうるさい家内まだましや

わたし化けたらましになれますの

歩いてるあんたはましや車椅子

謝って済んでるうちはまだましや

七並べできるほどある診察券

カッコよくカード切るけど無一文

衣食住カード利用の上手下手

病院がポイントカード試行する

作り過ぎカードに聞いたあんた誰れ

カードには嘘は絶対通じない

幸せの合図は知らぬ間に過ぎる

アデランス曲がつっていると目で合図

はいポーズピースする人笑う人

合図なし借金取りがやってくる

子のシグナル気づかぬままの共稼ぎ

ねずみ取り合図の旗が憎らしい

切れる子の合図が見えぬ闇社会

毒のない皮肉は老いの潤滑油

石花菜

節子

善純報

章久

美世子

信醉

東吉

朝子

美花

柳弘

柳昌

まつお

勝弘

鉄心

彦太

かよこ

芳香

修

花笑

珠生

紀雄

一風

五月

一步

喜楽

毒古の政治家いまはいなくなり

毒で無い薬で今日も医を信じ

禁煙し体の毒が抜けて行く

薬にも毒にもならず生きている

毒ですと言われたお酒なぜ旨い

あの御仁毒にも薬にもならん

母さんの毒消しになる子の寝顔

毒舌で言いたい事がたんとある

すがお

洛醉

司

青道

孝一

和

美籠

善純

米子住吉川柳会

渡辺多美子報

若鮎はダムをジャンプで遡上する

ご祈祷の数珠を手首のアクセサリ

夕焼けるあしたの大地疑わぬ

預金無く振り込め詐欺も敬遠す

考えまい先の不安がつるだけ

美しい国に生まれて恥ずかしい

健康は心と身体いたわって

富柳会

池

森子報

憎しみも妬みも消していく曆

次回こそ言わねばならぬ有難とう

身と心だましまして生きている

留守電に愛想笑いも入れておく

あくびして妻の帰りを待つ夫

膝の猫上目使いで見えるあくび

新聞受け満杯にした日の誤算

高鷲

和子

登子

紀

鐘造

アキ

ひろし

登子

和子

公一

登美枝

雪枝

ふみ

正二

多美子

登美枝

公一

登美枝

公一

登美枝

公一

登美枝

公一

登美枝

公一

登美枝

公一

登美枝

舌鼓打つて女房喜ばす

性善説信じて無人販売所

告白をためらっている沙羅双樹

三回忌亡夫は留守とまだ思い

傷つけていたとは知らず青いちご

生あくびされて逃げ出す漫才師

異邦人だけが国技の綱を締め

生き方の次元が違ふ鍋と蓋

視聴率あくびの人も数に入れ

沈む陽へ風の答えをじつと待つ

左手に持ち換えて振る応援歌

夕焼けを背中に鍵を開ける僕

盗まれて以来留守です恋心

悲しみを消せる雨なら降るもよし

魂を闇へ放つて行く螢

次の世へ恩返しする本を植える

十指みな動いて美しい老後

留守番は昔わたしで今あなた

くどい説教聞いている心留守である

次々に咲く水蓮の水濁る

浮き草の足ぶらぶらと夏を寝る

玉手箱には切札の二三枚

知らないことにして一度だけ許す

堺川柳会

河内

月子報

鯨より煮干切れたら困ります

時雄

壽峰

未知

千華

澄子

深雪

淳司

七朗

寿之

信子

鬼焼

恵

武人

奏子

伸雄

よしみ

佳子

紅紫朗

彦次

よりこ

千恵子

晴美

欣之

森子

陰湿な言葉で人を刺すサイト

いじめなど無かった頃の紙芝居

王様は雑魚の歯軋り聞こえない

嫁の服うまく着込んでクラス会

旧姓でわたしを呼びに来た螢

しめ鯖が出て休肝日吹っ飛んだ

振り向けばただケータイが過ぎただけ

手を振って雅号で呼んでくれる友

魚屋の声が聞けないバック詰め

食べ方が好きで一緒にになりました

寄せば引き引いては返す母の海

会心の笑みは寢床についてから

お父ちゃん上手に株で損しはる

原油高マグロもイカも生き延びる

腹減った言うてりやそれですむ夫

お疲れと妻がビールを注いでくれ

お上手も過ぎれば厭みとも聞こえ

教育界もびっくり箱をあけました

お喋りの鳥あけすけにバスツアー

ドイツ語のケーキを食べて舌を噛み

線香を吸った仏飯ありがたし

別腹もひとつだけではなさそうだ

あの女と話すお腹が立つてくる

骨密度笑いすぎると危険です

おさな子と目と目をあわし聞き上手

ひらめかぬ日にも鉛筆にぎつて

玄也

俣子

鐘造

日の出

扶美代

千代

みつこ

八千代

梓

真澄

像山

好

としお

山彦

五月

さくら

半銭

かりん

深雪

天笑

朋月

つづや

恵勇

公誠

ルイ子

美代子

目出し帽ちよつとびっくりさせ過ぎた

タイプではなかった人と四十年

父の血を引いて世渡り損ばかり

翠洋会

安土

ゼロコンマ一点の差でメダル逃げ

句読点打って一息夏の雲

点と線迎れば花の浄土かも

点滴は生きる生きろという零

一点の非から綻び始まった

濁点を打つと言葉が重くなる

花つきあい朝顔の種交換し

朝顔の蔓も私も杖頼り

朝顔の絵日記兄の丸写し

大輪の朝顔絵日記はみ出てる

かたくなに青い朝顔だけ咲かず

朝顔の種来年の夢を抱く

共稼ぎ定年前に建つホーム

ご免ねと老人ホームの母見舞う

意地悪な石につまずく水たまり

青息吐息青い地球が揺れている

金婚を町内会に祝われる

散歩道蟻一匹もふむまいぞ

切り札をついに出したぞいい勝負

記憶みな蒸発しそう熱帯夜

のこり火花火全部燃やして闇に居る

瑠美子

月子

雅明

理恵報

舞夢

満作

志華子

れんげ

捷也

昭

弘子

浩二

蕉子

恭昌

みつ子

楓楽

日の出

尚士

春

水昇

さと美

千梢

照子

正雄

理恵

関西電力のお得意様である
骨密度低いわりには頑固者
盆灯籠父母の思い出連れてくる
気負わずに妻の介護を生き甲斐と
銀メダル金とは違う重みある

川柳ねやがわ

籠島

恵子報

すみ子
富子
茶々
げんえい

散り際の美学を思う揚げ花火
人生のお利息ですか余生とは
この次は私が入る墓掃除
美しい笑顔についているえくぼ
鬼の攪乱猛暑日が続くせい
利息など要らぬタンスで寝かせとく
骨埋める町で眺める遠花火
忙しい心の隅に置くゆとり
秋はもうそこ夢の種を蒔く
テレビ付け夜半に北京見えています
母の目は助ける位置で待っている
手助けが身に沁みてますすきま風
古希過ぎて月日の流れ忙しない
すいとんに助けてもらった命です
差し伸べる手にニツコリと白い杖
故郷の父と見上げた遠花火
記入した利子が並んでいる五円
孫来ると先ず花火買うおばあちゃん
ワープロが字の下手な手を下手にする

弘一
洋
仁清
修
ルイ子
さち子
たもつ
寿子
一風
三郎
郁夫
麗
鈍甲
朝子
柳弘
賢子
かすみ
日出子
弘風

国会に花火を揚げてみたものの
手助けを待っているのはこの私
一枚のよしずに朝顔が息う
削いだ耳面布いっぱいに黄な炎
仏壇に今朝初生りの桃光る
素晴らしい朝だ茶柱一本立つ
千人がそれぞれに抱く千の過去
皺出来た心へたと水をやる
人格者例外として扱われ
もう一度妻に賞与を捧げたい
南極のゴミを集めて風呂敷に

とし子
博泉
恵子
なたよし
茜
集一
あやめ
典子
一笑
勇太郎
秀雄

第18回コスモス祭り川柳大会

日時 10月12日(日) 締切2時

場所 島根県 飯南町 さつき会館

兼題と選者 (各題2句)

「さわさわ」 伊藤 玲子 選

「温もり」 石橋 芳山 選

「もてなし」 安黒 登貴枝 選

「恵み」 熱田 圭詩朗 選

「山脈」 長岡 良一 選

会費 2000円 投句料1000円(10月1日)

投句先 〒690 飯石郡飯南町頃原2278

主催 東三瓶コスモス祭り実行委員会

共催 とんばら川柳会

倉敷市文化際

第17回天領倉敷川柳大会

とき 11月3日 開場10時・締切11時30分
ところ 倉敷市立美術館3階講堂

TEL 086-425-6034

参加料 1500円(発表誌呈)

(昼食は各自お済ませください)

兼題と選者 共選・各題2句・読み込み可

欠席投句拝辞

【生】 西村みなみ(倉敷)

【色】 木下 草風(岡山)

【行】 東 おさむ(岡山)

【完】 樋口由紀子(姫路)

【行】 西川けんじ(岡山)

【完】 池 森子(富田林)

【完】 石部 明和(気)

【完】 北川 拓治(浅口)

【完】 天領倉敷川柳大会実行委員会

【完】 倉敷市文化連盟

【完】 倉敷市 山陽新聞社 他

【完】 問い合わせ 〒710-0061 倉敷市

【完】 浜ノ茶屋 11-3 坂井 半升

【完】 TEL 086-424-5732

柳界展望

総合一位・特選

活断層の上華やかにカーニバル
木本 朱夏

○第55回八尾市民川柳大会は8月24日八尾文化会館に於て146名の出席により開催。同人の天位

丸刈りの決意に恥じぬ志

宮西 弥生

一本の薬が都会の巢に混じる
岩崎 公誠

血の絆代り番こに母を見る
米田 恭昌

○第16回和歌山県川柳大会は9月7日開催された。参加者212名。同人の秀句は次の通り

雑巾を絞るかたちで耐えている
古久保和子

▼計報▲

●春城武庫坊氏（参与・尼崎市）8月31日逝去。88歳

9月2日の葬儀には河内天笑主幹、奥田みつ子相談役他多数参列した。追悼文100

頁、101頁に掲載。

●小林芳子さん（相談役小林由多香氏夫人・鳥取市）8月28日逝去。8月30日葬儀が行われた。80歳

▽出版△

○乙倉武史氏（同人・高槻市）は8月1日付で句集、卒寿記念川柳自分史「つれづれ」を発行（A5版244頁）

▽同人動向△

「新老人の会」（会長日野原重明）阪奈和支部に川柳の会「法円」（教室所在地大阪市内の法円坂）が誕生した。講師には奥田みつ子さん（相談役・西宮市）お問い合わせ先中村れんげ（TEL 06-67779-6748）

▽訂正とお詫び△

9月号3頁、目次下11行目、他人のようなく仙人のようなど。

▽新誌友紹介△

岸和田市 高見 泉滴

新同人紹介

小林 ぼし わ こ

—天笑・みつ子・いわゑ・保州推薦

藤本 ちと 直

—天笑・みつ子・いわゑ・保州推薦

原田 すみ子

—楓楽・朱夏・恭昌推薦

紹介者

河内長野市

紹介者

竹原市

紹介者

神戸市

紹介者

佐賀市

佐賀市

井伊 東吉

山本 莞子

板尾 岳人

六田 半徳

小島 蘭幸

早川 孝子

山口 美穂

山田 芳教

光武 悦子

常任理事会 9月8日（月）出席19名①第14回川柳塔まつり最終確認②19年度会計決算報告③高野山合祀関連④

新年度役員⑤六賞選考について⑥定例確認事項⑦各部

報告、同人3名の承認⑧その他 次回（臨時）常任理

事会9月26日（金）1時30分、

句会名	日時と題	会場と投句先
東大阪市 川柳同好会	19日(日)午後1時締切 第36回 市民川柳大会 遊ぶ・もがく・食べ物全般・愛・道・感じる・街	東大阪市社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
川柳 藤井寺	19日(日)午後2時締切 保険・手加減	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
川柳 ねやがわ	19日(日)午後1時半締切 納得・ムード・敬う・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	19日(日)午後1時半締切 川沿い・プレーキ・仕事	(淡輪17区集会所) 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
岸和田 川柳会	第58回 岸和田市民川柳大会 19日(日)午後1時締切	岸和田市立福祉総合センター 詳細9月号114頁 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
もくせい 川柳会	20日(月)午後1時50分締切 洗う・おまけ・うっかり 自由吟	豊中市中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	21日(火) 吟行会 再び・遊ぶ・空気・自由吟 席題	会場 グリンピア三木 〒669-1515 三田市大原1553-12 北野哲男
川柳クラブ わたの花	24日(金)午前9時半から 半額・湯・拾う・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
和歌山 三川柳幸会	25日(土)午後1時から 発見・この世・握手	和歌山市商工会議所4F 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
川柳塔 すみよし	25日(土) 締切り 2時45分 普通・金・男	10月のみ変更(住吉区万代。090-9275-0827へ問合せ下さい) 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
はびきの 市川柳	26日(日)午後2時締切 しんみり・ドラム・穂・消す	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん社 吟	26日(日)午後1時より ネコババ・たっぷり・手口	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0824 鳥取市行徳2-632 田中かをる
京都 塔の会	27日(月)午後2時締切 はにかむ・売る・献立	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
松露 川柳会	27日(月)午後7時半から 嘘・涙・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
南大阪 川柳会	27日(月)午後6時から 予想・呆れる・輝く・ピリオド	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

10月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　　ら	2日(木)午後1時から もしも・虹・律義	奈良市立中部公民館4F (近鉄奈良駅④出口歩5分) 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城北会 川柳会	4日(土)午後1時開場 顔・遠い・のほほん・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉吉会 川柳会	4日(土)午後2時締切 いし・落語・遠い	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
富柳会	4日(土)午後2時締切 村・移る・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川柳塔 唐　　津	6日(月)午後1時半から 冬・終わる・イベント	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
堺川柳会	誌上大会 10月10日締切 ひみつ・運・宝・いのち	投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳大阪	11日(土)午後1時から 手段・点・じわじわ	地下鉄御堂筋線天王寺駅「東研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 打　　吹	11日(土)午後2時締切 ひとつ・面・ふらふら	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳塔 みちのく	11日(土)午後5時半 茶・唇・瘤	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
八尾市民 川柳会	15日(水)午後2時締切 秋冷・聞く・むしゃむしゃ 雑詠	山本コミュニティセンター3F (近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 わかやま 吟　　社	12日(日)午後2時締切 客・大声・どンドン 「あれ・あの・あそこ」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	13日(月)午後1時開場 感性・好き・スランプ・自由吟	西宮北口南自治会館 阪急西宮北口駅南出口南西へ徒歩200m 〒662-0841 西宮市岡度町2-19-515 山本義子
ほたる 川柳 同好会	14日(火)午後1時半締切 平均・乱・するする	豊中市立蜷池公民館 阪急・モノレール 蜷池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
尼崎 尾浜 川柳会	14日(火)午後2時締切 神・怠る・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
川柳塔 ま　　つ　　え	18日(土)午後2時締切 力・遠い・拭く・いきいき	松江市西津田 松江総合文化センター 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子

編集後記

☆六賞を受賞された10名の方々おめでとうございま

す。心よりお喜び申し上げます。益々の活躍、健吟を期待してやみません。

受賞されなかつた方々も次のチャンス逃さぬよう挑戦してください。

選考規定は一部改正されたものの、平成11年からの選考法により、今回の受賞決定をみました。

規定については、意見をとり入れながら常任理事会できめ細やかに検討がなされる予定です。

☆一路集等、課題吟の題は注意深く見て、作句して下さい。時々読み間違いがあります。たとえばビント↓

ヒント。ざわざわ↓わざわざなど見誤りのないよう、お気を付け下さい。

☆秋風の訪れと共に、計報が舞い込みました。かねて病気療養中とは聞いていました……

鳥取県でご活躍の川柳塔相談役小林由多香さんの奥様と尼崎市の参予春城武庫坊さん、共に八月末逝去されました。

武庫坊さんとは、同じ京都出身なので、よくあるさとの話が弾みました。

また軍人として、中国東北部に駐留しておられた頃の話をよくしておられたのを思い出します。

おしどり川柳家の武庫坊さん、ご夫婦そろって昨年の夏第25回夜市川柳大会にご出席された折りお目にかかったのが私にとっては最後となりました。

「冥福心よりお祈りいたします。

(希)

ひとこと

遅いメダカたち

初心者を対象にした川柳の勉強会「メダカの学校」が六甲の地で発足して早一年半が過ぎた。第一回目の勉強会は二五名の参加を得、大盛会であったが、二回目から少しずつ減り始め二十名を割るまでになった。その後、粘り強いチラシ作戦が功を奏したのか徐々に増え始め、現在、二八名に達した。

メダカの成長は早く回を重ねる毎に遅くなってゆく。嬉しい限りである。各人の川柳に取り組む姿勢にも頭が下がる思いである。メダカの作品の中から一日に一句自分に課せてみる祝電を五七五で喜ばれ空泳ぐ夢を持つるメダカたち勉強会は前もって知らせている兼題二題に自由吟と席題である。毎回百二十句ほど投句がありベテラン顔負けの佳句も多くなった。後日、添削通信として各人に送付しているが、それが待ち遠しいと喜ばれている。(山口光久)

★秋ふたりまるで果物静物画 薫風

★本誌「川柳塔の川柳讃歌」でお馴染みの木津川計氏が『都市格と文化』大阪から全国へ(発行・自治体研究社・一八〇〇円)を上梓された。

★「人間に格があるように都市にも格が備わっている。それを都市格と捉えるなら、人格者が目指されるように高い都市格も追求さ

れるべき目標である」とは氏の日頃からの持論。

★目次を見てみよう。○大阪の都市格はなぜ転落したのか○かつて大阪は含羞都市であった○都市格とは何か○橋下府政下の大阪○落語と漫才の時代考○横山ノック・橋下徹知事への直言など、書き下ろしを含む。

★氏の文章ははんなりとやさしい語り口でありながら、その切っ先はやわらか

く鋭く、内容は辛辣である。文中に見える川柳の数々に

★氏は京都生まれの大阪在。季刊雑誌「上方芸能」発行人である。表紙には「芸能文化の広がる都市に」を謳う。大阪を愛すればこ

そのやむにやまれぬ念いから出た批判提言の数々である。ぜひ橋下知事に読んで頂き、府政立て直しの一助にと願う。(朱)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(12月号)」

地名

都道府県
市町村
姓
雅号

きりとらせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「去る」 (10月15日締切)

12月号発表

木本 朱夏 選 — 共選 — 高瀬 霜石 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
県道府

姓
雅
号

地名

市都
県道府

姓
雅
号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者	☐ ☐
	〒 —	 		☐ ☐
				年 年 月 月 から から 一年 半年 9 5 8 0 0 0 0 円 円 振替 00980141298479 該当の方に○をつけて下さい

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

〒543-0052

川柳塔社

(電話 06-6779-3490)

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



作品募集

12月号発表 (10月15日締切)

初歩教室 「終」 (3句) 「イイベント」 「冬」 「終」 「終」 「終」

一路集 (3句) 西井永 三宅川保州担当

檸檬抄 (2句) 木高瀬 本朱夏 共選

愛染帖 (3句) 新家蘭 天笑

水煙抄 (8句) 小島内 天笑

川柳塔 (8句) 河内天笑方 堺川柳会

1月号

檸檬抄 「未来」

一路集 「祈る」「開く」「みかん」

初歩教室 「あいさつ」

第60回 大阪川柳大会

日時 11月15日(土) 13時開場

場所 『大阪市立中央青年センター』7階
大阪市中心区法門坂1-1-35
TEL 06-6943-5021

JR「森ノ宮」・地下鉄中央線「森ノ宮」・谷町線「谷町4丁目」徒歩10分

会費 1,000円 (発表誌呈)

宿題 締切 14時 各題2句 席題なし

「ささやく」 西内 朋月 選 (川柳塔社)

「厳しい」 西 美和子 選 (番傘川柳本社)

「衣食住の今を詠む」

井上 一箇 選 (川柳瓦版の会)

「便利」 西出 楓葉 選 (川柳塔社)

「ストップ」 嶋澤喜八郎 選 (川柳文学コロキウム)

「城」 松本初太郎 選 (番傘川柳本社)

「悪友」 久保田元紀 選 (川柳天守閣)

賞 各題の秀句に大阪市長賞贈呈

主催 番傘川柳本社・川柳塔社・川柳文学コロキウム・川柳天守閣・川柳瓦版の会

後援 大阪市

本社11月句会
7日(金) 午後1時から
兼題 「さっぱり」「溝」「掴む」「リード」「苦手」

第27年度 夜市川柳募集

第5回 「神」 西口 いわゑ 選
ハガキに3句 10月末日締切

投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

定価 八百円 (送料84円)

半年分 五千円 (送料共)

一年分 九千八百円 (同)

二〇〇八年平成二十年 十月一日発行

発行人 河内 権治

編集人 山本 希久子

印刷所 美研アト

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一四一七
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話 (〇六) 七九一三九四〇番
振替 〇〇九八〇四二九八四七九番

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

鳥取県総合芸術文化祭

第32回 鳥取県川柳大会

とき 11月16日(日) 10時開場 開会13時20分
ところ 米子コンベンションセンター 小ホール(二階)
米子市末広町74 J R 山陰線「米子駅」下車三分

兼題と選者(各題2句・席題なし・出句締切12時)
駐車場完備 TEL 0859-3518111

「励ます」 小西 雄々 選(鳥取県)

「選ぶ」 谷口 次男 選(鳥取県)

「好き」 小谷美ツ千 選(鳥取県)

「身」 竹治ちかし 選(島根県)

「油断」 大家 風太 選(岡山県)

「楽器」 赤松ますみ 選(大阪府)

「らしい」 川上 大輪 選(和歌山県)

表彰 鳥取県知事賞ほか(計7賞)

会費 2,000円(作品集・昼食呈)

欠席投句 1,000円(小為替) 10月25日必着 用紙自由

ジュニア部門(事前投句)

「先生」(2句・無料) 小林由多香 選

投句先(問い合わせ先)

〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々方

第32回鳥取県川柳大会実行委員会 宛

TEL 0859-6211520

主催 鳥取県川柳作家協会・文化団体連合会 後援 米子市ほか

オニザキの

すりごま

自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50年。

オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。



株式会社 オニザキコーポレーションセルス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050